

# INGOKU no UTAGE





欲望ニ踊レ

純情ヲ踏ミ躡レ



## 0.邪神の供物

ふと意識が戻ると、暗がりの中。目深にフードを被った男とも女ともつかない人物たちに覗き込まれていた。

その数、六人。等間隔にぐるりとマサキを取り囲んでいる彼らは、口々に呪文らしきものを唱えては、マサキの身体に得体の知れない液体を振りかけてくる。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。咽返るほどに立ち込める甘ったるい香り。香を焚いているのだろう。燻る煙が鼻に入り込んで、マサキの意識を曖昧なものとする。

コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。痺れて動かない手足に、生温かく濡れている身体。マサキはそこでようやく自分が裸に剥かれていることに気付いた。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。一体、どうしてこんなことになってしまったのか。働かない頭ながらゆつくりと記憶を探り出す。

月に一度の市が立った町角は、目玉商品を求める人々でごった返っていた。魔装機の他の面々や、リユーネに引立てられるようにして赴いた町で、マサキは市に迫り着くより先に、彼らとはぐれてしまった。どうにかして再び彼らと合流を果たそうと、人波の中を北に南へと移動してい

る最中だった。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。背後に感じた尋常ならざる気配。その直後、うなじに感じた微かな痛み。マサキが振り返ると、背後に立っていた町人と思しき風体の人物の口元が歪んだ。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。恐らくはその人物が、マサキのうなじに針と思しき物体を突き立てたのだ。そこにはマサキの動きと意識を封じる薬品が塗られていたに違いない。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。

身体を濡らしている液体が何であるのか。微かに漂ってくる鉄錆の臭いにマサキは気付いてしまった。戦場で幾度となく嗅いだ香り。紛れもない血液の香り。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。その血が人間のものであるのか、それとも獣のものであるのか。そこまではマサキにも判別が付かなかった。けれども、何かの儀式に巻き込まれていることだけは、如何に鈍感なマサキであつても明瞭<sup>はつき</sup>りと理解出来た。

人通りの多い市立つ街角でマサキをかどわかしてみせたのだ。真つ当な組織でないのは明白だった。このままでは何か大変なことが起きてしまうに違いない。コンコルディ・アム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。マサキは目的の知れない儀式から逃れようと手足に力を込めてみるも、

痺れ切った手足は何か拘束されているように固く動かなかった。

特に縄や枷で拘束されている様子もない手足が、頭も含めて動かないのは、薬が残っているからだろうか。それとも鼻を付いてどうしようもないこの匂いの作用だろうか。もしかすると儀式そのものの効果であるのかも知れない。そこまでマサキが考えた刹那、アド・フリーシヨネム！それまでとは異なる呪文が彼らの口を衝いた。

——さあ立ち上がるがよい、マサキ！アンドー！

その言葉と共に、マサキの身体はマサキの意思に反して立ち上がった。フードを被った人垣が割れる。その奥に蠢いている異形の生物。それは身体に生えている大小様々な大きさの触手をうねらせながら、地を這う唸り声を上げていた。あれは何だ、とはマサキは思わなかった。何故なら、その生き物の名を、マサキは初めて見る姿でありながら知っていたからだ。

サーヴァ＝ヴォルクルス。

邪神の名を欲しいがままにする怨霊は、実体を得て現世界に顕現することがままある。マサキも戦場で幾度となく対峙してきた怨霊は、様々な生物を寄せ集めたような禍々しさに満ちた姿をしていた。けれども今、マサキより少し離れた壁際にて、山羊の頭といった大量の供物に囲まれた

邪神はどうだ。

人よりも二倍程度の大きさしかない邪神。しかもその本体は大量の触手に覆われてしまっている。どういうことだと、マサキが頭で考え始めると同時に、マサキの足はヴォルクルスへと向かって歩き始めていた。一步、また一步。冗談じゃない。不吉な予感が脳裏を掠める。マサキは全身に力を込めて抵抗を試みた。それでも、マサキの足は歩みを止めようとはしない。

——その身をヴォルクルス様に捧げるのだ！

マサキの身体目がけて伸びてきた触手が粘液を滴らせながら、手に足に絡み付く。気持ちが悪い。マサキは触手を振り払おうとした。けれども、不安と恐怖が渦巻く胸の内とは裏腹に、自由を奪われた身体はむしろ進んで触手にその身を委ねていく。

次の瞬間、マサキの足が宙に浮いた。かと思うと、凄まじい力でヴォルクルスの本体へと引き寄せられていく。

マサキは宙でヴォルクルスと向き合った。触手の中に昏い孔が空いている。どういうことだ。マサキには意味がわからない。あるべき身体がそこにはない。輪郭が滲み出る暗がりの中に、洞のような巨大な赤い瞳が二つ、爛々<sup>らんらん</sup>と輝いている。

その瞳にマサキの視線が吸い込まれた瞬間、くらり、と

眩暈がした。全身から呆気ないほど簡単に力が抜けてゆき、そうでなくともぼんやりとした意識が、更に朦朧となる。いや、違う。マサキはぞくりと身体を震わせた。抵抗したいと望むマサキの意識は、マサキの身体の底から這い上がってきた得体の知れない別の意識に呑み込まれようとしていた。

身体に絡み付きながら這い上がってくる触手。他の触手よりもひと回り太いそれが、マサキの喉を伝って顎の上に着いてきたかと思うと、ゆつたりと鎌首をもたげてくる。先端より滴っているどろりとした粘液が、マサキの口唇を濡らした。

そして、マサキの様子を窺うように、凝<sup>じ</sup>つと。身動きせず、そこに留まる。

沈黙が続く。闇の向こう側から、荒い吐息のような呼吸音が聞こえてきた気がした。フウ、フウ、ハア、ハア、フシュー、フシュー……それが幻聴であるのか、それとも残響であるのか、マサキにはいずれとも判別が付かなかった。やがて、マサキの目の前で動きを止めていた触手が動いた。

マサキの口元に押し当たる触手の先端。緩く窪みを描いているそれは、まるで、そうまるで亀頭のようだ。マサキは自然と跳ね上がってゆく鼓動を抑えきれずにいた。これ

が欲しい。抑え難い衝動。これが欲しい。マサキは制圧すべき存在に対して欲情していた。これが欲しい。マサキの口唇を撫でているヴォルクルスの触手は、まるでマサキにそれを口に含めと云っているようでもある。嗚呼。マサキは溜息と共に口を開いた。その瞬間、マサキのその動きを待ち構えていたかのように、触手はずるりと開いた口唇の奥。口腔内へと入り込んできた。

——祝宴の儀は三日三晩に渡る。たつぷりとヴォルクルス様に可愛がつて貰うがいい。

ギイイ。重苦しい音を立てて、右手側。暗がりの中にあつたらしい扉が開く。ぼんやりとした明かりが室内に差し込む。暗がりを照らし出す眩い光の筋。けれどもそれは僅かな間の出来事だった。

——アド・フリーションム！

最後の呪文を声高らかに唱え終えた六人の邪神教徒たちが、ひとり、またひとりと扉の向こうに姿を消してゆく。やがてバタンと、絶望的な物音を立てながら扉が閉ざされる。残されたマサキは口の中に深く触手を収めたまま。その下腹部に刻まれし刺青<sup>タトゥー</sup>と見紛うシンボル——子宮<sup>かたど</sup>を象つたかのような形の紋様の存在には、未だ気付かずにはいた。

# 1.淫紋と呼ばれし刻印

スティングマ

滑らかで、甘い。

ゆつくりと口腔内を這い回る触手を、マサキはじつくりと味わっていた。これが欲しい。どうしようもない欲望は、異形の生物を相手とする未知なる経験でありながら、マサキを大胆に行爲に臨ませようとしていた。

しゅるり。ヴォルクスの本体から、細い線状の触手が幾条にも束となって飛び出してくる。同時に掲げられるマサキの身体。ヴォルクスに向かって伸びている両脚が、触手によって開かされた。露わになったマサキの菊座に、ぬめって光を放つ線状の触手が這い寄る。んん……と、それらに菊座を撫でられてマサキは声を上げた。

不思議と忌避感はなかった。

相手にしている異形の生物が、邪神サーヴァーヴォルクスであると理解をしていながらも、マサキの心にあつたのは、これから与えられる快楽に対する期待でしかなかった。長き対立の歴史。邪神との戦いに明け暮れた過去は確かにマサキの記憶に存在していたけれども、そんなことはどうでもいい。そう思わせるまでの欲望。マサキは喉奥にまで迫る触手をゆるりと飲み込んだ。

——んん、ふ……っ……

滲み出る粘液を擦り付けるように、線状の触手の群れはマサキの菊座を舐っている。時に菊門を突き、時にひだを柔らかく撫で、そして浅く頭を埋めてくる。もつと中に。もつと。繰り返されれば先を望みたくなる。じわりじわりと広がってゆく快感に、気付けばマサキは他のことを考えられないまでに、未熟な菊座の奥への愛撫を求めるようになっていた。

そんなマサキの気持ちを知ってか知らずか、触手の群れは穏やかな愛撫を続けている。マサキは焦れに焦れた。もつと中に、もつと。腰を反らせてどうなる訳でもないのに、つい反らしてはより高い位置にて菊座を晒す。挿れて、奥に入ってきて。思わず口を衝いて出そうになる願い。マサキを焦らしに焦らした触手の群れは、暫くもすると、ようやく擦った糸のように強く絡み合いながら、束となってマサキの菊座の奥へと頭を潜り込ませてきた。

ひくり、とマサキの身体が揺れる。長く弄られていたからだろうか。それとも雫が滴るほどに濡らされたお陰だろうか。菊座に痛みはない。

マサキは絡み付く触手に導かれるがまま、膝を折った。双丘の中央で蠢く擦れた触手の群れ。引いては頭を伸ばし、また引いては頭を伸ばしていく。それを繰り返しながら

ら、少しずつ奥へ、奥へと。マサキの窄<sup>すぼ</sup>んでいる蕾の奥へと頭を進めてゆく。緩やかな動きが心地いい。マサキは拙<sup>ちやうて</sup>速する触手の束を身体の奥へと引き込むように腰を振り、それらが頭を抜ききらないように菊座を絞<sup>しぼ</sup>った。

相変わらず輪郭の覚えないヴォルクスの本体から、更に無数の線状の触手たちが生えてきた。それらはマサキの腿を伝つては、腰部より上へと頭を伸ばしてくる。ゆるゆるとマサキの肌を濡らし、そして覆い尽くしながら先を急ぐ触手の群れ。それらはマサキの足の付け根で二手に分かれていった。

半分は男性器へ、そしてもう半分は腹を這つて乳首へと。ほんのりと色づいたマサキの男性器と乳首は、どちらも既にその先端を高く宙<sup>そら</sup>へと向けていた。菊座を弄<sup>も</sup>られただけで昂<sup>あき</sup>つた情欲が、それぞれを反応させていたのだ。そこに押し寄せる触手の群れ。視界の片隅に映り込む光景に、マサキの興奮が高まる。もつと、もつと深く、強く、激しく、全身を颯<sup>さ</sup>られたい。

その期待は裏切られなかった。

肌をそれぞれ這い上がってきた触手の群れは、マサキの敏感な部分を飲み込むと、さわさわと波打つように動き始めた。独立した動き。ひとつひとつの触手が意志を持つているかのように次々と、そして絶え間なく与えられる刺激

に、じくり、とマサキの身体のコが強烈に疼く。ああ、もつと。そんなマサキの心の中を見透かしているかのように、細くうねる触手の数々は羽根<sup>ハ</sup>が触<sup>エ</sup>れるような愛撫<sup>タッチ</sup>で、マサキの性感帯を群れの中へと迎え入れた。

快感が波となつて襲いかかる。どうしようもなく気持ちがいい。マサキは身体を震わせながら、その愛撫が生み出す快感に酔い痴れた。

——ん、ん、うう……ん……

ずるりと、マサキの口を塞いでいた触手が、その口の中から姿を現わした。そして、マサキに自らの存在を見せつけるように鎌首をもたげた。まるで餌を目の前にした獣<sup>よ</sup>が涎<sup>よだ</sup>を垂らすように、しきりと先端の窪みから粘液を垂らしている。

薄い桃紅色の触手の中にあつて、ひと際強い存在感を放つ赤黒い触手。それは占有欲も露わに、マサキの口唇に粘液を滴らせてきた。

ああ、ああ。ようやく口の自由を得たマサキは、触手の群れが繰り出す愛撫に腰を仰け反らせて喘いだ。ふわりと乳首や陰部を包み込んで、さわりと滑る。繊細で柔かい動き。その中央でくりくりと先端を弄っている一本の触手。はあつ、ああつ。異なる刺激を同時に過敏な部分に受けたマサキは、何度も濡れた口唇をわななかせた。

口唇を伝って舌の上。流れ込んでくる粘液はまるで蜜のようだ。マサキは何の疑いもなく、喉に溜まった粘液を飲み込んだ。熱い。喘いでは飲み込む。熱い。甘くマサキの喉を潤した粘液は、体内に流れ込む量を増やすに従って、その身体を増々火照らせていった。

——ああ、ああ、いい……！

些細な刺激ですらマサキの情欲を煽って仕方がないというのに、いや増す快感が更に欲望を高めてゆく。欲しい。マサキは目の前で揺らめいている太い触手を見詰めた。ぶるり。マサキの気持ちを読み取ったかのように、その先端が震える。はあ、はあ。マサキは舌を突き出した。亀頭のような形状の先端に舌を届かせる。そして舐めた。早く、早く。時にそう言葉を吐きながら、触手を覆う粘液を拭い去るように舌を這わせてゆく。

ひとつ舐めては硬さを増し、ふたつ舐めては張りを増す。赤黒い触手はマサキの舌の上で、男性器のような昂ぶりをみせていた。濃く色付き、硬く反り返る。それが情欲に囚われたマサキにとっては、どうしようもなく欲望をそそる存在に映った。もう欲しくて欲しくて堪らない。既に翻られ始めて久しい菊座を、意識せず絞ってしまうほどの疼き。マサキは夢中になって、男根と化した触手を舐めた。

そうして、赤黒い触手が逞しく成長しきった頃。マサキ

の双丘の奥で蠢いていた線状の触手の束が、それぞれ絡み合う身体を解いた。まるで花が開くように、群れなして膨らんでいく。ゆつくりと開かれる菊座の奥に肉の壁が覗く。長く触手の束を収めていたからだろう。充分にほぐされきった菊座は、欲望に頭を溶かされているマサキですら驚きに目を見開くほどに、すんなりとそのひだを伸ばしていった。びちゃり。舌先での愛撫を受けていた触手が、マサキから頭を離してゆく。

顎から鎖骨へ。鎖骨から臍へ。臍から臀部へ。そして臀部から菊座へ。赤黒い触手は、菊座より身体の中に潜り込むと、マサキを串刺しにする勢いで腸内を這い上がってゆく。あ、う。マサキは顎を仰け反らせた。じりじりとした快感がその身を焦がす。ずるずる。前立腺を超えて、ずるずる。男性器の裏側を超えて、ずるずる。果てしなく先を進む触手は、結腸の弁を抜けてそこでようやく動きを止めた。

みつしりと孔の奥。身体を詰め込んだ触手は、やがてゆつくりと前後に頭を動かし始めた。

弁より頭を抜いては、弁の奥へと。結腸を境にして頭を動かしている触手によって与えられる初めて経験する刺激に、ああ、はあ。思考を溶かされきったマサキは歓喜の声を上げた。ああ、いい。もつと、もつと。その言葉がヴォ



ルクルスの本体に届いたのだろうか。触手は激しさを増して、マサキの結腸を責め立てた。

触手を咥え込んでいる菊座はその都度、ずちゅずちゅと淫猥な音を上げては飛沫を飛ばした。いい、いい、いい、いく、いくつ。絶え間なく嬌声を上げるマサキに、追撃は止まない。既に破裂寸前といった趣きの男性器。先走った汁を垂らしている塊を撫で続けている触手の群れの中で、男性器の先の窪みの中央。尿道口を突いていた触手が細く身体を伸ばした。

ああ、ああ。何も気付かぬマサキは喘ぎ続けている。

ほどなくして畳針ぐらいの太さに身体を伸ばした触手は、次の瞬間、マサキの男性器の内部へとその先端を潜り込ませていった。やめ……つ、予想だになかった刺激を受けたマサキは、背中を駆け上がつてくる快感のそれまでとは異なる質に、思わず拒否感を露わにしていた。

尿意、そして射精感。腹の中に溜まっている何かを、強制的に吐き出させようとするような刺激。マサキは身を縮ませた。それでも触手は動きを止めない。マサキの男性器の底にまで潜り込んでくると、次に先端を指の先程に膨れ上がらせた。そうしてずるずると蠢いては、腸壁の向こう側で抽送ちゆうそうを繰り返している触手とともに、しこりとなつている前立腺を挟み込んで擦ってくる。

——や、ああ……あつ、あつ、嫌だ、嫌だ。

かつてない快感を覚えたマサキは、その危うさに抵抗した。こんな快感に慣れてしまつては、日常に引き返せなくなる。微かに残った理性がそう訴えかけてくるも、心を攫うように波を高くする快感には逆らえないのだ。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。すうつとマサキの瞳から光が消える。どこからともなく響いてきた呪文は、容赦なくマサキから抵抗する気力と理性を奪つていった。

——コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ……

それが幻聴であることにマサキは気付いていた。けれども、流石にそれが子宮かたどを象つた紋様の力によるものだとまでは気付けずに。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。逆らい切れない欲望が、あつという間にマサキの心を飲み込んでゆく。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。肉欲の虜となつたマサキの体内で、それぞれの触手が感度の高い部分を激しく責め立ててくる。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。結腸の弁を開いては、腹を叩くように。そして男性器の底で、擦るように。

——いい、いい、イク……っ。

やがてマサキの身体が弾けるように痙攣した。男性器から溢れ出てくる精液が、噴水のように飛沫となる。あ、あ、あ。意識せずマサキは蕾を緊縮させた。一度、二度、三度。結腸の奥でぶるりと触手が震える。次の瞬間、どぷりと吐き出される粘液。ああ、ああ。熱い、熱いのが入ってくる。マサキは形振り構わず声を上げた。

マサキの中で粘液を吐き出しきった触手は、直ぐに男根を思わせた硬さを失ってしまった。けれどもマサキはそうはいかない。果てた筈なのに潰えぬ欲望。未だ熱を帯びているマサキの男性器は、少しの刺激で勃起を強めてしまいう。マサキの腸内に身体を残していた触手は、一気に頭を硬くすると、再びマサキの菊座を激しく犯し始めた。

——ああ、ああ、いく。またイクっ。

熱を増したマサキの腸内は、敏感に快感を覚えるようになってしまった。やはり粘液には快感を増幅させる効果があるようだ。けれどもそれをマサキはもう気付けない。あ、あ、あ。結腸を開かれるだけでも、マサキの身体は震えるほどの快感に襲われてしまう。いかせて、いかせて。マサキはいいやと首を振った。

あつという間に天を仰いだマサキの尿道の底では、相変わらず線状の触手がしこりを擦っている。出る。出る。乳

首を颯つっている触手の群れとて、その動きを休めることがない。は、ああつ。壊れ……つ。全身にひしめいている性感帯を満遍なく弄られたマサキは、あつという間に腰を逸らせると、再び白濁とした精液を宙へと放っていた……。――

——あつ、あつ。ああつ。もつと、もつと。

長い時間が過ぎても、マサキの体力と欲望は衰えることがなかった。それどころかいや増しているようですらあつた。それこそが子宮を象った紋様の効果、淫紋と呼ばれるステイクマ刻印の力だった。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。精神が擦り切れるまで被術者を性的な欲望の虜とする。それはヴォルクスの触手より放たれる粘液の作用で、更に被術者を快楽に縛り付ける楔となった。

——コレガ……

淫紋によって生み出されし欲望は、マサキを本能の赴くがままにヴォルクスとの性交に耽らせた。乳首や男性器は云うに及ばず、肛虐に口姦。全身を触手で責め立てられたマサキは、最早自らの手で自らを慰める程度では、絶頂に至れなくなってしまうていた。

——コレガ……欲シイノ、ダロウ……

いつしか触手に包まれているヴォルクスの本体は、三

メートルほどにまでその身体を成長させていた。そして、僅かながらも言葉を発するようになっていた。これこそが邪神教徒の目的なのだ。サーヴァールヴォルクスの分身を幼体から成体へと育て上げる。それには容易に壊れず、且つ上質な餌が必要だ。

マサキの無尽蔵に湧き出るプラーナと、過酷な戦場にあっても壊れることのない逞しき精神力。これ以上の供物はそうない。邪神教徒たちが選び抜いた餌を、サーヴァールヴォルクスの幼体は気に入ったようだった。長きに渡るマサキとの性の交歓でそのエネルギーを吸収したヴォルクスは、少しずつ成長を続けながら、今また餌たるマサキにその魔の手を伸ばそうとしていた。

淫紋によって欲望をコントロールされているマサキの身体は、少しも放置されれば快楽を求めて激しく疼き出したものだったし、それを鎮めようとしてはマサキは自らその身体を慰めもした。けれども、ヴォルクスから与えられる強烈な快感に慣らされてしまった身体は、その程度の刺激ではびくりとも反応しなくなってしまうていた。

マサキが快楽を得るには、ヴォルクスとの繋がりを果たすしかないのだ。

オーガスム  
射精を迎えた後の束の間の解放感に浸るように床に転がって息を吐いていたマサキは、だからこそ、またぞろ身体の

奥底から湧き上がってくる欲望に抗うこともせず、自ら迫り来る触手に身体を差し出していた。それだけ今のマサキにとつて、ヴォルクスとの性交は魅力的な報酬だった。

マサキの目の前に迫ってくる大量の触手。逞しく反り返る赤黒い触手を中央に、桃紅色の線状の触手が群れをなしている。マサキは逃げもしなければ、隠れもしなかった。繰り返されるヴォルクスとの性交は、マサキ自身をも虜としてしまったのかのようだ。マサキは上半身を起こし、その群れに向かって大きく足を開いた。

——欲しい、から、早く、続き……を。

マサキに抵抗する気がないと悟った触手は、滑らかな動きでマサキに迫ると、その双丘ごと菊座を包み込んだ。

双丘に、或いは腿に張り付いてうねる触手に、菊座、或いは男性器にに張り付いて身体を震わせる触手。その緩やかな愛撫に身を任せて、うつとりと。挿れて。瞳を潤ませながら、マサキはそう言葉を吐くと、触手の群れの中に潜んでいる赤黒い触手に手を伸ばした。

掴んで、引き寄せる。どくどくと脈打つ触手。マサキは先端から滴る粘液を馴染ませながら、ゆつくりと男根を模っている部分を扱いた。幾度となくマサキを犯してきた赤黒い男根が、その手の内で硬さを増してゆく。マサキは頃合いを見て、そうつと。線状の触手が群れをなす双丘の奥へ

と触手を導いてゆく。

いつそう太さと硬さを増した触手は、マサキの導きに従って、菊座を窄めているひだをゆるりと割った。

はあつ、と声を上げて、マサキは大きく仰け反った。

粘液を浴びせかけられ続けている菊座は、どうしようもないほどにその感度を増していた。それは菊座に触手の頭が入っただけでも、絶頂寸前の快感をマサキに感じさせてしまうほどだった。イク、イク。声を上げながらも、更なる快楽を求めてしまう。マサキは力任せに触手を奥へと押し込もうとした。

——ククク……クツク……

闇の奥から響いてくる嗤い声。ヴォルクルスはマサキの我を忘れた振舞いの数々を、面白く感じているようだ。

自らを包んでいる無数の触手の中から、四本の太き触手をマサキに向けて放つ。素早くマサキの両腕を捕えた触手は、手首を固めながらマサキの頭上へと。その両腕を引き上げてゆく。直ぐに膝立ちとなったマサキの腰に、次いで三本の触手が伸びる。見た目よりもほっそりとしたマサキの腰に絡み付いた触手は、その身体をくるりと回転させると、ヴォルクルスに向けて臀部を大きく突き出させた。

——アア……ッ。

それまで菊座の浅い場所に息衝いていた触手の頭が、深

い所へと一気に潜り込んでくる。ア、ア。喘ぎ声とも悲鳴ともつかない声がマサキの口から発される。容赦なく開かれた弁の奥。邪神の本性も剥き出しに触手が無体にも暴れている。アア、ア、イク。何度も粘液を注がただけあつて、最も感じ易く育ち、そして最も感度を高められた場所。震えながら頭を振り回す触手に、マサキの身体が小刻みに痙攣を起こす。

異形の生き物だからこそ出来る不自然な動き。それまでただ出し入れを繰り返すだけだった触手の新たな動きに、知らない。マサキは身体を震わせ続けた。こんな動きは知らない。

——ああ、ああ、アアアッ……！

今またマサキは絶頂を迎えようとしていた。たったこれだけの刺激でオーガズムを感じてしまうまでに、ヴォルクルスの愛撫に慣らされた身体。少量の精液が尿道口から噴き出してくる。ア、アア。肛虐だけで果てたマサキは、ヴォルクルスの拘束から解かれると、糸の切れた人形のように床へと沈んでいった。

——コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・

ディオ……

気付けば全身を触手に颯然と舞っていた。

ちりちりと身体に走る電流のような快感にマサキが意識を取り戻すと、無数の触手の群れが周囲を取り囲んでいた。その隙間から覗く、ただっ広い祭祀場。薄暗い空間には、当然ながら人影はない。ここにマサキが連れて来られてから、どれだけの時間が経ったのだろう。既に時間の感覚を失っているマサキにはわかりようがなかった。

マサキの頭は霧がかかったかのようにぼんやりとしている。幾度となく意識を失っては、こうして強制的に目覚めさせられてきた。甘く轟惑的な目覚め。マサキは早速、身体を取り巻く触手の群れから与えられる愛撫に身を委ねていった。

それは幾度も繰り返された、目覚めの儀式。けれども今回はその限りではなく。

がらんとした祭祀場にヴォルクスの姿はない。恐らくは背後に。マサキが背中に感じているひんやりとした熱気は、ヴォルクスの本体が放っているものなのだろう。フシュー……フシュー……と、聞き慣れた不気味な呼吸音がしてくる。それはマサキの耳元近くで響いていた。

どうやらヴォルクスは、マサキとの距離を背中を挟むまでに近くしようだ。

人間が腕に抱くように、昏い洞のような本体から生えて

いる触手でマサキを包み込んでいるヴォルクスは、マサキが意識を失っている間にも、そのプラーナの吸収に余念がなかったようだ。腸から流れ出る粘液を滴らせている菊座は、傍目にも明瞭りとわかるほどにそのひだを緩くしているようだったし、孔を開くほどに大きく収縮を繰り返していたりもした。

さんざ犯された後の熟れた菊座。始まりの頃の未熟な蕾の面影は、もうそこにはなかった。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。幻聴がマサキの脳内に響き渡る。

びくん、と身体を大きく揺らしたマサキの瞳が紅く染まった。

ヴォルクスとの性交を重ねる度に、少しずつ奪われていったマサキ・アンドーとしての意思が、完全に奪われる時がきたのだ。そこには最早、本能さえもなく。快楽を求める感情すらも喪失した操り人形のような身体を、触手は変わらずに弄んだ。とはいえ、感覚までは失われていないのだろう。紅の瞳を見開いたまま、マサキは刺激に反応しては、その身体を激しく痙攣させた。

ずるりと這い上がってくるあの触手。マサキの肌を伝って上ってくる。マサキの口元へと辿り着いた赤黒き触手は、その口唇の中に己の身体を捻じ込んだ。幾度もマサキを犯

してきた男根を模った触手は、今またマサキを犯そうとしているのだろうか。前後に身体を揺らして口腔内で硬さを増してゆくと、マサキの喉奥へと頭を潜り込ませていく。

——ツイニ、コノ瞬間ガキタノダ……

ヴォルクルスの身の丈は、ゆうに十メートルを超えるまでの成長をみせていた。触手の中に潜んでいた本体。暗がり沈み、覚束なかった輪郭が、徐々に姿を露わにしようとしている。異形の生物。邪悪なる神。数多の教徒より崇拜を受ける表層にして本質たる存在は、その股間にひと目でそれと知れる男性器をたくわえていた。

——豊力ナル、プラーナ。豊力ナル、精神。美味デアツタ。

隆々とそそり立つ逞しき男根は、赤黒い触手など比べ物にならないほどに、猛々しく天を仰いでいた。その先端がマサキの菊座に押し当てられる。未熟な蕾では受け入れられなかった屈強な男根は、受け入れることに慣れきつたマサキの菊座の中に、すんなりとその亀頭を収めていった。アツ、アツ。喉を塞がれている筈のマサキの口から声が洩れる。モット、モット。無論だ、とヴォルクルスはマサキの身体を落とした。ずるりと陰茎が収まる。

——アアツ。ヴォルクルス様、ヴォルクルス様。

三日三晩に渡る祝宴の儀は、ようやく終わりを迎えよう

としていた。繭と化した桃紅色の触手の中で、破壊神サーヴァーヴォルクルスとの和合を果たしたマサキは、ようやく邪神教徒が唱えた呪文の意味を知った。神との和合。神との結合。成就の時は来たれり。比類なき雄々しき男根を受け入れたマサキにしか知り得ない真理。それは何と光栄なことだろう。かつてない快感に打ち震えるマサキの背後で、ヴォルクルスの本体が巨大な口を開く。

——流石ハ憎キ魔装機神ノ操者。実ニ喰ライ甲斐ガアツタ。

唾液とも粘液ともつかない液体が、鋭い牙の隙間から零れている。マサキを男根で串刺しにしたヴォルクルスは、快楽に沈んだその身体を、そのまま自らへの口元へと運んでいった。マサキの紅い瞳が潤む。けれどもそれは悲しみからくる涙ではなかった。

——永遠ニ犯シテヤロウ。我が血肉トナレ!

その瞬間、マサキを包み込んでいた触手が弾け飛んだ。

## 2.背教の徒

「困るのですよ。勝手に復活を繰り返されてはね」

繭を喪ったマサキの目の前に立っていたのは、紛れもなくマサキが良く知る人物の姿だった。

魔装機的面々でもない。マサキを間に挟んで友情を育んでいるふたりの女性でもない。そう、マサキが正常な精神状態にあつたのであれば、恐らく今の姿を一番見られたくなかつたと思つたに違いない人物。シュウ＝シラカワは、高らかに靴音を響かせながら、ヴォルクルスの腕かいなに抱かれているマサキの許に歩んでくる。

——背教者クリストフ……マタモ我ガ復活ノ邪魔ヲシヨウトスルノカ……

当然ですね、とシュウは嗤つた。それは心からの笑みというよりは、何か猛々しいものを理性という殻で覆い隠しているかのような表情だった。怖ろしくも物悲しい。その表情を目にしたマサキの心の中で何かが揺らいだ。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。即座にマサキの耳に響き始める呪文。六人の邪神教徒たちよつて刻み付けられた淫紋が、再びマサキをヴォルクルスの完全なる支配下に置こうと活動を始める。コンコルディウム・

クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。マサキをヴォルクルスの贄として捧げ続けた呪文。脳内に直接響き渡る呪文に、シュウが唱える呪文が重なる。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリファイ・チュム・エクサイテ。

——無駄ナコトヲ……既ニコノ者ハ、我ガ掌中ニアリ……

それでもシュウは呪文を唱えるのを止めようとはしなかつた。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリファイ・チュム・エクサイテ。静謐に唱えられていた呪文は、やがて荒々しい祈りと化した。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリファイ・チュム・エクサイテ。それをせせら笑うかの如く、ヴォルクルスの口から這い出てきた舌がマサキの身体に絡み付く。唾液滴る尖つた舌先は、マサキという獲物の身体を隅々まで舐め回した。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリファイ・チュム・エクサイテ。シュウは不快も露わとなつた表情を隠すこともせず、一心に呪文を唱え続けている。

——クク……足掻クガヨイ……コノ者ノ次ハ貴様ノ番ダ、背教者クリストフ……

ふつとマサキの心に理性が宿つた。やめる。聞きたくなかつた呪文。快樂に身を委ねてしまつた自らの堕ちた心を目覚めさせるシュウの声に、一瞬にして状況を理解させられたマサキは首を振つて抵抗を始めた。やめる。俺を起ここ

すな。

マサキの紅い瞳が煌めく。シユウはその表情で、マサキの感情を理解しようだった。

「あなたともあろう人が情けない。起きなさい、マサキ」  
 いやだいやだいやだ。マサキは抵抗した。快く身体を満たしていたヴォルクルスヴォルクルスの男根。マサキが求めて止まなかったものが、途端に汚らわしいものに感じられて仕方がなくなる。いやだ。繰り返された性交で叩き込まれた快楽。何もかもを捨てて肉欲に溺れた三日間の記憶は、理性を取り戻して尚、マサキをヴォルクルスとの性交に縛り付けているのだ。汚らわしくも忌まわしい邪神、サーヴァーヴォルクルス。そう感じている存在を求めさせてしまうまでに。

「起きなければ起こすまで。さあ、マサキ」

どうして俺を起こした。マサキは認めたくなかったのだ。自分がヴォルクルスの支配に堕ちてしまったことを。あの時間を返してくれ。赤黒い触手に口唇を塞がれたまま、マサキはシユウの言葉を聞くまいと首を振った。

「あなたは私をヴォルクルスの支配から目覚めさせておきながら、自らはその支配下に堕ちようというのですか」

やめろ。マサキは喉に痞つかえている赤黒い触手を吐き出した。内頬に張り付いた粘液の生臭い感触が気持ち悪い。もう、やめてくれ。求め応え、一心不乱に。邪神教徒が姿を

消した祭祀場で、マサキはヴォルクルスと互いを貪り合った。その鮮やかにマサキの脳内を彩っていた記憶が嘘のように色褪せてゆく。ああ、ああ、ああ。マサキは足をばたつかせて藻掻がいた。今も身体に残り続ける欲望が、ヴォルクルスに与えられた快楽を求めている。それなのに。

「それがあなたの選択であるのなら、私は止めはしません。ですが」

助けてくれ。マサキが強く足を払うと、ずるり。マサキとヴォルクルスを深く繋ぎ合わせていた男根が抜けた。何故だ。何故俺は。マサキの心の奥底から、或る意識が凄まじい勢いで浮かび上がってきた。それは六人の邪神教徒が行った儀式でマサキが失ってしまったマサキ・アンドーとしての人格。そうだ、俺は。マサキの瞳から色が抜け、精彩に富み始める。ああ、俺は何てことを。

「——私は一生、あなたを軽蔑します」

重なり合う意識が、魔装機神の操者であるマサキを蘇らせた。冗談じゃねえ。マサキは目の前にたった独りで立っているシユウの姿を睨み据えた。コンコルディウム・コム・ディオ。ユニオ・コム・ディオ。じくり、と下腹部が疼く。まざまざと蘇る快楽の記憶は、けれどもマサキをもうヴォルクルスに縛り付けたりはしなかった。

「……てめえに軽蔑されるくらいなら、今ここで舌を噛み



切って死んだ方がマシだ」

脳に精神、身体に心。マサキの全てが快楽を求めている。それが淫紋の力であるとマサキは相変わらず気付いてはいなかったものの、シユウの言葉によって取り戻されたマサキⅡアンドーとしての自尊心は、少なくとも、淫紋の作用によるヴォルクルスとの因果を断ち切る程度にはマサキの精神力を蘇らせていた。

最早、マサキは肉体の渇きを満たすことをヴォルクルスに求めようとは思わない。マサキは足を蹴った。足首に絡み付いている触手がはらりと落ちた。

——何ダト……マサキⅡアンドー……我ヲ忘レタカ……  
 どうやらマサキに意思の力が漲るにつれ、ヴォルクルスは物理的な拘束能力をも失っていつているようだ。それならばとマサキは更に氣力を振り絞って、両手を払った。どろり、と腕に絡み付いていた触手が剥がれ落ちる。

「覚えてるぜ。てめえが斃すべき敵だつてことはな！」

マサキは自身の身体の中から湧き上がってくる欲望に抗い続けた。それは見る間に効果を発揮した。次々と離れてゆくヴォルクルスの触手。いつしかマサキの身体を拘束していた触手の数々はその姿を消し、残すは腰を支える数本となっていた。

流石に焦りを感じたのか。最後の足掻きとばかりに、ヴォ

ルクルスの舌がマサキの全身を舐め回してくる。吐き気がする。その感情を胸の奥に押し込んでマサキは嗤った。背後で凶悪に開かれていた口が舌を収めて閉じた。負けて堪るか。マサキは残る全ての氣力を振り絞って、ヴォルクルスに抵抗した。誇り高き魔装機神の操者としての矜持、そしてラ・ギアスに召喚されし勇者としての自負が、マサキにこれ以上、ヴォルクルスに囚われることを良しとしない。

「誰がてめえなんぞに俺をくれてやるかよ！」

腹の底から湧き上がってくる胆力。マサキの全身を駆け巡るプラーナが、高く、激しく、そして白く肌の外へと滲み出ると、天へと立ち上っていった。ヴォルクルスの触手はぎりぎりともマサキの腰を締め上げてくる。三日間の性交の記憶。柔らかにマサキの身体を溶かしていった愛撫の数々が嘘のような荒々しさ。ちくり、と針で刺されたような痛みを胸に感じた。未練を感じている。マサキの脳裏に深く刻み付いたままの記憶の数々は、だからこそマサキを闘争へと駆り立てた。俺を返せ。マサキが自らを取り戻す決意を新たにしたら、その瞬間。

じくり、とヴォルクルスに犯され続けた身体が、より一層激しく疼いた。

ヴォルクルス様。誰かがマサキの心の中で、邪悪なる神の名を唱えている。ヴォルクルス様。どくん。マサキの身

体が震える。ヴ・オ・ル・ク・ル・ス・サ・マ。マサキを攫った快楽の記憶が五感に呼び覚まされた。口唇に、口腔内に、喉に、乳首に、双丘に、菊座に、腸内に、そして結腸に。幾度も幾度も男根を模した触手に貫かれ、吐き出された精のような粘液を飲み込んだ部位。そこに今また感じる熱い昂ぶり。マサキの背中が一気に総毛立つ。あれが欲しい。マサキは喉に溜まった唾液を飲み込んだ。冗談じゃない。首を振る。

——嗚呼、ああ、アア、アアアアアアッ！

それは獣の如き咆哮だった。

身体の内側に未だ棲んでいる欲望の権化。邪神教徒たちによって生み出された人格と、マサキⅡアンドーとしての人格が、マサキの心の中で激しくぶつかり合う。ヴ・オ・ル・ク・ル・ス・サ・マ。自らヴォルクルスに身体を差し出し、その愛撫を求め、結合を果たした記憶が、甘やかにマサキの胸を満たす。同時に胸の奥から這い上がってくる猛烈な嘔吐感。ヴ・オ・ル・ク・ル・ス・サ・マ。マサキの人格の対立は身体にも影響を及ぼした。消える消える消える。それは精神が崩壊しかねないまでの葛藤をマサキの心の中に生じさせ、地獄に等しい苦しみを生み出した。

アアアアアアッ！ マサキは咆哮を続けた。

コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディ

オ。海鳴りのように耳を覆う呪文の波。ヴ・オ・ル・ク・ル・ス・サ・マ。刹那、マサキは本能的に、己が持てるプラーナの全てを自らの身体の外側に向けて放出していた。二度と俺を奪うな！ 白光が煌めきながらマサキの身体を包み込む。その銀色にも近い輝きは、鋭い光線を四方に向けて疾<sup>はや</sup>らせたかと思うと、次の瞬間には風を巻き起こしながら四散した。

パンツ、とマサキの腰を支えていた触手が弾け飛ぶ。重力が消失したかのような浮遊感。しかしそれも一瞬のこと。次の瞬間には、マサキの身体は祭祀場の冷たい床の上に叩きつけるように落とされていた。

マサキ！ とシユウがマサキを呼ぶ声が聞こえてくる。打ち付けた腰部が痛む。マサキは痛みにきつく塞いでいた瞼を開いた。離れた距離で事態を見守っていたシユウは、自身が挑発しての結末を流石に放置しかねたのだろう。床で呻いているマサキの許に駆け寄ろうとしていた。俺はいい！ 大量のプラーナを失った身体がしきりとだるさを訴えている。それでもマサキは言葉を発さずにいられた。た。

「俺のことは後回しだ！ お前はヤツを斃<sup>たぶ</sup>せ！」

狼狽を露わにしていたシユウの顔が引き締まる。足を止めたシユウは、瞬間、血の気が失われるまでに強く拳を握

り締めると、▽※※へる※……人間の声帯では到底発せないような発音で咒文を唱え、足元に光の紋様で描かれた魔方陣を展開させた。

「その通りですよ、マサキ。そうでなければ面白くない」

自らに云い聞かせるように言葉を吐いたシユウは、次の瞬間。口元を不敵に歪ませた。その視線がマサキから外れ、ヴォルクルスへと向かう。その横顔には最早、感情の揺らぎはなく、あるのはただ、勝利を確信した超越者が見せる余裕の微笑みだけだ。少しの辛抱ですよ。マサキに向けて、シユウの口唇が柔らかに言葉を奏でる。

聖者のように静謐に、そしてパイプオルガンのように荘厳に。その場に凜として立つシユウが、高速で咒文の詠唱を始めた。マルス・レディ・クオトウシス・ドルミ・インプロベ。アペリ・ポルタス・デンフェロス。それがどういった意味を持つ咒文であるのか、マサキには微塵も理解が及ばなかったが、シユウがこれから為そうとしていることが何かということだけはわかっていた。

——オ、ノレ……オノレ、オノレ、オノレ背教者如キガ  
アアアアアアツツ！

ヴォルクルスの足元に孔が開いた。深く冥い孔は、ぽつかりと。光さえも飲み込みながら、その円周を広げてゆく。その底から生えてくる無数の青白い手。女のものと思しき

手もあれば、男のものと思しき手もある。老いた手もあれば、幼き手もある。それらは、ヴォルクルスがマサキを捕らえたようにヴォルクルスを捕えてみせた。ひとつ、ふたと絡み付く手が、ヴォルクルスを妖しく撫で回している。邪悪なる精神の宿った異形なる肉体、破壊神サーヴァⅡヴォルクルス。幾度も顕現を繰り返す神は、今また冥府へと帰させられていこうとしているのか。さあ、あなたの墓が出来ましたよ、ヴォルクルス。シユウは残忍に微笑んだ。眩暈がするほどに凄惨な笑みは、返り血を浴びているかの如く鮮烈に。その怒りを余すことなく表していた。

——オオ、オオ、オオオオオオ……ツ！

シユウの周囲の空気が震え出す。ピキピキと家鳴りのような音が響いたかと思うと、ごうごう、ごうごう。それは瞬く間に渦巻く気流と化し、地鳴りを起こしながら孔の底に向かって収束を始めた。何故ダ、何故ダ。ヴォルクルスの身体はいつの間にか、マサキが初めて目にした瞬間の大きさに戻っていた。恐らくはヴォルクルスを撫でていた無数の青白い手の仕業であるのだろう。身の丈三メートル程度の小さき異形の生物の姿は、今のマサキの目にはとつもなく滑稽なものに映った。けれどもシユウはまた違った考えでいるようだ。もしかするとシユウは、ヴォルクルスの矮小化はマサキの膨大なプラーナによるものだと思つて

いるのやも知れない。あなたにマサキのブラーナが扱い切れる筈がないでしょう。そうシユウが口になると同時に、ゆつくりと、無数の手に囚われたヴォルクスの身体が孔に飲み込まれ始める。

「……どうか、その御霊に安らかなる眠りを——届け給え」

徐々にスピードを上げて沈んでゆくヴォルクスの身体。やがてヴォルクスの身体を飲み込み切った孔は、まるで地獄の窯に蓋をするかのように、床をその上に戻していった。在るべき姿を取り戻した室内。静けさを取り戻した空間にシユウの靴音が鳴り響く。終わった。安堵するマサキの目の前にシユウが立った。シユウは腰を落とすと、沼の中に身体を沈めているような倦怠感で、身動きさえもままならなくなっているマサキの身体を抱え起こした。

「どこを打ちましたか、マサキ」

腰、とマサキは口を動かすも声が出ない。腹に力が入らないのだ。ああ、とシユウは納得のいった様子で、マサキの瞳に手を当てて瞼を閉じさせた。恨まないでくださいね。口唇に感じる柔らかな熱。思ったよりも温かいシユウの口唇の感触に、それまでマサキが堪えていた感情が爆発する。コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。脳に響き渡る呪文に身体が熱を帯びた。マサキの口腔内でその舌に絡み付いているシユウの舌が、抑え込んでいた情

欲を呼び覚まして仕方がない。

シユウのブラーナが、静かにマサキの体内に流れ込んでくる。僅かながらブラーナの回復を感じたマサキは、シユウの背中へと腕を伸ばしていった。コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。欲しい。あの身体に染み付くような快楽が欲しい。マサキはシユウにしがみ付くと、その肉厚な舌に自ら舌を絡めた。コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。マサキが積極的に己の口唇を貪るような振る舞いに出たことに、シユウは驚いたようだった。そして同時に不審を感じたようだ。即座にマサキの口唇から口唇を離すと、口付けひとつで喘いでいるマサキに確信を強めたのだろう。その原因を探るように全身に視線を巡らしていく。

「どういうことだ。私は確かにあなたにかけられた術を解いた筈」

その言葉が終わる前に、シユウはマサキの腹部に起こっている異常を認めたようだ。子宮を象った紋様、淫紋に目を留めたシユウは、これは……と怪訝そうな表情を浮かべた。そう、マサキ自身も気付かぬ内に刻まれていた淫紋は、膨大な知識を有するシユウをしても、存在すら知見のないものであったのだ。

——シユウ、頂戴。俺に、お前の×××を……

欲望に飲み込まれ、その激流に身を攫われるがまま。男根を求めるマサキの卑猥な言葉を聞いたシユウは、微かに眉を蹙めると、形振り構わずに自らの身体に手を伸ばしてくるマサキを宥めるように、一度、強くその身体を抱き締めると、恐らくは魔力であつたのだろう。意識が飛ぶほどの強い衝撃をマサキの身体に与えてきた。

※ ※ ※

——淫紋、とシユウは耳慣れない単語を口にするかのよう<sup>はなす</sup>に、傍らに立つサファイネが口にした言葉をぎこちなく反芻<sup>はなす</sup>した。

タトゥー  
刺青の一種なのだという。

通常であれば性奴隷などに刻まれる性的な象徴<sup>シンボル</sup>でしかない筈の淫紋が、あのマサキをして理性を失わせるまでに性的に支配してしまったのは、そこに術式が施されているからだろうと、サファイネはいつになく堅苦しばった表情でシユウの問いかけに答えてみせた。

マサキは寝室で、気を失ったままベッドに拘束されている。

いつまた魔術の効果が発揮されて暴れ出しかねないとも限らない。シユウは連れ帰ったマサキを裸のままベッドに

繋いだ。必要な処置であつたとはいえ、手足をベッドの柵に拘束されているマサキの姿は、三日三晩に渡ってヴォルクルスに黽<sup>こ</sup>られた後だからだろう。妙にやつれた面差しと相俟<sup>あ</sup>つて、シユウの目には例えようもなく痛々しいものに映った。

そのマサキの姿を思い返して、シユウは静かに溜息を吐いた。

教団歴の長いサファイネであれば知っていることもあるだろうと、手短かにマサキの状態を説明し、彼女を自らの居所へと呼び寄せたシユウは、実物を見せた上で、マサキの腹部に刻まれた子宮<sup>かんた</sup>を象つた紋様について知っていることはないかと尋ねた。見たことだけはありますと、神妙な面持ちで答えたサファイネは、それをどこで目にしたのかは口にしなかったが、だからこそシユウには何となく察しが付いた。淫蕩な面を併せ持つ彼女のことだ。きつとシユウには云えないようないがわしい施設で目撃したに違いない。

「ここからは噂話になりますが、そうした淫紋の中には強い性的支配下に置かれるものもあるとか……」

「それが現実<sup>じやうじ</sup>に存在していたと」

「私も目にしたのは初めてですわ、シユウ様。金持ちの道楽<sup>みだ</sup>などに使われているらしいとは聞き及んでいましたが、

教団内部で使われているといった話を耳にしたことはありませんでした。そもそも、シユウ様もご存じのように、教団内部で行われている和合は男女を番にするものであつて、ヴォルクルスと直接的に和合を果たすものではありません。破戒主義の連中が得意とするその儀式ですら、主流派からは邪道と謗られていきますのに、ましてや、あの頭がお堅い筈の教導派の連中がこうしたものに手を出すなど、ラングランの内乱以前でしたら考えられなかったことです。教化主義であるからこそその教導派でもあるの筈なのに、何故彼らまでもが破戒主義の連中のような真似を……」

「とはいえ、彼らもまた教団の人間ではありませんからね。本尊であるヴォルクルスの顕現の為なら、外道な手段にも及んでみせることでしよう。もしかすると、信ずる心の総体こそがヴォルクルス復活への最短距離なのであれば、とうに奇跡を目の当たりに出来ていなければおかしいということに、ようやく彼らも気付いたのかも知れませんよ、サファイーネ」

「若しくは、教団内部で人事的な問題が発生しているか……ですわね。シユウ様が教団を抜けたことで、教団内部の派閥の力関係にはひずみが生じていることでしょう。そこに付け込んで勢力を広めたい輩がいたとしてもおかしくはありません」

「調べてみる価値はありそうですが、今はマサキに刻まれた淫紋をどうにかする方が先ですね。淫紋について、何か他に知っていることはありませんか。噂話で結構ですよ、サファイーネ」

そこでサファイーネは一瞬、躊躇う様子をみせた。物憂う表情。一途にシユウに忠誠を誓つてみせている彼女は、その代わり他人に対しては残酷だ。邪神教団という常識離れた組織に長く身を置いていた彼女は、常人とは異なる感性や考え方が形成されてしまっている。その彼女にして何故。シユウが疑問を口にしようとしたその時、サファイーネはようやく重い口を開いた。

「本当かどうかはわかりませんが、反社会的な組織がそちらの淫紋に手を出さないのは、効果が強力な代わりに、短期間で被術者の廃人化を招くからなのだそうです。ですから、金持ちの道楽に留まっているのだとか……」

「成程。金にならないから使われないということですね」「使い捨ての性奴隷では、安かろう悪かろうにしかありませんもの。恐らく、かかるコストに対して、利益がそこまで上がらないのではないのでしょうか。シユウ様の話からするに、その淫紋は被術者の人格にも影響を及ぼしているのでしょう。そこまで強力な効力を持つ術となれば、準備に相当な時間を必要とするのは明らかですわね」

シユウは祭祀場の禍々しい有様を振り返った。獣の頭と  
いった供物の数々に、撒き散らされた血液の跡。床に残さ  
れていた掠<sup>かす</sup>れた魔方阵は、シユウが見る限り、数日の手間  
をかけて作成しなければならぬものであった。それは勿  
論、ヴォルクルスに性的な意味で肉体を捧げさせるのだ。  
サファイネが口にした金持ちの道楽用の術式より、更に強  
力な術式が用いられていることであろう。その手間を差し  
引いても、通常の魔術より発動までのプロセスに時間がか  
けられているのは明らかだ。

「元々は祭祀や儀式における生贄用の呪術であつたと実<sup>まこと</sup>し  
やかに噂されていますが、どこまで信用してよいものやら。  
魔術の時代より、科学主義へ。そして錬金学の台頭と隆盛。  
ラ・ギアス世界における実証科学の歴史の変遷は、この三  
時代だけでも数千年に相当します。ましてや原始的な呪い  
を倫理が否定するようになったのは、それよりも過去のこ  
と。それだけの長い期間もの間、この手の魔術が正しく伝  
えられたとは、私には到底思えませんわ」

「しかし、それだけの時間が経過しているからこそ、魔術  
は科学以上に体系的な研究が進んでいます」

「シユウ様に聞き覚えがない時点で、それは体系から外れ  
た魔術ということにはなりませんか」

「と、なると、地道に過去の書物に当たると、魔術の正

体を突き止める方法はなさそうですね。とはいえ、あの状  
態のマサキを放置して、私が方々に出歩く訳にも行きませ  
んし……。サファイネ、淫紋による廃人化を防ぐ方法につ  
いての噂はありますか」

「あるにはありますが……」

サファイネは再び躊躇いをみせた。言葉を濁すと、何事  
か。悩ましく感じているような様子でいる。サファイネ、  
とシユウは彼女の話を促すべくその名を呼んだ。即座にわ  
かりましたと答えてみせたサファイネは、こう話を続けた。  
与え過ぎない程度に被術者の性欲を解消してやるのだそう  
です、と。

「与え過ぎない……」

「その加減が難しいのだそうです。被術者は魔術によつて  
性欲を高められている状態です。だからこそ、のべつまく  
なしに与えては駄目。だからといって、人並みに与える程  
度では駄目。被術者が満足し、且つ不足を感じない程度で  
あるべきなのだから。とはいえ、流石に私<sup>わたくし</sup>とて、これ以上  
の適切な程度に関する情報までは……」

「今はそれで結構ですよ、サファイネ」

シユウはテーブルの上に広げていた魔術関連の書物の数々  
に目を落とした。さして古くもない魔術の体系が著されて  
いる書物だ。サファイネの情報が真であるのなら、これ

らにシユウが期待する情報は載っていないだろう。

調査を始めた当初はこういった結果を迎えるとは思って  
もいなかった。シユウはサファイネに気取られないように  
ひっそりと嘆息した。そう、シユウはいつも同じように、  
自らの知識と力で彼らの動きを阻むことが出来ると思つて  
いたのだ。それがこれだ。シユウは防ぐことの出来なかつ  
た結末に苦々しい思いを抱いている。

——よもや魔装機神の操者であるマサキに、その忌まわ  
しき役目を担わせようと考えるとは。

始まりはいつものように、サファイネが入手してきた情  
報だった。教団に不審な動きがあるという報せ。しかもそ  
れは教化主義の教導派の面々に纏わるものであるらしい。  
普段とは異なる情報。広く布教を果たすことが、結果的に  
ヴォルクルスの顕現に繋がると考える彼ら教導派は、教団  
内部では穏健派とも評されている。そういった性質を持つ  
彼らが布教以外の行動を起こすなど、通常であつたら考え  
られないことだ。

だからこそ、彼らが何を企んでいるのが、シユウには  
どうしようもなく気になった。

シユウは単独でその情報を追うことにした。教団内部の  
主流派であり、因縁深き過激派の動向についてはサファイ  
ネたちに調査を継続させることとして、そこから二週間。

かつての人脉や、反社会的組織が使っている情報網などを  
駆使した結果、シユウは教導派がヴォルクルス召喚の儀式  
を新たに生み出したらしい、との情報に辿り着いた。

過去の遺跡を利用することもなければ、比類なき恐怖を  
餌にする必要もない。破壊主義の連中が好むように多数の  
男女を用意する必要もない。それどころか新たな儀式を用  
いれば、あの忌まわしき契約すら必要とせずヴォルクル  
スの本体を顕現させられるというではないか。従来の儀式  
と比べて比較的低コストで目的を達せる儀式。実現可能な  
レベルに達するには未だ時間が必要なようであつたが、だ  
からといってそのまま放置してもおけまい。その方法が確  
立されてしまった暁には、過去類を見ない悲劇がラングラ  
ンを襲うだろう。現に彼ら教導派はラングランに混乱を齎  
すべく、その儀式を用いたラングラン主要都市の強襲計画  
を立てているようだ。

シユウは彼らの計画をどうにかして頓挫させられないか  
と、儀式の詳細についての情報を追った。どうやら既に幾  
度かのテストは終えているらしい——と、儀式の成立に向  
けた経過の情報を得たシユウは、断片的に入手出来た儀式  
の詳細を元にその解説を行う術式を組み上げた。

その矢先だったのだ。

彼ら教導派の手中にマサキが落ちたらしいという噂を耳



にしたのは。

魔装機操者たちに探りを入れてみれば、成程マサキの失跡は事実であるらしい。しかも教導派は近く実践的な儀式を行う予定であるのだとか。これでシユウがその二つを結び付けられなかったとしたら、余程目が曇っているか、元来から愚か者であったかのいずれかではない。彼らはマサキをヴォルクルス<sup>1</sup>の生贄に選んだのだ。

シユウが入手した儀式の仔細が真実であるのだとすれば、それは口にするのも憚られるまでに屈辱的な方法で、マサキはヴォルクルスに全てを捧げさせられることとなるだろう。ヴォルクルス<sup>2</sup>を育てる餌として、そしてヴォルクルス<sup>3</sup>を完全体とする贄として。

きつと誇り高きマサキのことだ。魔装機操者たちにだけは、ヴォルクルスに生贄として捧げられている自分の姿を見られたくないと思うに違いない。そう考えたシユウは、彼らに打ち明けることをせず、独りでマサキの救出に向かった。

幸いシユウの動きは彼らには知られていなかったようだ。そもそもがそう大きくない分派である。見張りさえ存在していなかった神殿に容易に侵入を果たしたシユウは、先ずはと別室にて祝杯を上げていた六人の邪神教徒たちを屠<sup>ほふ</sup>り、次いで建物の地下にある祭祀場へと足を踏み入れた。

そこで見てしまった儀式の禍々しさ！ あれと比べてれば、刺し貫かれる程度で済むヴォルクルスとの契約の儀式など可愛らしいものだ。人間としての尊厳を徹底的に奪われ、人格を封じられ、そして服従させられるという絶望。マサキが受けただろう仕打ちの数々を思い返すのに、シユウの胸に怒りの火が灯る。それは燃え盛る炎となつて、シユウの胸を滾らせた。

確かに教導派と思しき六人の邪神教徒は始末した。たかが六人とはいえ、儀式を行えるレベルの教徒。教団内部で主流にない彼ら教導派にとつては、それだけでもかなりのダメージだろうに、総仕上げとも呼べる儀式を中断させられているのだ。暫くは同様の儀式を行えない程度にはダメージを受けているに違いない。

——時間稼ぎにならない内に、彼らを叩き潰す必要がある……

シユウ様、とサファイーネがシユウを呼ぶ声があった。シユウははたと我を取り戻した。いつの間にか握りしめていた拳が血の氣を失って白く染まっている。私としたことが。シユウは傍らのサファイーネを見遣った。彼女はいつになく不安げな表情でシユウの様子を窺っているように見受けられた。それだけシユウの様子が尋常ならざるものに感じられたのだろうか。シユウは軽く息を吐き出すと、努めて平

静を保ちながら、どうしましたかとサファイーネに尋ねた。

「もしやとは思いますが、その……シユウ様は御自身でマサキの廃人化を防ごうと……」

シユウはサファイーネの云いたいことを即座に理解した。

そして同時に、これまでの彼女の歯切れの悪さにも納得がいった。

淫紋に支配されているマサキの廃人化を防ぐ為の性交渉。

サファイーネはシユウが自らマサキの欲望を解消する相手を務めようとするのではないかと、気が気でなかったのだ。流石は忠実な下僕として、日々シユウに仕えているだけはある。主人たるシユウの性質を、彼女はある意味では完璧に把握していた。好奇心は猫をも殺す。シユウは自らの知識欲を満たすことには貪欲なのだ。

しかし、シユウに懸想しているサファイーネとしては当然の反応であつたとはいえ、それは目の前のシユウの様子や態度よりも重大な関心事であつたらしい。果たして、彼女が想いを寄せているシユウ⇨シラカワとは、どういった存在であるのか。シユウは苦笑を禁じ得ない。まさか、と眉を顰めながらサファイーネに向き合う。

「マサキが私の呪文に反応して人格を取り戻しているということは、淫紋に解呪の呪文が効果を及ぼしているということでもあるでしょう。ならば敢えて欲望を増幅させるよ

うな方法を取らずとも、対処は出来る筈。どこまで持つかはわかりませんが、暫くは私の解呪の呪文だけで対応しますよ」

そう優しく囁きかけてやれば、サファイーネは安心したようだ。手間のかかる女狐だと思いながらも、彼女は有能なシユウの手駒でもある。シユウが簡単に手放せる存在でもない。

「廃人化を防ぐ方法の詳細な程度の調査と、書物の調達についてはあなたにお任せします。私は淫紋が効果を得ている魔術について調べることにしましょう。術式さえわかれば解術も可能になるでしょうしね」

「畏まりました、シユウ様。なるべく早く書物の方は準備いたしますわ」

「頼みましたよ、サファイーネ」

それに対して嫣然と微笑んでみせたサファイーネを頼もしく感じながら、早速とばかりに部屋を後にする彼女を見送つたシユウは、再びテーブルに広げている書物の数々に目を通すこととした。比較的時代の新しいこれらの書物が役に立つことがないとシユウはわかつてはいたが、何もせずに無為に時間を過ごしたくはない。こうしている間にもマサキの廃人化は進んでいるかも知れないのだ。とはいえ、かつては知識の宝庫であつた筈のこれらの書物は、今となつ

ては何とも色褪せて見えて仕方がない。

人間とは膨大な歴史という時間の前に於いては、かくも無力な存在であるのだ。

だからといって逃げ出してしまえる問題でもない。あのままの状態のマサキを、どうして彼を頼りにしている魔装機の操者たちの許に返せようか。シユウは書物を手に取った。王室時代に得た魔術の知識、教団時代に得た呪術の知識、そして背教者となつてから得た膨大で体系的な学術の知識……シユウが持てる知識の全てを総動員して作り上げた解呪の呪文は、それでもマサキを完全に元の状態に戻すことは叶わなかつたのだ。そうである今、頼りになるのは過去の知識を記している数多くの書物だけだ。

——いずれにせよ、残された時間はそうないだろう。

三日三晩、性交を続けられるだけの強力な欲望を付与する魔術は、あれだけマサキを消耗させておきながら、それでも効果を消失したりはしなかつた。それもそうだ。シユウは思う。元々が生贄の意思を奪う為の魔術であるのだとしたら、元に戻してやる必要などどこにもない。地獄への片道切符。それはあれだけ強力な魔術にもなる筈だ。

椅子に腰を下ろして書物に目を通し始めたシユウは、そこまで考えて、気詰まりを起こしている自分に息を吐いた。少しもしたらマサキの様子を見に行つてやらなければ——

と、未だ目を覚ますことのないマサキに思いを向ける。彼の為を思えばこそしたことだったとはいえ、衝撃を強く与え過ぎた。忸怩たる思いを抱えながら、とはいえ物思いに耽つたところで事態は進展しない。シユウは書物の頁を捲るべく、紙の隅に指を置いた。その瞬間だった。

——アア、アア、アアアアアアッ！

寝室から人のものとは思えないような絶叫が響いてきた。

※ ※ ※

急ぎ寝室に向かつたシユウがその扉を開くと、ベッドに手足を繋がれたマサキが身体を反らせて暴れていることだった。半日も休んでいないというのに、流石は淫紋の力と云うべきか。三日三晩も性交に明け暮れたとは思えぬ暴れっぷり。その体力は尽きることを知らないようで、シユウがあれだけきつく縛り上げたロープは、手足に傷が付くのも構わずに振り解こうと暴れているマサキの力でたわみ始めていた。

ヴォルクルス様、ヴォルクルス様。讒言うわごとのようにサーヴァ

Ⅱヴォルクルスを求める言葉を吐くマサキの瞳は、いつの間にか再び紅く染まっていた。どうやら淫紋の力は、一度の解術程度では直ぐまたその効果を取り戻してしまうよう

だ。マサキと呼びかけてやりながら、シユウは心苦しくもたわんだロープを引き絞ってゆく。アア、アア、ヴォルクス様。俺ハコニイマス。かつて彼の口から、ここまで自尊心を奪われた言葉が口を衝いて出たことがあっただろう。シユウの胸は怒りに燃える。人間の尊厳を奪う邪神。シユウも幾度となく自我を奪われ、尊厳を失わせられたからこそのわかる。サーヴァールヴォルクスが邪神と神の名で以て尊称されるのは、その強大な力も勿論だが、一度その影響下に入ってしまうものなら、抜け出すのが非常に困難になるからだ。支配の印を刻み付ける契約の儀式。しかし、その力無くしても、これだけの支配力を保ち続けることが出来ようとは。その存在を信じ、人生を捧げる者たちが存在する限り、サーヴァールヴォルクスが力を失うことなどないのだろう。シユウは改めて教団の解体とヴォルクスの殲滅を誓った。

教団が無関係の人間に出した被害は計り知れなかったが、シユウがこれほどまでにその事実を怒りを覚えたのは、今回が初めてだ。マサキとアンドー。彼はこの闇深い地底世界ラ・ギアスの希望だ。しかも傑出した才能を持つ彼は、四人の魔装機神操者の中でも、間違いなく最後に全てを託される真の希望となるだろう。その彼をして、これだけの苦境に立たせようとは。マサキの身体を確りとベッドに固

定し直したシユウは、自らの足元に高速詠唱で魔方陣を展開させた。思うことは多々あれど、とにかく、マサキの正気を取り戻さなければ。

アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリフィ・チュム・エクサイテ。それがひとときの慰めにしかならないことを承知で、シユウは呪文を唱えた。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリフィ・チュム・エクサイテ。びくん、とマサキの身体が大きく跳ねる。やめろ、やめろんだ。俺にその呪文を聞かせるな。拘束された手足を解くように、再びマサキが暴れ始める。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリフィ・チュム・エクサイテ。いやだ。イヤダ。ヴォルクス様。サーヴァールヴォルクスとの交わりとは、彼にとつてどういった性質のものであったのだろう。シユウはふと心に棘が刺さっているような感覚に捕らわれた。アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリフィ・チュム・エクサイテ。だっ広い祭祀場に足を踏み入れた瞬間を思い返す。マサキは陶然とした表情を浮かべて、無数の触手の中にいた。

果たしてそれに比類する快感を、いざ他の手段が無くなったその時に、シユウはマサキに与えてやる事が出来るだろうか。そもそもが生贄の自我を奪う為に生み出された呪術であるのであれば、廃人化を防ぐ手段はシユウが自ら生

み出さなければならぬ。朽ちるが運命さだめの生贄に、自我など必要ないのだから。だとすれば、時間稼ぎの為の性行為、あるいはそれに準ずる行為は、否が応でも、必要になつてしまふのだらう。マサキの意識を保つ為に、マサキに人並み以上の快楽を与える。気持ちのない相手に対して、決して身体を開くことなどないだらうマサキが、ヴォルクルスによつて覚え込まされた快感、その深さに思いを馳せたシユウは、自分に科せられている責任の重大さに、闘志を湧き立たせるより、困惑を覚えてしまつていた。

密やかな欲望がシユウにはあつた。

誰にも悟らせまいと自分を律し、胸の奥に鍵を掛けるようにして仕舞い込んでいた欲望。マサキの全てが欲しい。髪の中から、爪の先まで、心も含めた全てが欲しい。そこには当然ながら、マサキに対する肉欲も含まれている。

彼がシユウの手で絶頂オーガズムを迎える瞬間の表情を、幾度となくシユウは夢想してきた。だからこそシユウは怒りを覚えたのだ。シユウの怒りの根源にあるのは、教団の手段を選ばない卑劣さは勿論であつたが、それ以上に、シユウが与えたかつたものを、術や淫紋の力を借りたとはいへ、ヴォルクルスが容易に叶えてしまつたからだつた。それは嫉妬と云うより敵愾てきがい心に近い。シユウは愛情を綺麗ごとで片付けられてしまえるほど、人生に達観してはいなかつた。

男という生き物は厄介な生き物でもある。未熟な存在を、自らの手で育て上げることに至上の歓びを感じてしまうような。

マサキの全てを欲していたシユウは、マサキが恋愛恋愛ごとに対して未熟であつたからこそ、自らが彼に快楽を教え込みたいと、それが叶わない望みだと思いながらも、期待をかけずにいられなかつた。その夢が破れたことが、シユウの肉欲に火を点けた。全てを忘れてしまえるほどの快楽を、けれどもそれは、こういった状況下であるからといって、叶えていいものであつただろうか？ 否。シユウはマサキの全てが欲しい。心も身体も、全てを自分に捧げて欲しい。その上で、身体を預けて欲しい。では、今のこの状況で、シユウがその素肌に触れることが許されたからといって、彼は心までもシユウに預けてくれるだろうか。そんなことがある筈がない。シユウは即座に否定していた。シユウはマサキがシユウの身体を性的な意味で求める言葉を吐いたのは、淫紋の支配下にあるからだとして正しく理解している。

目の前に想う相手との性行為の機会があつた時、数多の男は欲望に流されて、判断を誤ることだらう。なしくずしに付き合ひに持ち込めなかつたかと思えたり、或いは、ひととき欲を叶えられればそれでいいと考えたりしては、安易に手を出してしまうことだらう。けれども、シユウは誤らな

い。シユウが欲しいのは、マサキの心であるからだ。淫紋の支配から解放されれば、マサキが自分を求めることなどなくなる。それがシユウには寂しくも感じられているが、本来あるべき姿に戻ることを喜ばないほど、シユウは肉欲に飲み込まれてはいないのだ。シユウにはマサキの回復を望める善良さがある。

——アドベニツト・テンプス・リベラティオニス。サク  
リファイ・チュム・エクサイテ……

三步進んでは二歩下がるような関係を長く続けてきてしまったシユウとマサキは、こういった機会でもなければ身体を重ねる関係には至れないのだろう。それは限らない誘惑。魅惑的なシチュエーションだ。それでもシユウは、一步を積み重ねて自らの望む未来に辿り着く方がいい。マサキがもし、シユウの気持ちに応じる日が来たとして、彼の性格であれば、間違いなくシユウがそういった方法取つてくれることを望むだろう。

——アドベニツト・テンプス・リベラティオニス。サク  
リファイ・チュム・エクサイテ……

そういった自らの疚しさから生じる迷いを断ち切るように、シユウがひたすらに呪文を唱えること十分ほど。マサキはようやく落ち着きを取り戻したようだ。

相手の本性を見抜くように力強い黒々とした眼まなこ。とはい

え、本調子とまではいかないようだ。精彩を欠いた様子ではあったものの、これまでの経緯を考えれば、シユウの解呪の呪文如きで、その逞しき生命力までもを取り戻せもしないだろう。大丈夫ですか、マサキ。シユウがマサキにそう言葉をかけてやると、ああ、と表情を沈ませながらマサキが答えた。

「迷惑をかけちゃって、本当にすまねえ……自分でも何が何だかわからなくなるんだ。俺のしていることなのに、俺の意思ではどうにも出来なくなる。今だつてそうだ。身体が疼いてどうしようもない。なあ、シユウ。俺はどうしたらいいんだ。こんな状態じゃ仲間のところにも戻れねえし、第一、魔装機神の操縦だつてままならねえ。正直に聞かせてくれ。俺は元に戻るのか」

「今のところは難しいですね」

ベッドに拘束されたまま、それでも即座に自分の置かれている状況を把握し、冷静に尋ねてくるマサキの精神力の強靱さに嘆息し、同時に申し訳なさといったまれなさを感じながらも、シユウはそうした己の心弱さを表に出さぬよう努めながら、そう答えた。だろうな。と、マサキが宙を睨んで呟く。自らのことだ。精神と身体の変調を、誰よりもわかつているのはマサキ自身であるのだろう。

その、運命を受け入れてしまっているようなマサキの泰然自若たいぜんじじやく

とした態度が、シユウの気持ちを俄然奮い立たせた。このままで終わらせてなるものか。シユウには長く教団に身を置き、そして戦ってきた自負がある。今は在野に下つたとはいえ、知識や人脈であれば、教団の司祭クラスと同等だったし、そうである以上、使えるものを全て使ってみせれば、どこかには必ず突破口が開けるに違いないのだ。ましてやシユウはひとりではない。サフィーネ・グレイス。紅蓮のサフィーネのふたつ名を有する彼女は、ヴォルクルス教団においては筋金入りの信者であつた。それは数多くの汚れ仕事を任されてきたということでもある。実働的な情報収集能力で彼女に勝る人間はそういない。

サフィーネと己であれば、必ずやマサキを淫紋の支配から解き放つことが出来る。いや、出来なければならぬ。シユウは思いも新たに、マサキに慰めの言葉をかけた。

「恐らくは遥か太古の呪術を元とした魔術であると推測されます。暫く不自由を強いますが、何も手掛かりのない状態ではありません。どうか気を強く持つて、私たちの調査が済むのを待っていてください」

「待つ、か……」

マサキはそう呟いて、シユウに視線を移した。死にそうだ。そう言葉を継ぐ。

「お前はわかつてるだろ。俺が今どんな状態にあるのか。

こうして話をしているのですら辛く感じるぐらいに、頭の中がいっぱいなんだ」

何が、とは口にしなかったマサキの股間にシユウは目を滑らせる。どうしようもない切なさを訴えている男性器。天を仰いで濡れそぼっている。解消されない性欲をその身に抱え続けなければならぬ辛さを理解出来ないなどと、シユウは云わない。長く彼に想いを向け続けてきたシユウは、自身もまた醜い欲望に強く囚われるときがあつたからこそ、ままたらない本能に支配されてしまうマサキの気持ちを少しは理解してやれる。

ましてやそれは自らの望みとは裏腹に生じてしまうもの。どれだけ苦しい精神状態にあるだろう彼が、その気持ちを押しえ込みながら必死に言葉を紡いでいる。シユウはどうにかしてその苦しみを和らげたいと思ひはするものの、今はその手立てがない。あるとすれば、サフィーネが口にした噂話。与え過ぎない程度に性欲を解消してやる。それだけだ。

例えば、とシユウは口にした。自らがその手伝いをするのは、出来れば最後の手段にしたい。だとすれば、考えられる性欲の解消方法は限られる。

「適度に時間を空けて自慰に励むのはどうだと思ひますか。これはサフィーネが仕入れてきた噂話ですが、満たし過ぎ

ない程度に性欲を解消させることが、あなたの廃人化を防ぐ手段になり得るのだそうです」

「どうなんだろうな……」

マサキはそこで初めて途方に暮れた顔をした。そして少しの間、迷いを見せた。けれども話をしないことには始まらないと思つたのだろう。シユウには見当も付かなかつた告白を、彼は静かな声の調子で始めた。

「ヴォルクルスに捕らえられていた間、自分でもしてはいらんのだ。俺じゃない方の俺だ。ヴォルクルスに全てを捧げようとしている人格が俺の中にはある。そいつがヴォルクルスの手が離れたときに、我慢できない様子で自慰オナニーを始めた。でも足りないんだよ、全然」

「もしかしたらヴォルクルスの支配から離れている今であれば、また違つた結果になるかも知れません。もうひとりの自分、とあなたが云う人格が、どうやらあなたの中に宿っているらしいというのは、私の目から見ても明らかです。適度に傾合いを見て、その人格が表に出ないように解呪をしますから、あなたも適度に自分の性欲を解消してみても……と、いうより、今のところはそれしか方法がないでしょう」

お前は——、と云つたマサキが口を嚙む。シユウにはその先の、マサキが云えなかつた台詞がわかつたような気がした。彼は自らの手で自らを慰めるのではなく、同性の男

根で嬲らりたいのだ。そうでなければ、あのとき。シユウがプラーナを分け与えたあの瞬間に、正気に満ちた目をしてながら、どうしてシユウの男性器を求める言葉が吐けたものか。

「辛いでしょうが、暫くの辛抱です。今、サファイーネに文献を手配させています。必ず元に戻せるよう手段を探し出して見せますから、どうかそれで耐えては頂けないでしょうか」

わかつた。と、マサキが返事をするまでには、少しの間があつた。それが彼の葛藤の激しさを表しているようで、そこまでマサキを変えてしまつたヴォルクルスが、シユウにはどうしようもなく憎らしく感じられて仕方がなかつた。あのマサキにこれだほどまでの屈辱を与えるなど、度し難い。シユウの胸の内から、様々な感情が泉のように湧き出てくる。けれどもシユウは、それを決して表に露わにするような真似はしなかつた。マサキの不安を悪戯に駆り立てるのは本意ではなかつたし、何よりそうしてしまうことで、自身のマサキに対する気持ちに歯止めが利かなくなりそうに感じられたからだつた。



### 3. 飲み込まれてゆく緊迫感<sup>スリル</sup>

ひととき落ち着いたように見えたマサキの拘束を解いてやったシユウは、彼に服と食事を与えてやった。あんまり食欲は湧かないんだ。そう云ったマサキに無理に食事を取らせ、寝室を取り敢えずの彼の居場所とした。解呪の間隔をどのくらいにするかは、シユウとしても悩ましい問題ではあったが、マサキが淫紋の力に完全に飲み込まれてからは、マサキの身体にかかる負担も相当なものだろう。そう考えたシユウは日に四度、マサキに解呪を施すこととした。

神殿からマサキを連れ戻り、そして彼が暴れ出すまでの時間。それよりも少しばかり短い時間に設定しておけば、ヴォルクルスを求めるマサキの人格を表に出さずに済むことだろう。もしかすると、日を重ねるごとに、その影響が強くなることも考えられたが、その時はその時だ。解呪の呪文を唱えるのには、それ相応のエネルギーが必要になる。シユウとて無尽蔵な魔力を有している訳ではなかった。

翌日には早くもサフィーネが、それなりの量の書物と文献を届けてきた。差し当たり手に入れた分を持ち込んだようであったが、それでもシユウがそこに記されている

情報の全てを解析し終えるまでには、三日はかかりそうだった。彼女には、他にも気になる文献がかなりの量あるようだ。少し時間がかかりはするものの、こちらもなるべく早くシユウの手元に届けられるようにすると、サフィーネは頼もしくも余裕を崩さぬ表情でさりと云つてのけた。「それにしても、その方法は、些か危険な賭けにも思えます」

マサキがその身に抱えてしまった性欲の解消方法を、シユウから聞かされたサフィーネは、とはいえ彼女にしては、らしくなく憂鬱そうな表情を浮かべてみせたものだ。

「しかし、私が相手をする訳に行かないでしょう。それともあなたはそれが望みですか、サフィーネ」

「口の堅い者を用意出来ます。身分の保証も可能な」

「無理がありますよ。マサキは誇り高き魔装機神の操者だ。見ず知らずの他人に身を任せさせた結果、それが最終的に彼の首を絞める事態になることもあるでしょう。ラングランの一部の人間は、魔装機機存在を快く思っていないけれど、その操者が地上人であることも快く思っていない。どれだけあなたが保障出来るといっても、それは現時点でのこと弱みを晒している相手であるかを、将来的に渡って保障することが出来ますか？」

「しかし、解呪を定期的に行うにせよ、自慰だけで鎮めら

れるような力ではないように、私には感じられます。その結果、却って欲望をその身に溜め込むようなことになってしまつては、廃人化が進むだけにはなりませんか」

それはシユウも危惧していたことであつた。今はまだ、その強靱な精神力で言葉を発することが出来ているマサキであつたが、それでも欲望を鎮めるまでには至つていない。むしろ、ああも身体が欲望を訴えているにも関わらず、よくぞ正気を保つていられるものだ——と、シユウが感服するまでに、マサキの精神は逞しかつた。だからこそ、自分で処理をさせた結果、彼が自慰に物足りなさを感じようものなら、それはそれだけ彼の満たされない欲望をより募らせてしまうことだろう。無論、マサキはそれでも耐えようとし続けるに違ひはなかつたが、既にシユウにその欲望の消化を求める言葉を吐いてしまつている。彼の忍耐力にも限りはあるのだ。その果てにあるのが人格の崩壊でないとして云えたものか。

もしかすると、もう四の五の云つていられる段階にはないのかも知れない。シユウは何度目の溜息を密やかに洩らした。呪術を元としているという情報が真であるのだとすれば、淫紋という未知なる力は、生贄の人格を奪ひ、抵抗を封じ、速やかに儀式を終えられるようにと、気の遠くなるような歳月をかけて連綿とその効果をより強力なものとな

するようになり上げられていったものである。そうした性質を持つ魔術を解呪することが、どれだけの困難を伴うものであるのか。魔術に精通しているからこそ、シユウには予想すら付かなかつた。

「とにかく、今暫くは様子を見ましよう。その結果次第では、あなたの案も考えてみる必要があるでしょう。とはいへ、私としては、それは最後の手段としたところですがね」

「わかりました。ですが、シユウ様。命がかかっている事態であるということは、どうかお忘れになりませんよう」  
「わかつていますよ、サファイーネ。私が解呪の方法を見付け出せばいいだけだという話であることはね」

シユウの言葉に、珍しくもサファイーネは露骨に苦笑いを浮かべてみせ、それでも即座にその表情を取り繕うと、必要な時にはいつでも御用命くださいませ。そう言い残して去つて行つた。

教団歴はサファイーネの方が長い。シユウを主人と仰ぐ彼女は、シユウに対して無礼を働かないぐらいには、自らを律することを覚えたようではあつたが、だからこそ、マサキの欲に対処も施さないシユウの己の知能を過信した態度が、教団の叡智と戦うにしては心ともなく感じられたのだろう。彼女が思わず表してしまつた苦笑はその証左。サファイ

ネーグレイスはシユウに全てを捧げる配下であつたが、だからといって、主人の神をも畏れぬ自尊<sup>プライド</sup>心の高さに物思わない人形ではないのだ。

それでも過ぎた口を慎んでみせたのは、流石の忠誠心だ。いや、女心と呼ぶべきか……ひとり、山積みとなつた書物や文献の数々を目の前にして、溜息をひとつ洩らしたシユウは、ここに目的の情報が存在していればいいが——と、思いながら早速それらに手を付けようとした。

カチャリ。小さな物音とともに、寝室の扉が細く開かれた。行つたか。と尋ねるマサキの表情は浮かない。それもそうだ。サフィーネの提案は、魔人化を防ぐ為と云えば聞こえはいいが、とどのつまりはマサキを見知らぬ男たちに犯させる算段である。当の本人たるマサキが聞いていて気分のいいものである筈がない。大丈夫ですよ。不安に違いないマサキを安心させようとシユウは口を開いた。

「あなたを他人に任せるなど、私の自尊<sup>プライド</sup>心にかけてもさせはしませんよ。差し当たり必要な書物や文献も入手出来ましたし、後は手掛かりを見付けるだけ」

「そんな話が聞きたいんじゃない!」

次の瞬間。バン、と壁にぶつかつては跳ね返る勢いで扉が開け放たれる。そこから疾風のように飛び出してきたマサキが、途惑うシユウに向かつて飛びかかつてきた。

不意を突かれたシユウの身体が床に転がる。もしや、とシユウがその瞳を窺うも、そこには黒々とした眼<sup>まなこ</sup>がふたつ並んでいるばかり。マサキ。シユウは自らの身体の上ののしかかつてきたマサキの名を呼びながら、その身体を振り払おうとするも、そこは流石に歴戦の覇者だけはある。シユウが力を込めて引き絞つたロープをたわませてみせた無類の力は、いとも容易くシユウの抵抗を捻じ伏せてしまう。餓えた獣よりも性質が悪い。手首を押さえ込まれたシユウは、自らの顔を見下ろしているマサキの顔を、呆氣に取れながら眺めていた。

切羽詰まつた瞳。硬く結ばれた口唇が、赤い舌を覗かせながら薄く開く。

前屈みになつたマサキの表情が、少しでも安堵を感じて緩んだように、シユウの目には映つた。マサキ。それで止められる欲望ではないとわかつていながら、シユウは一縷の望みをかけてその名を呼んだ。次の瞬間には重なる口唇。男とは浅ましい生き物だ。肉欲を抑えきることの出来ないシユウは自らの口唇を舌でこじ開けてくるマサキのなすがままに。その口付けに身を委ねた。

腰に乗っているマサキの股間の昂ぶり具合が、布越しに伝わってくる。やや小ぶりににも感じられる男性器。その肉感的な硬さは、彼が耐え続けた欲望の激しさを充分過ぎ

るほどに物語っている。これでは耐え続けることに疲れてしまうのも無理はない。シユウはどうしてやるのがマサキにとつての最善であるのかと、頭の中で選択肢を思い浮かべては、その結果をシミュレートしてみるも、未知なる事態に直面している現状では、正確な結果を導き出すことさえも難しく。

シユウの手首を強く掴んで床に押さえ付けているマサキは、一心不乱にシユウの口唇を食っている。シユウの気持ちなど、今のマサキには推し量る余裕などないのだ。ただ自らの体内で燻ぶり続けている欲望、いつ終わるとも知れない肉欲への執着心を昇華したくて堪らない。本能の赴くままに行動するしかないまでに追い詰められてしまったマサキの、欲に溺れた姿。そこに幼くも誇り高き魔装機神の操者の面影はなかった。

繰り返した夢想。だのにマサキとの口付けは、その温もりの優しさを、シユウに一切伝えてはこなかった。焦燥感が募る胸中。どうすればマサキを落ち着かせてやれるのか。シユウの中では自らの欲望と感情、そして理性が拮抗していた。このままでは早晚マサキは廃人化を迎えるだろう。そんなことはわかつている。それでもシユウは、やれることをやらずして、安易に性交に雪崩れ込むのだけは避けたかった。

ましてや、身元の保証が出来ていようと、赤の他人にマサキの欲望の解消を任せるなど、どうしてマサキに想いを捧げているシユウに決断出来るようか。

——ああ、ああ、シユウ。シユウ。

時に讒言のように自らの名前を呼びながら口付けを繰り返してくるマサキに、シユウは少しずつ決心を固めていった。やがて、その口唇が息継ぎを求めて僅かに剥がれる。今しかない。マサキ——。シユウは再びマサキの名を呼んだ。なんだよ。息荒く、端近にあるマサキの顔が、シユウの様子を窺うように見下ろしている。

「少し落ち着きなさい」

「これが落ち着いていられるか！」

「気持ちばかりです。ですからもう少し、私の話を」  
気が狂いそうだ。激しく頭を振りながら、悲鳴に近い声でそう言葉を発したマサキは、感情が昂つたのだろう。瞳に涙を滲ませた。

「何をしても達けない。だのに時間が経っても鎮まらない。身体中にあの記憶が蘇ってくる。アレが欲しい。あの快感が欲しい。誰かが俺の中でずうっと、あの時間を取り戻したいと望んでいる。その辛さがお前にわかるかよ！」

零れ落ちたマサキの涙が、シユウの頬を点々と濡らしてゆく。嗚呼。シユウの心にマサキへの哀憫の情が湧き上がっ

てきた。彼を元のマサキ・アンドーに戻してやりたい。その為には手段や経過に拘っている場合ではないのだ。

わかりましたから。シユウは自分でもどうにもならないほどに表情を乱していると思ひながら、マサキに手首を戒めている手をどけるように云った。嫌だ。駄々を捏ねるている子供のような表情と声。それらがただただ愛おしい。

愛おしいからこそ、シユウはせめて少しの間でも、マサキの身体を支配している欲望から、彼を解放してやりたかった。このままでは何も出来ないでしょう。シユウはそう言葉を継いだ。感じている後ろめたさが、サファイーネやモニカに対してではなく、マサキの心を欲しがっている自分自身に対するものであることに失笑する。シユウはどこまでも独善的な人間なのだ。

——手をどけて、そして脱ぎなさい。

マサキの身体がびくりと震えた。シユウ、と消え入りそのような声がシユウの名を呼ぶ。聞こえませんでしたか。出来るだけ冷静にそう告げると、マサキはようやく赦しを得た罪人のように身体を小刻みに震わせながら、何度も何度も首を横に振った。ふっとシユウの手首を掴んでいる手の力が緩む。シユウはマサキの指の痕が残る手首を摩りながら、マサキの身体ごとその身を起こした。ついでとマサキのシャツのボタンを外してやる。

我慢が限界を超えてしまっているのだろう。外れたボタンに袖を抜くのももどかしそうに、マサキが即座にシャツを脱ぎ捨てる。羞恥を感じる間もないほどに、欲に踊らされているマサキのあられもない姿。それを愚かしいこととはシユウは思わない。全てはその下腹部に刻まれた忌まわしき淫紋の所為だ。

そのまま、シユウの膝の上でズボンを脱ぎ、下着一枚となったマサキは、お前は……と、熱っぽく濡れた眼差しをシユウに向けてくる。

——見せたくないものがあるのですよ。

シユウはそう云って、マサキの身体を床に倒した。下着を剥ぎ、自らの指を舐める。下腹部に浮かんでいる黒々とした不気味な子宮の形をした紋様。興奮しているのだろう。赤く染まった肌の中央で、淫紋はとてつもない存在感を放っていた。

それを暫く眺めたシユウは、緩く足を開いているマサキの双丘の中に指を潜り込ませた。

収縮している菊座。どれだけヴォルクスルの欲望を受け入れさせられたのだろう。そして、どれだけ快楽を覚え込まされたのだろう。唾液程度では潤滑油には足りないと思ひもしたシユウの考えを裏切って、するりと指先が菊座の中へと入り込む。ぬるりとした触感。マサキが息を呑む感

触が、窄<sup>すぼ</sup>んだ菊座の向こう側から伝わってくる。

肉を押し分けて更に奥へ。ほら、と、シユウは二本の指をマサキの腸内へと押し込んだ。マサキの息の音がはあはあと荒さを増し、あつという間に菊座がその全てを飲み込んだ。切なげに収縮する菊門が全てを物語る。どこがいいの？ シユウはマサキに尋ねながら、指先で腸壁を強く押してやった。

——あ、あ、そこ。そこ……っ……

緩んだ口元に、細まった瞳。あの強気で勝ち気なマサキが、シユウの指の動きに応えては好色によがっている。

ああ、ああ。甘ったるい声が宙に舞う。普段の声より一オクターブは高い喘ぎ声に、出来ればもつと違った形でこうしてやりたかった。シユウは未だ捨てきれない自らの疚しさ——ともすれば感傷<sup>センチメンタル</sup>的になりがちな自らの希望<sup>ねが</sup>いを心の中でせせら笑った。けれども欲望とは浅ましいもので、冷血人間なきらいのあるシユウを以てしても、抑えきれないまでに理性を浸食しては、厄介にもその純情な感情を切り裂いてしまうのだ。

啼<sup>な</sup>かせたい。

自らの愛撫に身を任せているマサキの情欲をそその姿に、そう思わずにいられなくなったシユウは、空いている手を、既に隆起して上向く乳首へと這わせていった。仄かに上気

した肌が、しつとりと汗に濡れている。あ、ああ。指の腹で先端を撫でてやると、マサキは堪えきれない様子で首を左右に振った。いく、やだ。いく。余程、他者からの愛撫に飢えていたとみえる。さしたる刺激でもない愛撫にすら過敏に反応してみせるマサキは、高く、細く、悲鳴にも似た嬌声を上げながら、ほどなくして射精に達した。

男が精を放った後の倦怠感を知らないシユウではない。それは特殊な感情を伴う脱力感でもあるのだ。世界の全てに対して冷酷に振る舞えるまでに、何もかもがどうでも良くなる……だのにマサキの欲望は尽きることを知らないように、抜かれることのないシユウの指に、早くも続きを求めて腰をゆっくりと動かし始めていた。

今しがた精を放ったばかりのマサキの男性器は、既に緩く勃<sup>た</sup>ち上がっている。それだけ淫紋の力は、性に対して効力を発揮するものであるのだろう。シユウ、もつと、もつと。夢見心地なマサキの瞳。欲望を、渴望を、あられもなく曝け出している表情のなんと蠱惑的であることか。

恥も自尊心もかなぐり捨てて、彼はシユウの指を更に奥へと引き込むように腰を振っている。早く、は、やく……：望むがままに与えてやりたい感情と、焦らし尽くして啼かせたい感情。そして思うがままに凌辱し尽くしたい感情が、シユウの内部<sup>なか</sup>で激しく衝突する。してはならないことを、

必要に迫られてのこととはいえしまっている。ささやかな良心が訴えかけてくる仲裁の言葉など、それらの感情の前では無力なものだ。

ヴォルクルスに囚われたマサキの姿を目にしていながら、シユウは自らに与えられる快楽を求めて言葉を吐き、そして能動的に腰を振ってみせるマサキの姿に、改めて目を瞠る思いでいた。

——ほら、マサキ。啼きなさい。

呆気ないほど、簡単に。乳首を緩く弄んでやりながら、菊座の奥を責め立てただけで、立て続けに二度。合わせて三度の射精を迎えたマサキは、それで被虐的な性欲に対する渴望が十分満たされたようで、激しく腰を振ることをしなくなった。男の身体は正直なものだ。まだ熱を持つてはいるものの、それまでのように腹部に近く、勃つことをしなくなった男性器。シユウはそろそろ頃合いと、もう充分でしょう、マサキ。と、その身体から手を離れた。

マサキの呼吸に合わせて収縮する淫紋が、まるで自ら意思を持つて蠢いているように映る。

——後は自分で満たしなさい。

その瞬間の、マサキの絶望に満ちた表情！ 欲望に支配された彼は、快楽から突き放されただけで、こんなにも世の終わりを嘆くような表情になるのか！

全ては淫紋の所為であるとはいえ、普段であれば決して見られない表情を、立て続けに目の当たりにさせられている……シユウの心に得体の知れない感情が湧き上がった。それは焦燥感であつたかも知れなかつたし、嫉妬心であつたかも知れなかつたし、もしかすると劣等感であつたかも知れなかつた。シユウには知らないマサキの表情がまだある。それをシユウは心得ていたつもりであつたけれども、自らの欲望を果たす為に、儚くも幾度も想像を巡らてきせたそれらの表情を、いとも容易く超える現実たるマサキの表情。未知なる世界を、人よりも遙か先まで予測出来るシユウは、だからこそ、既知となつたそれらの表情に例えようのない感情を覚えてしまったのだ。

一瞬で過ぎ去つていった感情の重み。胸の奥に蟠るような感情を、シユウは喉につかえた食事を水で飲み下すように、そろそろと胃の底へと落としていく。ただただヴォルクルスが憎い。その怒りを目の前のマサキにぶつけてしまいたいようになるほどに、シユウの心は千々に乱れていた。

——やだ、シユウ。やだ……

例え自らの内的世界が崩壊しようとも、容易には表情を崩せないシユウ。シラカワという人間は、きつといつかになる時でも平静を保つてしまふ性を持つて生れ落ちてしまったのだ。マサキの目には恐らく、シユウの表情は変わりが

く映っていることだろう。だからこそ、マサキは何も気付かない。シユウがマサキに対して、どうしようもなく表現し難い感情を有してしまっているなどということは。

暫しの間、絡み合う視線。先に動いたのはマサキだった。身体を起こしたマサキは、縋るようにシユウの胸に飛び込んだ。背中に戻した手で、シユウの衣服を掻くように、幾度も幾度も布地を掴んでくる。小刻みに震えている指先は、まるで依存性のある嗜好品の中毒患者のようでもある。マサキ。シユウにはそれ以上の言葉が見付からなかった。

名前を呼ぶ以外の言葉に、何の意味があつただろう。この性欲に支配されているマサキ・アンドーという、知つたように知らない人間相手に。

それはマサキと同様だ。見知つた人間である筈のシユウに、形振り構わず性欲の解消を求めてくるマサキは、きつと自身の中にある葛藤を乗り越えてしまつた後であるのだろう。挿れてくれ。正気と狂気の境目にいるマサキ。淫紋よこしまという邪なる力に囚われた彼は、自らの欲望を果たす手段を知つてしまっている。だからこそ、今また再び明瞭はつきりとシユウの口唇を塞ぐ寸前に、マサキはそれを叶えられる方法を口にしたのだ。

そのマサキの顔を、口唇が触れると同時に、やんわりと

シユウは引き剥がした。

「与え過ぎてはならないですよ、マサキ。強い刺激はより強い刺激によつて、記憶を書き換えてゆくことでしよう。それは確実にあなたの心を蝕むですよ。私がヴォルクルスの支配を受けたようにね。あなたの意識をそうした刺激の従僕にしたくない。今は我慢の時ですよ、マサキ。あなたと二度と自我を失いたくはないでしょう」

ほら、マサキ。シユウは床に散らばつた衣服をマサキに着せてやつた。どうやらマサキはシユウの云うことを聞く氣になつたようだ。とはいえ、人形のように服を着せられるその間、マサキはひとことも言葉を吐くことをしなかった。

沈黙。それが彼の出した答えであるのだ。

求めれば求めた分だけ自分が壊れてゆく。そう告げられて、誰が平常心を保てようか。マサキは戦っている。風の魔装機神の操者であるマサキ・アンドーであり続ける為に。「大丈夫ですよ。直ぐにあなたを元に戻す方法を見付けてみせます」

シユウから離れて立ち上がったマサキは、シユウの言葉に振り返ることもせず。それが彼が抱えている葛藤の全てであるのだろう。やけに小さく見える背中を向けたまま、わかつた、と呟くように言葉を吐くと、静かに寝室へとそ



の姿を消していった。

※ ※ ※

時間を見てはマサキに解呪の呪文をかけ直しながら、サフィーネより届けられた書物や文献を浚ったシユウは、夜通し続けたその作業に、思ったような収穫を得られぬまま迎えた朝に、取り敢えず衣服を着替えて仮眠を取ろうと、寝室に足を踏み入れた。

知識というものは、答え、或いは真理を得るという報酬があるからこそ、その収集に高揚感を覚えるものなのだ。いつもであれば三日三晩寝ずに知識欲を満たせるシユウであつたが、今回は事情が異なつていた。時間に制限があるにも関わらず、何ひとつ成果を得られない。焦る心とは裏腹に、疲労感の高まつた身体と脳。シユウはそれを休めたい一心で、警戒心を持たずに寝室に続く扉を開けてしまった。

シユウに正常な判断力が残されていれば、そうした振る舞いには及ばなかつたに違いない。油断。そう、それは紛れもない油断だつた。扉の向こう側でベッドに横たわっているマサキは既に目を覚ましているようで、ブランケットが緩やかに蠢いている。もしかすると、欲望を訴える身体

を持て余して、眠れぬ夜を過ごしたのやも知れない。そんなことを考えながらベッドの脇を通り抜け、クローゼットの前に辿り着いた瞬間に、ようやくシユウはそれに気付いた。密やかに荒らいでいる息。シーツかブランケットを嚙んでいるのか。ん、んん……と、くぐもつた声が聞こえてくる。とはいえ、マサキとて扉が開いたことぐらいは気付いていることだろうに。シユウはそれでも自慰の手を休めないマサキに、きつと昨日のことを当て擦っているのだと思つた。思つて、つい頭に血が上つた。

疲労で理性が弱つてしまつていたのだ。

欲しいものを与えてもらえずにいるマサキが、どれだけ欲望を募らせているのか。それをわからないシユウではなかつたけれども、そうしたマサキの異常な状態を元に戻す為に苦勞を重ねているのだ。それを、それを。シユウは無言で、マサキの身体を包んでいるブランケットを剥ぎ取つた。シャツの裾を嚙んで、ずり下ろしたズボンの奥。菊座を嚙っているマサキの姿が露わになる。そのひとときだけマサキの動きが止まつた。何だよ……反抗的な瞳。している行為に不釣り合いなふてぶてしい表情は、汗ばんだ額に張り付いた前髪が目に入らなければ、元に戻つたのかと錯覚してしまうほどにいつも通りだつた。

「邪魔をしたことは詫びますよ。ですが、マサキ。私が衣

服を取り出す少しの間ぐらいいは我慢をして欲しいものですね」

ぎしり、とベッドが鳴った。ベッドの上に乗り上がったシユウは問答無用でマサキの脚を開かせた。止めるとは云わない辺り、シユウの予測は当たっていたのだろう。昨日の終わり方をマサキは不満に感じている。そんなに欲しくて堪らないの？ シユウは菊座に埋め込まれているマサキの指に沿って、自らの指をその腸内へと滑り込ませていった。そうして、残った指でマサキの手を握ってやる。

「これだけ飲み込めば充分でしょう。ほら、動かしてみせなさい。あなたには躰が必要なようだ。私の前で節度が保てる程度にはね」

シユウと比べれば小柄な身体に覆い被さるようにして、耳元に囁きかけてみれば、どうやら思った以上にマサキは被虐的な扱いをされるのが好ましい。否。もしかするとそれは、マサキの内部で表に出る好機を窺っている教団によって生み出されし、もうひとりのマサキの人格であるかも知れなかった。

いずれにせよ、マサキはシユウがまだ指を動かす前だといふのに快感を覚えてしまったようで、びくびくと身体を震わせている。

淫紋の力だけとは云い難いマサキの過剰で過敏な反応。

ここから彼は本当に日常生活に戻るのだろうか？ これまでのマサキになかったものを獲得してしまったマサキⅡアンドーという被虐者に、シユウはそう考えずにいられなかった。

育てる手間が省けたとはいえ、快楽に漬け込まれることを知ってしまった身体は、このままではそう遠くない未来に、ありきたりな刺激では満足出来なくなってしまうていつてしまうことだろう。シユウの心にあの表現し難い感情が蘇る。過ぎ去った時間は取り戻せないとはいえ、本当は自らの手でこうしてやりたかった。後悔てもし足りない。遅きに失した教団に対する自らの立ち回りを思い返して、シユウはきつく口唇の端を噛んだ。

あ、あ。と、声を上げながら、マサキが指を動かし始める。シユウはその動きに合わせて指を動かしてやった。奥に……もつと、奥に……重なり合った指先の太さが、ヴォルクルスの触手の感触を思い出させたのだろうか。しきりと指では届かない位置への刺激を求めるマサキに、これ以上は無理ですよ。シユウは言下に否定して、代わりに掴んだその手を自らの手と共に動かしてやった。ここだけでは不満なの？ 指先で前立腺を擦ってやれば、やだやだとマサキは声（こゑ）を荒（あら）らげて嫌（いや）がってみせたものだ。

「何でだよ。何で、そうやって無理に俺（おれ）を達（いた）かせせようと

するんだよ……」

ヴォルクルスはどうかやってマサキを抱いたのだろう。湧き上がった疑問に、けれどもシユウは口を滑らせてしまうほど愚かではなく。変わり果ててしまったマサキの姿に、ただその正気を取り戻してやるべく言葉を吐きだした。「あなたがそうしてしまったのです、マサキ。このままでは私はサファイネが云うように、あなたを身元の確りとした男たちの許に預けなければならなくなる。そうした扱いを許せるあなたではないでしょう。それともあなたは」

シユウはそこで言葉を切った。切つて、再びマサキの耳元に口唇を寄せた。そんなに私に躑けられたのですか。耳朶を舐めてやりながら囁きかけてみれば、やはりまたもマサキの腰が大きく跳ねる。

暫くはこうした扱いで時間を稼げそうだ。シユウは思いがけない収穫に、クツク……と、声を潜ませて笑った。滑稽だ。淫紋の支配が発露させたマサキの被虐的な性的嗜好に、愚かにもそそられてしまっている自分。欲望に踊らされているのはシユウも同様だ。そんなことはわかつている。シユウは重ねた指をゆつくりと、菊座を擦るように出し入れしてやる。躑けられたいのですね。重ねて尋ねれば、どうやってと喘ぎ喘ぎマサキが尋ね返してくる。

マサキが望む部分にまで届かない指先は、けれどもその動きだけで、それなりの快感を与えられてはいるようだ。節度を保ち、我慢を覚えられるようにですよ。云つてシユウはマサキの耳朶を囁んだ。流石にあの触手ではこうした部分にまで思うような愛撫は与えられていないかつたに違いない。それがマサキには例えようもない快感に感じられるのだろう。もつと、と声がかかる。

——あなたがこうした行為だけで我慢が出来るようになったらね。

時に突き立てるように抜き差しし、そして混ぜるように指を回してやる。ここに欲しいのですよう、マサキ。一も二もなく領いてみせるマサキに、でしたら——シユウはマサキの指ごと、その菊座から指を引き抜いた。即座にマサキの目が不安に染まる。先ずは軽い刺激からです。身体を起こしたシユウはマサキの両の乳首に手を伸ばした。

——ちゃんと躑けてあげますよ、私好みに。上手く覚えられたらご褒美ですよ。

またもマサキの身体がびくんと跳ねる。被虐的な扱いに歓びを感じているらしい身体に、シユウは柔らかに刺激を与えていった。

摩つて、<sup>さす</sup>抓んで、<sup>つま</sup>擦つて、時に乳輪をなぞるだけに留め……、もどかしそうに身体を振るマサキを指先で追いかけては、

乳首を舐る。それを繰り返していると、やだ……と、やがてマサキが小さく声を上げた。収斂する菊座が、彼の求める欲望を表しているようだ。きつと、強い快感に慣れてしまった身体。今更ささやかな快感で満足する由もなし。シユウはそれをわかつていながらも気付かぬ振りをして、嫌なの？ と、マサキに問うた。

——ち、が……

——なら大人しくしていなさい。それとも大人しくさせられたい？

びくん、とマサキの身体が跳ねる。ふつと脳裏に過ぎる触手の群れの中にあつたマサキの肢体。うつとりと、与えられる快楽に身を委ねて恍惚とした表情を浮かべていたマサキの姿は、怒りを覚えずにいられないほどに蠱惑的だった。恐らくヴォルクルスはああやって、マサキに直接的な刺激を与え続けてばかりだったに違いない。言葉で辱められることには慣らされていない様子のマサキに、させられたいのですね。シユウは自らの衣装の飾り帯を外した。ほら、マサキ。両手を上げて。云えば、躊躇う様子をみせながらも両手を上げきつてみせる。そのマサキの手首を縛つたシユウは、そのまま彼の手をベッドの柵に繋いだ。

そうして、ひたすらに乳首を舐めた。

はあっ……ああ、あ……マサキは掲げさせられた二の腕

に頬を預けながら、切なげな喘ぎ声を上げた。菊座アヌスを弄られることには敏感な様子だったマサキだったけれども、乳首だけへの愛撫にはそこまで慣らされているようではなさそうだ。陰茎を濡らすまでに先端から先走つた汁を垂らしている男性器からするに、それなりに感じている様子ではあつたけれども、前立腺を刺激されてあつという間に絶頂オナジズに達したのに比べれば、射精を迎えるところまでの快感を覚えるには至っていないのだろう。そうしたところにこそ、付け入る隙がある。シユウは続けて丁寧にマサキの乳首を愛撫してやった。マサキはシユウの満遍ない愛撫のどれにも快い反応を返してきたものだったけれども、その中でもどうやら特に先端をさす摩られるのが好みらしい。長くさす摩つてやると、腰を小刻みに震わせてよがってみせたものだ。

——ああ、シユウ。いつまで……

それを、もう暫く続ければ射精に至れるだろう寸前で止めては、他の刺激に切り替えてゆく。菊座アヌスへの直接的な刺激ばかりを求めていたマサキにとって、それはかなりの責め苦に相当したことだろう。それをシユウの云う「褒美」欲しさに耐えていたに違いない。繰り返すこと幾度となく我慢を続けていたマサキが、ついに堪えきれなくなった様子で言葉を発する。早く、早く、達たかせて。続く言葉に、まだですよ。シユウは自分でも嗜虐的だと感じる笑みを浮

かべながら、マサキの乳輪をなぞり続けた。

つま先を突っ張らせているマサキの脚がシートに深く沈んでいる。こういうのもいいものではないか？ 長く射精を迎えない愛撫に身体を晒し続けていることに、相当の焦れつたさを感じているらしい。シユウの言葉にマサキは激しく首を振ったものだっただけでも、躰なのですよ、マサキ。これもね。そう囁きかけてやれば、びくりびくりと腰を跳ねさせながら大人しくなったものだ。

——ほら、マサキ。ご褒美ですよ。

そうしてマサキが涙を目に浮かべるようになるまでその乳首を舐めたシユウは、いつしか寝室に足を踏み入れた当初の鬱屈した感情が晴れてしまっていることに苦笑しつつも、重ねた約束をどれも果たさぬままここで終わりにしてやる訳にも行かず。汗で張り付きがちになっている髪を除けてやると、そろりとマサキの耳元に舌を這わせていった。

——あ、あ。シユウ、シユウ……っ。

たったそれだけの刺激でも、濡れた舌。それまでとは異なる感触に、マサキは裏返った喘ぎ声を上げた。ましてや焦らされた結果、感度が高まりきった身体なのだ。跳ねては小刻みに震える腰は、その反応を収める術も持たずに。シユウが舌から首筋、喉仏に鎖骨と身体を辿ってゆく間に、面白いように啼き喘ぐ。

——達きなさい。

シユウの舌が乳首に触れる頃には、マサキは息も切れ切れになつていた。飾り帯による手首の拘束を解かれても、喘ぐ声すらともに発せなくなっている様子で、断末魔を上げている生物のように身体をびくびくと震わせていた。

舌先で転がされ、口唇で吸われ、指の腹で撫でられ、指先で抓まれ、そのそれぞれに対して涙を流してよがつてみせるマサキのこの感度の良さ！ これも淫紋の力なのだろうか？ シユウはそう疑問を持ちもしたが、今考えてみたところで答えの出来ない間いだ。シユウは腕の中のマサキを思うがままいたぶった。だからだろう。そのまま、喘ぎ声を二度と形にすることなく絶頂を迎えたマサキは、快感の余韻に身体を震わせるばかりで、会話が出来るような様子にはなく。

——今はここまでですよ、マサキ。続きが欲しければ、自制して節度を保つのですね。

シユウはそう告げ、マサキの髪を一度だけ撫でてやった。そうした刺激にさえ反応せずにいられないらしい。震えを止められずにいるマサキの身体から離れて、ブランケットを掛けてやる。そしてクローゼットの中から着替えを取り出し、未だ余韻に身体を震わせているマサキを一顧した。はあはあと息荒く、ベッドの中。身動きさえもままならな

い様子のマサキに、シユウはマサキの下腹部に潜んでいる淫紋に考えを及ばさずにいられなかった。

どこまでが淫紋の力で、どこからがマサキ自身の性質であるのか。

我を忘れて行為をせがむマサキの姿は紛れもなく淫紋の所為であつたけれども、では彼をしてそうせざるを得ないまでに欲望を付与するのが淫紋の力であるとして、異様に快楽を感じ易くなっているあの身体や、被虐に敏感に反応してみせる姿は何であるのか？ それもまた淫紋の力であつたとしたら、左右対称になつてゐるあの子宮の形をした淫紋が刻まれたが最後。被術者は欲望に溺れ続けるしか出来なくなるではないか。

強力な魔術が齎す影響の強さを目の当たりにしたシユウは、そうしたマサキに八つ当たりにも近い形で自らの欲望をぶつけてしまったことに、微かに胸を痛ませたものの、してしまつたことを嘆いたり悔いたりする性格でもなし。シユウは自らに訪れた好機を、みすみす逃してしまふような人間ではないのだ。

それに、収穫はあつた。被虐体質らしい——あるいはそう化してしまつたらしいマサキに対し、その廃人化を防ぐ為の時間稼ぎの方法を見付けたシユウは、これで過重に性行為を与えずとも、その終わりのない欲望を鎮めてやれる

と思ひながら、ようやくの仮眠を得るべく、リビングのソファに身体を横たえていった。

※ ※ ※

仮眠を終えたシユウは、書物と文献を漁るその合間にマサキに解呪を施してやりながら、その求めに応じては、時間をかけて上半身だけを責め立ててやつた。時にはマサキを膝の上に乗せて耳朶を舐めてやりながら、乳首を弄んでやり、時にはマサキを胸の下に引き入れて細かく口付けを続けてやりながら、乳首を弄つてやる。夜も更け、そろそろ眠りに落ちる前。その日最後のマサキの誘いに応じたシユウは、乳首に触れることさえも止め、マサキが感じ易い部分を探るべく、上半身の各部に愛撫を仕掛けていった。

耳に首筋、鎖骨は勿論のこと、脇の下に肘の裏側、腰、臍、背筋に肩甲骨の下と、決定的な快感とはならない刺激も、積み重なれば相応の快感を生み出す刺激と化す。マサキは鏝という言葉がかなり気に入つた様子で、シユウが言葉で囁つてやりながらそうした愛撫を加えてやれば、それだけで快楽に表情を蕩けさせながらより狂つてみせたものだ。

どうやら腰と肩甲骨の下側が特に感じる部分であるらしい

いまサキは、最終的に背中を吸われながら絶頂を迎えた。オージェスム男性器を受け入れたがついていたマサキのこと。上半身ばかりに愛撫を加えられることに物足りなさを訴えてくるかと思いきや、三日三晩、触手に菊座を責め立てられ続けていることもあつてか、逆にそこを攻められないことに目新しさを感じたようだ。躰と我慢をしている部分もあつただろうが、射精の余韻に浸る姿は、存分に満足を感じている様子だった。

性行為とは直接的な結合が全てではないのだ。

明くる日のシユウは上半身から下半身へと範囲を広げて、マサキの性感帯の把握と開発に時間をかけてやることとした。脚の付け根に腿、臀部、膝裏、踝に足の指……下半身では付け根を感じ易い部位であるようだ。脚の付け根と指の付け根を代わる代わる舐られたマサキは、もどかしさも手伝つてか、身を振らせながら息も絶え絶えに悶えてみせた。

けれども二日目ともなれば、目新しさも薄れる。ましてや淫紋に支配されている身体。生贄に捧げられる為に作り替えられた精神が、このままの状態が続くことを良しと出来なくなつたのだらう。より強い快感を求めて身体が疼き始めたらしいマサキは、男性器や乳首、菊座に触れられずとも射精を迎えられるようになったものの、その先に進ま

ない行為に不満を覚えずにいられなかつたようだ。快感の余韻に浸るのもそこに「褒美」を求める言葉を吐いてみせると、口先でそれを先延ばししようとするシユウに不自然な沈黙を返してきた。

そうして、マサキを淫紋の支配下から解放するという最大の目的に関しては、さしたる進展もないまま迎えた三日目。届けた文献や書物が消費されるのを見計らつたように、追加の文献と書物を届けに来たサフィーネは、よくはありませんわね、とシユウの報告に眉を潜めてみせた。

「シユウ様としては弱い刺激に慣らして、強い刺激からあの坊やを遠ざけようとしたのでしょう。それが与え過ぎない為にあるのは承知していますけれども、喉が渴いている人間に対して塩を与えたところで、喉の渴きが満たされるどころか余計に渴きが増すだけですわ。それでしたらまだ本人に自分で処理をさせた方が、マシだと私は思いますけれども」

「しかしその結果が、私に対する当て擦りになるのではどうしようもない。あなたは私にマサキとの気まぐれ時間を耐えろと云うのですか、サフィーネ」

「私はシユウ様が坊やに手を出したことを責めているわけではありません。加えて、シユウ様が私の案を面白く感じていないのも承知しています。それでも、そうした不都合が

生じているのであれば、身元の保証は出来るのです。私に全てをお任せ頂けた方が」

サファイーネ、とシユウはその名を呼ぶことで彼女の言葉を遮った。サファイーネはその声のトーンでシユウの云いたいことを悟ったようだ。しかし、と言葉を次いだサファイーネに、

「まだ時期尚早に過ぎるでしょう。最後の切り札は最後まで残しておくに越したことはない。それともあなたは、自分が選書したこれらの文献や書物に自信がないとでも？」

「手強い呪いであることはシユウ様もご承知くださっていると思うていましたものですから」

「それでしたら、むしろ私こそあなたに訊きたいですね、サファイーネ。あなたはそれでマサキを元に戻せると思ってるのですか」

彼はと理由を付けて阻んではいるものの、結局の所、シユウはマサキを他人の手に委ねるのが嫌なのだ。それが今のマサキにとって必要な行為であるとはいえ、見知らぬ——或いは見知った好色な貴族たちに暇潰しの玩具として風の魔装機神の操者を与える。どうしてそれをシユウが許せたものか。

巨視的に物を眺めては冷徹に判断を下すことこそ、理性の最大の働きであると信じて止まないシユウにとって、サ

ファイーネが繰り返し勧めてくる「最後の手段」は、存分にマサキの精神の安定を果たすだろうと、シユウ自身に感じさせるものであった。

それでも、シユウは嫌なのだ。

単純にただただ嫌なのだ。

マサキに対して自らが持つ拗れた感情や、自らの手で事態に收拾を付けたいと望む魔術師としての自尊心が、安直な手段に頼ることを良しと出来ない。先にシユウが危惧したように、マサキ自身の立場の問題もある。正常な判断力を取り戻した彼は、その時に、自らが抱えなければならなくなってしまった過去に何をどう思うことだろう？ そうした様々な感情的な問題に、サファイーネは機微を發揮できない女狐ではないだろう。

自らの感情と理性は切り分けられるべきである。それが様々に目まぐるしく移り変わる世の情勢に飲み込まれずに済む最大の方策だ。

だからこそとシユウがサファイーネの姿勢を咎めてみれば、彼女は取り繕うように、「ですからこうして必要なものをお届けに上がっているのですわ」と悪びれずに云つてのけた。

口先で誤魔化し合うのはお互い様だ。彼女は彼女でシユウの振る舞いを面白くなく感じているに違いない。自らが



想いを寄せる主人が、恋敵でもある異性に性的な意味で手を出している。それを素直にしおらしく嘆くこともせず、口撃に変えてしまう辺りは流石の二つ名持ち。彼女の自尊心<sup>プライド</sup>の高さはシユウにも張るほどに高い。

いずれにせよ、女という生き物は面倒臭い生き物である。数えるのも面倒になるまでに口を衝いて出てしまう溜息。今またそれをひっそりとサファイーネに気取られぬように吐き出したシユウは、それでしたら——とサファイーネの耳元に口を寄せた。彼女がシユウにとつて必要な物を用意していると嘯く<sup>うつく</sup>のであれば、シユウは彼女に自らが必要としている物を用意させるまで……案の定、シユウの頼みを耳にしたサファイーネは目を睜<sup>みは</sup>つてみせた。しかし、シユウ様。咎めるというより迷惑<sup>めいわく</sup>っている。あからさまなサファイーネの態度の変容に、冷徹にも感じられる彼女の判断力の高さは、けれども人情に飲み込まれてしまうものであるのだ。シユウはそう感じずにいられたかった。

「あなたが必要だと思う全ての道具を用意してください。結構。こういった道具を用意するかはあなたに任せますよ、サファイーネ」

重ねてそう告げると、主人の考えを察知したのやも知れない。畏まりました。僅かに俯いて何事か考えていたサファイーネは、面を上げる頃には妖艶な微笑みを浮かべていた。

「それがシユウ様のお出しになったご結論であるというのであれば、私は従うまでにございますわね。明日までには、ご希望の品を揃えて用意してみせましょう。ですけれども、あまり無体は働きませんよう」

<sup>サディスティック</sup> 嗜虐的であり、<sup>マゾヒスティック</sup> 被虐的でもある彼女は、シユウの頼みを的確に聞き入れてみせるだろう。

きつと彼女は嗜虐的な嗜好を持つ主人の本質を見抜いているに違いない。でなければこうも愉し気に笑えたものか。シユウは彼女に対する期待を込めて、サファイーネをまざまざと見遣った。アイコンタクト。その意味するところは彼女に伝わったようだ。彼女は手の甲を口元に押し当ててふふと笑うと、身のこなしもしなやかに。では、失礼します。甘<sup>バフューム</sup>ったるい香水の匂い香る風を残して去って行った。

それからかなりの時間が過ぎたようにも感じられた頃。か過ぎない時間が過ぎたようにも感じられた頃。

シユウが手にしていた書物の進み具合から察するに、それは恐らくサファイーネが去ってから三十分と経たぬ内の出来事だったようだ。リビングから寝室に続く扉が静かに開かれる。すっかり寝室の主と化してしまつたマサキは、日々、性交に明け暮れているからか。しどけなく感じられる姿を、その扉の向こうに晒して立っていた。

シユウが存分に食事を与えているにも関わらず、面やつ

れが進んだ顔。無理もない。生きる為の努力を最小限にして、残りの時間を性欲の解消に費やしているのだ。もつと食べさせて、可能な限り運動もさせなければ。シユウがそう考えた矢先。寝室から出てきたマサキは、無言のまま。シユウの前を通り過ぎて、玄関の方へと向かって行った。どうしたのです、マサキ。と、シユウが声を掛けてみて、反応が鈍い。

足を止めはしたものの、無言を貫いている。シユウは立ち上がると、マサキの肩に手を置いた。ゆつくりとシユウを振り仰いだマサキの額の下に覗いている黒々とした眼。定期的な解呪の甲斐もあつてか。あれから紅い瞳がマサキを支配することはなかったものの、その目はまるで闇を孕んだ洞のように虚ろで、それを目の当たりにしたシユウは、マサキに異変が生じているらしいことを悟らずにいられなかった。

「——どうせ、お前は」

ようやく聞けたマサキの声は、行為の都度、さんざ甲高く喘がされ続けているからか。風邪の引き始めのようにがさついていた。その声が、自暴自棄を起こしているようにも聞こえる調子で吐き捨てる。

「……俺を抱く気はないんだろ」

そうしてシユウの手を振りほどいたマサキは、今度こそ。

一直線に玄関に向かってゆく。

それをドアノブに手がかかる寸前で腕を掴んで阻止したシユウは、出て行つてどうするつもりですと、マサキに尋ねた。

沈黙が返る。どうやら深い考えがあつてしようとしていることではなさそう。昨晩の不自然な沈黙や、今の直前の台詞からして、マサキは自らを決定的に抱く気のないシユウに対して、かなりの不満を抱いているようだ。それが理由で外に出て行こうとするのであれば、シユウに考えられる可能性はひとつぐらいはななく。

マサキ、と、シユウはその名を呼び、発言を促す。

「云つて貰えなければわからないでしょう。出て行つてどうするつもりです」

サファイアーネのところに。消え入りそうなまでの小声で云つたマサキの身体が小刻みに震えている。

やはり。と、シユウは思った。マサキは見知らぬ男たちに、自らの欲望の解消を求めようとしている——身体が震えているのは欲望の解消がままならないことからくる禁断症状の所為なのか、それとも見知らぬ男たちに身体を預ける恐怖からくるものであるのか。シユウの脳裏に、無数のヴォルクスの触手が絡み付いたマサキの身体が思い起こされた。快樂に身を委ね切った姿。マサキは常人には決し

て経験できない時間を過ごしてしまっている。揺るぎのない事实は、今更ながらにシユウの心に暗い影を落とした。

性行為とは、恍惚であり、悦楽であり、最も単純な快楽でもある。

ヴォルクルスとの性交の記憶。きつと幾度も追体験しているに違いないその記憶は、マサキをありきたりな性行為では満足を得られない身体へと変えてしまった。だからこそ、より強い刺激を、より激しい快楽を。もうひとつの人格が有している衝動のままに、マサキは突き動かされては発作的にでも求めずにいられなくなるのだ。

欲望に支配されきつた今のマサキの頭の中には、魔装機神の操者であるという誇りや矜持など存在していない。恥も外聞もないもののように振舞うマサキに、シユウは眉を潜ませずにいられなかった。

彼の下腹部に刻まれた淫紋。子宮を象つた不気味な紋様<sup>ゴロテス</sup>は、こうしてマサキが本来守らなければならない自尊心<sup>プライド</sup>を、一足飛びに捨てさせてゆくのだろう。

シユウはマサキの腕を力任せに引いた。

シユウに向かって身体を開いたマサキは、身体<sup>バランス</sup>の均衡を失って、背中を玄関扉に預ける形になった。何だよ。何も出来ないなら、俺のことは放っておけて……！ 語気荒

く言い放ったマサキの肩を玄関扉に押し付けながら、シユウはその口唇を塞いだ。他人<sup>シユウ</sup>の温もりに飢えていたのだろう。乾いた喉を潤すように、勢いを増して。反抗していた割には熱心に、マサキはシユウの口付けに応じてきた。

腹立たしい。

口唇を離れたシユウはマサキの身体を抱き上げた。なに……。途惑うマサキに問わず語らず。無言でシユウは彼を寝室に連れ戻した。放り投げるようにその身体をベッドに沈ませて、シユウは自らもまたベッドの上になると、マサキから手荒に衣服を剥ぎ取った。

けれども、そうした扱いさえも、今のマサキにとっては褒美にしかないのだ。

被虐心を煽られたらしいマサキの潤んだ瞳。シユウに向けられている表情は、これが世界の命運を賭けた戦いに漂々しく挑んでみせた勇者かと思うまでに、だらしなくも淫らなものだった。快楽を知ってしまった顔。淫紋の所為であると頭ではシユウとて理解している。理解しているからこそ、マサキの欲に塗れた姿<sup>まぶ</sup>が、教団の思い通りになっているようで癪に障って仕方がない。借りを返すべきは教団。わかっている、マサキの存在によって、この場に縛り付けられているシユウは、感じてしまった怒りの矛先を向ける先を他に持たずに。

手を出しなさい。

飾り帯で後ろ手に。マサキの腕を縛り上げたシユウは、その身体をベッドに転がした。こうされるのが好きなのでしょう。伏せたマサキの背中越しにそう囁きかけてやれば、そんなこと云つて、どうせお前は——素直にシユウの口付けやらに従つてみせた割には、まだ口先で反抗を続ける気力は残っているらしい。

「俺の気持ちなんてお構いなしだ。辛くて、苦しくて、切なくてどうしようもないのに、俺の望みを叶えてはくれない。だったらどうしたらいいんだよ。自分でするのだから限界で、お前に付き合つて貰うのも限界で」

「だからあなたの望みを叶えてあげますと云っているのですよ。腰をあげなさい、マサキ」

びくん、とマサキの身体が跳ねる。何を想像したの？ 尋ねながら腹部に差し入れた手で腰を持ち上げてやる。膝を付いたマサキが、云わなくてもわかるだろ。シートに頬を埋めて、シユウをまなじりに捕えながら、ぶつきらぼうに口にする。

「わかりませんよ、口にして貰わなければね。ほら、云つて。何を想像したの？」

耳朶を嘯みながら、菊座をそつと撫でる。指先に感じる収斂するひだの動き。呼吸をするかのように窄すぼんでは開く

を繰り返している。そこに少しでも指を埋めてやれば、丸二日ぶりの他人からの刺激に堪らなくなつたのだらう。焦れた様子でマサキが口を開く。

「お前の×××が入つて、くる、ところ……」

第一関節が埋まるか埋まらないかといった程度であるのに、早くも息を荒くしているマサキに、本当に——シユウは指を抜き、胸の痛みを押し殺すように嚙つた。神殿からマサキを助け出してから嵐のように過ぎた三日間。男とはかくも弱き生き物だ。目の前に差し出された餌を拒否することの出来ない。

シユウは自らの純情を自ら踏み躪にじつた。

こうして自分もまた、マサキと等しく浅ましい欲に溺れてゆくのだ。シユウは自らの男性器をマサキの双丘の合間に定めた。「どこでそういった言葉遣いを覚えてくるのでしょうかね、あなたは」そして、自ら放つた言葉が終わるか終わらないかといった内に、マサキの身体の中へと男性器を押し込んだ。

ずるりと、滑らかに。菊座に挿入はいり込んでゆく男性器が、根元まで埋まりきるよりも先に、どうやらマサキは射精オーガズムを迎えたようだった。あ、あ、ああ……っ！ つま先を突っ張らせて、叫び声にも近い声を上げては、小刻みに身体を震わせている。

二日間の飢えと渇きが、どうやらマサキの身体感覚を過剰に過敏にしてしまったようだ。あ、は、あ、やだ、やだ……マサキは自らが射精を終えてしまったことで、シユウが男性器を抜いてしまうと思ったのだろう。シートに埋めた頭をしきりと振りながら、やだと繰り返している。大丈夫ですよ。シユウはマサキの後ろ手に縛った腕を引いた。

びくん、とマサキの腰が今また跳ねる。

シユウの目の届かない所にあるマサキの男性器は、きつと熱も抜けきらぬままに、また硬さを増していこうとしていることだろう。この二日間のマサキの反応を思い返しなから、その身体を自分の方へと引き寄せたシユウは、深く繋がった腰を静かに動かし始めた。あ、あ。途切れがちな喘ぎ声がマサキの口元から零れる。

——して、して、もつと。シユウ、もつと。

求めていたものをようやく与えられただけあって、マサキの反応はシユウが想像していたよりもずつと情熱的だった。自らの身体の何処がどう感じるのか把握している様子で、腰を振ってはシユウの男性器を引き入れてくる。そこ、そこ。ああ、もつともつと奥に。甘ったるい声が、欲望に忠実に言葉を吐く。

それがヴォルクルスによって、或いは淫紋によって恵ま

れたものでなければ、シユウはこうして自らを欺くようにして、マサキとの性交に及ぶことなどなかっただろうに。消せない怒りと浅ましき。自らの胸に渦巻いている感情を、シユウは何の罪も咎もないマサキにぶつけてしまっている。それも欲望の解消という最悪の手段で。それでも、シユウは自らの愚かさを悟りながらも、今この瞬間のマサキを手放すことなど出来ないのだ。

——ご褒美ですからね。ゆつくりと可愛がつてあげますよ、ゆつくりとね。

シユウはそう云って、その言葉の通りに、午前中いつぱいの時間をかけて、自由を奪ったマサキの身体を蹂躪した。

——ああ、ああ、はあ……つ、もつと……

籠<sup>なご</sup>が外れたように乱れよがるマサキの求めに応じ存<sup>ながら</sup>たシユウは、やがて手にしている身体がまともな反応を返さなくなっても行為を止めることをせず。マサキが意識を失うまで、その身体を責め立て続けた。

※ ※ ※

ガウン一枚の寝汚い姿で玄関にてサフィーネを迎え入れたシユウに、彼女は大いに不信を感じたようだった。シユウの所望した品が山と詰め込まれているだろう旅行用バッ

グをリビングに運び込みながら、何かあったのですか？  
彼女はちらと閉ざされている寝室の扉を一瞥して、シユウ  
に昨日からここまでの経緯を尋ねる言葉を吐いた。

午前中いっぱいを性行為に費やしただけあって、マサキ  
は十分な満足を感じた様子だった。求めていたものを得ら  
れたことで、一時的にせよ衝動が収まって安心出来たのだら  
う。午後は夜を迎えるまで深い眠りに就き、食欲も旺盛  
に夕食を済ませていた。焦燥感に駆られるように行為をせ  
がむこともなく、ゆつくりとバスに浸かったマサキは、ひ  
とときの安らぎを得てそのまま眠りに就くかと思いきや、  
夜も更けた頃になって、またぞろ心の奥から這い出し始め  
たらしい欲望の解消を求めてシユウに縋り付いてきた。

一度だけ、と、時間をかけて愛撫を施した後にマサキを  
抱いたシユウが、その精を吐き出した後に男性器を抜こう  
とすれば、それを嫌がって声を上げる。仮眠程度の睡眠し  
か得ていない上に、既に相当数マサキを抱いた後だけあつ  
て、疲労が蓄積している身体。今日はここまでですよ。そ  
う云つても聞かないマサキに、シユウはマサキと繋がった  
まま、ベッドで眠りに就くこととした。

夜中に一度、眠りに落ちていたマサキから離れて解呪を  
済ませたシユウは、場所をソファに変えるのも面倒と、再  
びベッドで眠りに就いた。眠りを妨げられたのは朝も早く。

下半身に違和感を感じたシユウが目を覚ますと、腰の上に  
乗り上がったマサキが、シユウの男性器を腹の中に収めて、  
よがり声を上げながら腰を振っているところだった……。――。

自らに想いを懸けている女性に聞かせる話ではないとは思  
いつつも、察しの良い彼女のこと。どうせみなまで云わ  
ずとも察してしまっているに違いない。シユウは触りだけ  
話して聞かせることにした。案の定というか、彼女はシユ  
ウの話に快い感情を抱かなかつたようだ。そうですか。と、  
思い悩む様子で呟くように言葉を吐いた彼女に、シユウは  
だからこそ――と、サファイネが用意してきた道具ドイムの重要  
性を説いた。

「ところであなたに頼んだ調査の方はどうなっていますか、  
サファイネ。先にも話をした通り、マサキの廃人化を防ぐ  
為にしていることなのですから、他に方法があるのだとす  
ればそれに越したことはありません。あなたのことですか  
ら、そろそろ一定の成果をみせてくれるかと思っていたの  
ですが」

「今の所は、これまで以上の情報はありませんわね。ただ、  
道楽貴族との繋パイプがりは得ました。面白い物を見せて頂けると  
お約束頂いております。その結果によつては新たな情報  
が入手出来るかと」

不承不承ながらもシユウの台詞に正当性を見出したらし

い。サファイーネはシユウの進捗を尋ねる言葉にそう応じてみせた。

成果のない膠着した状況に置かれているシユウからすれば、それはまさに吉報だった。日長、文献や書物と向き合えばかりな上に、その合間にはマサキの相手をしなければならぬ。陰に籠った人間である所のシユウは、読書や研究に耽溺することに退屈を感じる人間ではなかったものの、それ以外で時間を占めている行為がマサキとの性行為<sup>セックス</sup>では、幾らそれがシユウの選択した道であつても思う所は出るものだ。

そこで、もう少し詳しく話を聞いてみる必要があると、サファイーネから掘り下げて話を聞いてみれば、思いがけない人物の名前が飛び出したものだから、世の中とは皮肉に満ちている。長く緋のカーテンの向こう側で、王族に直接仕えていた一族の総領。シユウも見知っている彼は、貴族社会では謹厳実直で通っている。よもや彼がそういった嗜好を持つていようとは。シユウは顔を歪めかけて、自らも他人のことは云えないと表情を正した。そして、深く考えるのを避けるように、サファイーネの働きに思いを馳せた。

そうした高位の身に先んじている彼が、どうやら性奴隷を複数所有しているらしい。サファイーネはその中に、希少な淫紋の刻まれた性奴隷が存在しているとの情報を得

たようだ。貴族社会にも情報網<sup>ネットワーク</sup>を構築している彼女からすれば、相手が普通の貴族であれば、接触<sup>コンタクト</sup>を取るのも容易なことだっただろう。しかし流石に王宮仕えの貴族。相手の位の高さ故に、さしものサファイーネであつても、その接触には四日を要したのだという。

文献や書物の手配や入手から、情報収集。シユウの突然の要望にもきちんと応えてみせるサファイーネに、礼のひつても述べるべきだろう。そう思ったシユウは、有難う、サファイーネ。と言葉を吐いた。しかしその言葉を聞いて尚、サファイーネの表情は浮かないままだった。

シユウ様、と、ややあつて声を上げた彼女は口籠りながら、恐らくは彼女の胸の内を一番占めているだろう悩みを口にした。

「本当にシユウ様はあの坊やの廃人化を防ぐ為だけに、行為に及んだと仰るのですか」

「他に理由があるのでしょうか」

シユウは即座にサファイーネに切り替えていた。

嘘をそれと知らせずに言葉を吐いてしまうのは、王宮での処世術。シユウとてサファイーネに対して明瞭<sup>はつきり</sup>りと自らの感情を伝えないことが狡さであることは自覚している。けれども長年の習性だ。自らの感情を誰かに悟られることを良しと出来ない。

それがとてつもない弱みとなる世界でシユウは生きてきたのだ。

王宮で、教団で、DCで——そこには明確な地位争いがあつた。誰が次期国王の座に就くのか。誰が教団に最も寄与する司祭となるのか。誰が総帥の右腕、或いは懐刀としての地位を得るのか。そうした戦いが日常的な世界に身を投じてしまった、或いは投じさせられてしまったシユウは、本心を明かさないことの重要性を誰よりも知っている。

それは味方であるサファイーネに対してさえも、同様だつた。

過去に縛られ続けているシユウを捕らえ続けている柵。例えるならば、それはマサキを捕らえていたあの無数の触手のように、手足から全身にまで絡み付いて雁字搦めにシユウの心を縛っている。

「あなたに品物の調達を頼んだのは何の為だと思っているのです。先にも話した通り、マサキに一定量の快感を与える為ですよ。私とてこうした状態が不自然なものであることぐらい承知しています。しないで済むのであれば、それに越したことはないでしょう」

「いえ……それでしたら結構です」

言葉を重ねれば重ねただけ、空虚さを増してゆく。だからこそ、なのかも知れない。

呼吸をするように容易く嘘を吐いてしまうシユウに、サファイーネは納得するしかないと悟ったようだった。次回は吉報をお持ち出来るよう努めます。表情を引き締めるとそう云つて、音もなく静かに、シユウの許から去つて行つた。



#### 4. 蕩けてゆく身体、溶けてゆく心

マサキが性欲の解消も含めてシユウに頼りきりになってしまっているのは、醜態を見られたのがシユウであつたのもあつたし、シユウであればそうしたことも含めて誰にも云わずに済ませてくれると思つたからでもあつた。それでも、性欲が解消されて、猛り狂つた心が落ち着きを取り戻すと、やるせないまでの失意に襲われたものだった。

今朝方もそうだった。

平時であつたならば、そのシチュエーションだけでもマサキにとつては屈辱的なものであつただろうし、ましてや性行為に及ぶなど、脳裏に掠めることすらしなかつたことだろう。だというのに、マサキには無防備にベッドの隣で眠っているシユウの姿に、悩ましいまでの色気を感じてしまった。

性欲を解消する為の餌。シユウとの性行為に踏み切つてしまったマサキは、覚えてしまったその味に、心も身体も踊らされてしまつていた。

淫紋の力——或いは、それによつて生み出されたもうひとりの人格。マサキの中にあるそれは、浅ましいことに、シユウをヴォルクスの代わりと認識したようであつた。

無理もない。あの赤黒い触手にマサキを幾度も貫いたヴォルクスの男性器。もうひとりのマサキは、そこから生み出される刺激の数々を常に求めている。あれが欲しい。あれが欲しい。あれが欲しい。ひととき治まってはまた昂つてゆく心は、ついには理性を失つて、欲望の解消しか求めなくなつてしまった。だからマサキは、我を忘れた。忘れて、シユウの身体の身体の上に乗り上がった。

与えられた快感が、知つてしまつた快感が、マサキの自我を奪つていった。マサキはシユウの男性器を、ヴォルクスとの性行為でそうしたように口に含んだ。含んでは舐め、舐めては含み、その昂ぶりが硬さを増してゆくのをじつくりと口腔内で味わつてから、腹の中に収めて腰を振つた。やがて目を覚ましたシユウは驚いたようだった。当たり前だ。起きるなり目に飛び込んできたのが、牝の真つ最中である筈のマサキが、既に幾度かの性行為を済ませた後とはいえ、同意も得ずに自らの上で腰を振っている姿だ。それでも彼は冷静だった。マサキが同じ立場に立たされていたらならば、問答無用で相手を突き飛ばして、ベッドから引きずり降ろしていただろう。

——眠っている人の上で勝手に腰を振るとは、あなたは牝の意味を理解していないようですね。

そうは云いつつも、自らではどうにもままたない欲望。

性欲に踊らされるしかないマサキの窮状を理解しているシュウは、その欲望の解消に、律儀にもサファイーネが訪れる直前まで付き合ってくれたものだ。ほら、啼きなさい。そう云った彼は丹念にマサキを責めた。両の腕を掴んでは下から突き上げ、膝を折っては上から挟る。瞳が涙に濡れるほどの恍惚。シュウの脚の間にある熱を帯びた肉の塊は、マサキを極限まで悦ばせてくれた。

それが証拠に、出るものが無くなつて透明な汁を吐き出すだけとなつたマサキの男性器は、それでも終わらぬ責め苦に硬く反り返つたものだつたし、幾度となく絶頂を迎えた身体は、射精を伴わずとも絶頂を感じられるまでに過敏になつていたものだつた。もつと、もつと。間隔を短くして襲いかかってくる絶頂に、啼いて、求めて、そして新たな快楽に従属する。その事実を後から振り返れば振り返つただけ、マサキの気持ちは沈んでゆく。

—— 酷い姿で他人の前に立たせてしまった。

絶え間なく襲い来る絶頂に我を忘れてよがつたマサキは、シュウの白い肌を幾度も口唇で食んだ。歯を立てなかつたのは、欠片ほどの理性がまだ残つていたからなのかも知れない。そうして、マサキによって、赤い印を数えきれないほどに肌に刻まれたシュウは、その裸体の上からガウン一枚を羽織つただけの姿で寝室を後にした。

それを目にしたサファイーネの胸中如何ばかりか。

彼女は自らの性的嗜好をおおつぱらに晒して生きているような淫蕩な性質であつたけれども、シュウに対しては、乙女か淑女かといった態度で接してみせたものだ。それは彼女がシュウに好意を寄せているからに他ならない。やはりサファイーネがシュウに提案していたように、身元の確りとした悪趣味な物好きたちに、この身体の扱いを任せた方がいいのではないだろうか。マサキは強くそう思った。淫紋の謎を解くことから身の回りの世話、そして性欲の解消まで、このままマサキの全てをシュウひとりに任せきりにしてしまつていい筈がない。如何に常人離れた能力を持つあの男にとて、体力に限りがない筈もなく。

ベッドの中でまんじりともしない時間を過ごしたマサキは、けれども自分の心が均衡を崩してしまつた時に、シュウを目にしてしまつただけで襲ってくる強烈な欲望を、どう押さえ込んで目的地にまでひとりで辿り着けばいいかわからなかつたからこそ、ドア一枚隔てた向こう側にいるサファイーネに、今ならそれを伝えられるだろうかと、立ち上がつてドアノブに手をかけた。マサキの自尊心や、魔装機操者としての立場。それをどう守るかにまで考えを及ぼせているシュウは反対するだろう。それでも、覚悟を決めて、マサキが扉を開けようとした瞬間。シュウとサファイーネふ

たりの会話の内容が耳に入ってくる。

——あなたに品物の調達を頼んだのは何の為だと思ってるのです。先にも話した通り、マサキに一定量の快感を与える為ですよ。私とてこうした状態が不自然なものであることぐらい承知しています。しないで済むのであれば、それに越したことはないでしょう。

シウはシウで、現状を不自然なものであると認識しているのだ。その上でマサキの性欲の解消に役立つだろう何かを入手したらしい。それならば——。マサキは思った。シウに頼りきりになっている現状に変わりはないかったものの、彼の手を煩わせる機会が減るのであれば、今暫くはここに身を置いていてもいいのではないだろうか？ マサキは怖かったのだ。身元の保証が出来るとはいえ、見知らぬ男たちに身を任せて性欲を解消する。それがマサキに及ぼすだろう影響と変革。マサキはここに來てからずっと、変わっていく自分とかつての自分との違いを認識させられ続けている。

生身の人間であるシウとの性行為は、マサキの中にあつた何かを変えてしまった。それは番になるのは男女であるという常識の塗り替えであつたかも知れなかったし、自らの中に存在している被虐を求める意識の発見であつたかも知れなかった。

ひとつひとつ失われてゆく自らの自我同一性<sup>アイデンティティ</sup>。マサキにとつては好ましい変化を及ぼしてばかりではなかった行為の範囲を、もし見知らぬ男たちにまで広げてしまったら？ それはマサキに戻れない道を歩ませる結果になりはしないだろうか。

マサキはベッドに戻つた。

期待と不安。快楽を与えられることを匂わされただけでも、心が躍ってしまうようになってしまったマサキは、今しがた耳にしてしまった会話にすら感情を煽られてしまつていた。あれが欲しい。あれが欲しい。あれが欲しい。身体の下で誰かが叫び出す。もつと強い刺激を。もつと激しい快楽を。いずれ自分はまた、それしか考えられなくなつてゆくのだろう。マサキはブランケットに包まつた。既に一週間もこうした状態が続けている。

快楽の虜、とは良く云つたものだ。

けれどもマサキが取り憑かれているのは、そんな生半かなものではない。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。耳の奥に響いてくるあの呪文。六人のフードを被つた邪神教徒に唱えられた呪文は、今でもマサキの中に残り続けている。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。下腹部が熱い。そこにあるのは子宮を象つた紋様<sup>かたち</sup>。呪文に共鳴するように熱を帯びる淫

紋は、マサキの身体を自らの存在意義のあるがままに操つてゆく。

—— 嗚呼、シユウ。シユウ……。

助けを求めるようにその名を呼ぶ。

既にマサキの勝手が原因で、幾度かの性行為を済ませてしまっている。きつと、行為の質でマサキの欲望をコントロールしようとしている彼のことだ。今日はこの先、挿入に至ることはないだろう。それがどうしようもなく、マサキには辛いことに感じられた。

—— コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ……

ああ、嫌だ。俺の身体を元に戻してくれ。マサキはブランケットを強く握りしめた。コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。ああ、欲しい。あれが欲しい。治まった感情が再び猛り狂う。コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。ああ、シユウ。俺にあれをくれ。お前の×××を——……

そうしてマサキの意識が正気と狂気の間で拮抗を始めた矢先。リビングに続く扉が開き、大ぶりの旅行用バッグを手にしたシユウが姿を現わした。

※ ※ ※

三十分ほどの遅れはマサキの瞳に変化を与えていた。やはり——、とシユウはベッドの中で瞳を紅くしているマサキが、今まさに自らの身体を弄ぶべく股間へと手を伸ばしているのを目に止めると、高速詠唱で周囲に魔方陣を展開した。先ずは解呪からだ。アドベニット・テンプス・リベラテオニス。サクリファイ・チュム・エクサイテ。呪文を唱えるとその顔が苦悶に歪む。

—— 嫌だ、いやだ、イヤダ……

何度目にしても、哀れで痛ましい姿だ。ベッドの上で右に左に。手足をばたつかせながら身体を振じらせて暴れるマサキの姿。ヴォルクルスサマ！ ヴォルクルスサマ！ 禍々しき神に縋る言葉を口にしては、シユウの呪文に抵抗を続けている。いつ正気に戻れるかもわからないマサキに解呪を施してやりながら、それでもこの日々が、いずれの結果を迎えるにせよ、終わる日が来ることをシユウは肌で感じ始めていた。

ようやく有益な情報に迫り着ける気配をみせたサファイネ。

反対に、自制する意識が弱まりつつあるマサキ。

もし、このまま自分やサファイネの調査が上手くいかず、マサキが自らを失うようなことがあれば、その時には。シユ

ウは徐々に瞳の色を元に戻しているマサキを凝視めながら、あなたひとりでは逝かせませんよ。心の中で静かに覚悟を呟いた。

きつとその日を迎えたサファイーネたちは、シユウがそこまで思い詰めていたのかと後悔をすることだろう。けれども、元はと云えば、教団の能力を甘く見積もっていたシユウの所為なのだ。手足をもがれても歩みを止めることのない邪神信教。教導派が穏健派といえども、彼らとて破壊神信仰に身を落とした者たちだ。一筋縄ではいかない者たちを、穏健派だからといって、シユウは何処かで軽んじてはいなかっただろうか。アンテナを広く張っていれば防げた事態。もっと早く教導派の動きに気付けていれば、マサキが教団の手に落ちることもなかったし、淫紋に支配されることもなかった。

（——世界における私たちの代わりは幾らでもいる。けれども、私にとつてのあなたの代わりは何処にもいない）

その最悪の結末を避ける為にも、目の前の大事に細かく対処をしていかなければ。サファイーネから有益な情報が齎されるまで、まだまだ時間がかかりそう。マサキの廃人化を先延ばしにする方策を、その程度を、シユウは自ら探り出していかなければならない。

どう快樂を与えてやるのがマサキにとって一番有益であ

るのか。サファイーネが去り、今更に今朝方の出来事を振り返ったシユウは、自制する力を失ってしまったかのようなマサキの行動力に、彼の湧き出るような鋼の精神力が、既に尽きようとしているのではないかと予見せずにいらなかった。

——アドベニット・テンプス・リベラティオニス。サクリファイ・チュム・エクサイテ。

繰り返し、繰り返し。解呪を施しても、現状維持にしかないマサキの身体と精神。むしろ今再びその紅い瞳を目の当たりにすることになったのは、それは確かにシユウの対処が遅くなった所為でもあったけれども、快感を与えられ続けた結果、マサキの状態が悪化する方向に向かっていくからでもあるのではないだろうか。

それがシユウには恐ろしい。

ふつとマサキの瞳から色が抜け落ち、強張った四肢から力が抜ける。——…悪い。馴染んだ黒々とした瞳がぼんやりと宙を仰ぎながら、そう言葉を吐く。落ち着きましたか。特に問題がなければ、シユウとしては持ち込んだ荷物の「使い方」だけマサキに教えることとして、書物を総当たりする作業に戻りたいところだ。

限られた時間を、全てマサキの為に使っているシユウは、決してその日々に飽きを感じている訳ではなかったけれど

も、自らが為さねばならないことの優先順位を乱してしまっていることには思う所がある。そもそも、短期決着を求められる事態である以上、寄り道をしている余裕などない筈だ。それなのに。シユウは自らのタスクを見直した。必要なタスクを優先順位に従って確認する。先ずは定期的なマサキへの解呪、そして根本的な解呪の方法を見付ける為の研究。マサキの欲望を解消してやるのは、その後。必要に迫られた時だけいい。そこまで考えて、シユウは自らの我欲<sup>エゴ</sup>の強さに、乾いた笑いを洩らさずにはいらなかった。マサキを他人の手に委ねればいいだけの話を、自分が許せないというだけで、堰<sup>せ</sup>き止めてしまっている。それも適当な理由を論<sup>あげ</sup>つて。これ以上の欺瞞<sup>あざわら</sup>がどこに存在しているだろうか。こうしている間にも、マサキの精神の死が迫っているというのに。

——その……荷物は……？

大分、精神が落ち着いたのだろう。シユウを見遣ったマサキは、その手にある旅行用バッグの中身が気になるようだ。そう尋ねられて、はたとシユウは我を取り戻す。

きつと彼はサファイネとの会話を聞いていたに違いない。そうして、バッグに収められているものが、自分にとって必要な物であると把握したに違いない。マサキに中身の見当が付いているかまではシユウにはわかりかねたものの、

細かく説明をしてやる手間が省けるのは有難い。しかしその前に——、シユウは疲労がありありと窺えるマサキの様子に、ようやくと云うべきか。朝食もまだであったことに気が付いた。

何事かに専念し出すと、途端に日常生活の全てがおろそかになるシユウは、寝食も不規則になりがちになれば、着替えも入浴も失念してしまう。凡そ人間らしさを失った生活。それにマサキまでをも付き合わせる訳にはいかない。普段通りならいざ知らず、今のマサキはそうした自分の状況さえも適切に把握出来ないのだ。ここに来てから空腹を訴えてきたことが一度もないマサキに、マサキの日常生活の管理もきちんとやらなければ。シユウは改めて、自らのタスクスケジュールにそれを組み込んだ。そうして、凝<sup>じ</sup>つと。シユウが手にしている旅行用のバッグに視線を注ぎ続けているマサキにこう云った。

「先ずは食事にしましょう。この荷物の中身については、それからですよ、マサキ」

そうしてマサキを寝室から引つ張り出したシユウは、彼の気分転換も兼ねて、食事の支度を手伝わせることとした。淫紋の影響もあつて、寝室に籠りきりになりがちなマサキに、空いた時間でトレーニングをしてはどうかと勧めながら、あれこれと指示を出しつつ食事の支度を進める。野

菜を洗つて剥かせ、バターをレンジで溶かさせ、玉子を割つて掻き混ぜさせる……オムレツにハムステーキ、サラダ。残り野菜を一緒くたに煮込んだスープ。完成した料理をテーブルに並べ、めいめいにテーブルに着く。

そうしてふたりで作った朝食と昼食を兼ねた食事をそれぞれ終える頃には、またそろままならない欲望に晒され始めたようだ。シユウの手を借りてリビングでトレーニングに取りかかろうとしたマサキは、気力と根性が続かなくなつたのだろう。五分もしない内に寝室に戻ると云い出した。本音としてはトレーニングを続けさせたくもあつたシユウだったが、大分軽くなつた身体だ。無理を重ねて倒れられてしまつては元も子もない。先ずは体重を戻す方が先と、シユウはマサキの願いを聞き入れることにした。

ベッドに戻つたマサキは、荷物の中身は？ と、早速とばかりにシユウに尋ねてきた。

サファイーネが去つた直後に、シユウはバッグの中身の確認を済ませていた。必要だと思ふものをという頼みに対するサファイーネの「答え」を目にしたシユウは、彼女の美的感覚に些かの疑問を覚えもしたが、同時に、概ね要望に沿つた品が揃っていることに安堵をしたものだった。変に節制はされては、マサキの欲望の解消に不都合が生じかねないのだ。その点、日常におけるサファイーネの明け透けな態度は

役に立つたと云えるだろう。彼女は他人の前では口を慎まないほどに品の悪い女性ではあつたが、そうであつたからこそ、シユウの頼みに対して余計な気遣いを発揮することがない。だからこそシユウは彼女を頼つたのだ。

シユウはバッグの口を開いた。

少しづつですよ。そう前置きしてから、シユウはマサキにズボンを脱いで足を開くように云つた。そのひと言でマサキはバッグの中身が何であるかを悟つたのやも知れない。それでも、まだ理性を残している状態だからか。ひと思いにズボンを脱ぐのは躊躇われるようだ。彼は朝からシユウの腰の上に乗つて腰を振つていた人間と同一人物とは思えない様子で、顔を真っ赤に染めると、それでも欲望には打ち勝てなかつたのだろう。おずおずとズボンを脱ぎ、膝を内側に向けながら脚を開いた。

「ちゃんと脚を開きなさい。開けないのなら、与えませんよ」

使わずに済むのであればそれに越したことはないのだ。

廃人化を防ぐ為には、適切な範囲の刺激を適切な範囲で与えてやる必要がある。つまり、与え過ぎても良くなければ、与えなさ過ぎても良くないのだ。シユウはマサキの様子でその判断を付けることとした。や……だ……。小さく言葉を洩らしたマサキが、先ほどまでの態度はどこへやら。

欲望に忠実な性は、このまま何もしないままに済ませるのを良しと出来なかつたようだ。恐らくはシユウの言葉を疑の一環と誤解したのではないだろうか。素直に脚を開いたマサキに、そういうつもりではなかつたのだが、とシユウは苦笑しつつも、口にしてしまった言葉は取り戻せない。次からはこうした場合の物言いを改めなければ。そう思いながら、シユウは次いでマサキに膝を立てるよう求めた。

今度のマサキは銜くはいをみせる様子もなく、即座に膝を立てた。彼の動きひとつで形を変えて波を描くシートが、シユウの目には例えようもなく淫靡なものに映る。愚かしい。そういった自らの感性に無常感を覚えながらも、自然と湧き上がってくる興奮を抑えきれない。

一度知ってしまった蜜の味とは、中毒を起こすほどに甘いものなのだ。シユウは恋しい相手の身体を手に入れてしまったことで、自らもまたマサキと同じように変化を起こしているのだと知った。

「これが何かわかりますか、マサキ」

だからといったのべつまくなしマサキに手を出す訳にもいかない。シユウはバッグから取り出した道具アイズをマサキに見せてやつた。道具は道具でもアイテムというよりは、グッズと呼んだ方が相応しい玩具おもちゃのひとつ。

隆起と沈降を繰り返しながら曲面を描いている玩具グッズを、

マサキはパイレーターと思ったようだった。どうやら戦いに関わる以外の知識は、ラ・ギアスに召喚された時よりほぼ止まってしまっていてしまっているようだ。きつとマサキはそうした知識を得る機会に恵まれないままに、年齢を重ねていったのだろう。それだけマサキは、ラングランの都合に振り回されてきた。共に戦場を駆ける機会に恵まれたこともあるシユウは、戦神とも呼ばれるマサキの活躍を目の当たりにすることも多かつたからこそ、彼の年齢に見合わない知識の欠乏具合を目の当たりにして、寂寥感を覚えずにいられなかつた。

性に興味なく過ごした少年時代でもなかつただろうに。

そこには性的な意味で叶えたかつた願いもあつただろう。それは少年に良くありがちな、年上の女性への憧憬であつたかも知れなかつたし、年下の童女への愛寵であつたかも知れなかつた。それを叶える暇もなく戦い明け暮れたマサキ。くだらない宗教のくだらない陰謀に巻き込まれることがなければ、そうした願いが叶うことも、そう遠くない未来にあつたことだろうに。シユウは今更に、安易にマサキの身体を弄もんでしまった己の浅ましさを悔いた。

——エネマグラですよ。

こうした玩具おもちゃをマサキに与えること自体、受け取りようによつては、シユウがマサキを弄もんでるように映ることだ



ろう。かといって、全く何も与えなければ、淫紋に支配されているマサキのことだ。直ぐに自我を失ってしまうに違いない。

誇りと命を天秤にかけさせられているマサキ。決して教導派が意図していなかっただろう状況は、彼らの陰謀が、ある意味で最大の効果を發揮していることを示していた。（——今のこの状況を、教団にだけは悟られないようにしなければ……）

この好条件が揃った状況を、世の混沌を目論む彼らが逃す筈がないのだ。今のマサキには使い道がある。生贄、或いは儀式の担い手として、これ以上の資質がどこにあったものか。淫紋の力が強まれば、進んでその身をヴォルクルスに捧げてしまおうとするマサキ。表と裏、もうひとりの人格がマサキの身体を支配しければ、シユウであつてもマサキを制御するのは至難の業だ。

幸いなのは、教導派が教団において主流派ではないことだ。穏健派の彼らは、数多くの陰謀の実行部隊を担っている他の派閥からは、所詮教化主義の連中と一段低く見られていた。彼らの地道な布教活動がどれだけの数の信者を獲得したのか。それは安易な破壊活動よりも、遥かに多くの人間を破壊神信仰に転向させたものだ。

しかしだからこそ、教団の主流派閥である過激派とは、

必要最小限の事務的な付き合い以外の接触を持たない。

恐らく教導派は今回の件を自分たちだけの有益な切り札ジョーカーとして、情報を握り続けることだろう。それは彼ら教導派が存在し続ける限り、マサキが狙われ続けるということでもある。とはいえ、マサキとて魔装機神の操者。平時であれば教団が差し向けてくる実行部隊などさしたる相手でもない。早急に、淫紋の力より彼を解放しなければ。シユウはマサキは見遣った。

エネマグラ、と、シユウの口にした玩具おもちゃの名称を、マサキが鸚鵡返しに呟く。そろそろ欲に飲み込まれつつあるのだろう。瞳を潤ませ始めているマサキの足首をシユウは掴んだ。必要があつてしていること。そう自らに云い聞かせながら、曲面の連なりの先端をマサキの菊座へと押し当ててた。

「上手く嵌まれば、動いても抜けません。人間工学に基づいて設計されているデザインですので、感じ易い部分に刺激を与える形状をしています。後はあなたの動き次第。これはそういった玩具がんぐおもちゃですよ、マサキ。挿れますよ、ほら……」

ひく、と身体を揺らしたマサキの菊座に、吸い込まれるように収まってゆく玩具おもちゃ。サフィーネが選んだだけあつて、最大口径部分は相応に太くもあつたが、それをものともせずに飲み込んでゆく。多少の引つ掛かりこそあつたものの、

難なく全てを腹の中に収めたマサキは、太さがある分、早くも前立腺に刺激を感じているようだ。僅かに呻き声を上げる。

「エネマグラが抜け難くなっているのは、この状態で手を使わずに本体を動かす為ですよ。さあ、ゆっくりと息を吸って、吐いてみましょう。そう、ゆっくりと。腰を絞るように——……」

あ、とマサキの声が上がる。菊座アキラを使つた性行為に慣れてしまった身体は、直ぐにその使い方を把握したようだ。

あ、あ。収斂する菊座アキラがそれを物語っている。きつと目に映らないマサキの体内では、その腸内を刺激するように玩具おもちゃが蠢いていることだろう。あ、シユウ。シユウ。名前を呼んでは手を伸ばしてくるマサキの手をシユウは握つた。

口元を緩ませているマサキの快感に染まつた表情を、そうしてシユウは間近に眺めた。あ、イク。イク。あつ……知つてしまった快感は、どこまでマサキを欲望に忠実な僕しもべとしてゆくのだろう。玩具おもちゃひとつを与えただけでも、その刺激に夢中になる姿に、シユウは憐れみを禁じ得ない。蓮つ葉な瞳や、雄々しく結ばれた口唇。見慣れたマサキの表情が懐かしいと感じられるまでに、ここに来てからのマサキは欲に塗れた表情ばかりを晒している。

——やだ、イク。イク……っつ。

その表情が時に愛おしく感じられながらも、時に苦い後悔を蘇らせてしまうのも事実。教団との関りをシユウが持つていなかったとして、果たして彼らはマサキにまでその魔の手を伸ばしただろうか？ 決してシユウからして自らの意思で教団入りを果たした訳ではなかったけれども、そうした来歴を持つシユウが教団で強い権限を持ち得たのは、シユウが有している立場や才能が、教団にとって有益なものであったからだ。

確かにマサキには魔装機神の操者という強い立場がある。剣聖の名を継いだけであり、王家からの信任も厚い。仲間を引き入れられれば、教団にとつてもこれ以上となく有益な人材となるだろう。しかし彼が有しているのは、制御の利かない強大過ぎる力でもあるのだ。そう、それは例えるのであれば、ヴォルクルス同様の。

だからこそ教団はマサキを敵と見做していた。

教団内部に何が起こっているのか、その現状についてはサフィーネの調査を待たなければならないだろうが、穏健派である教導派が、過ぎたる力に手を付けるほどの事態であるのは間違いないらしい。そうした教団内部のいざこざを引き起こしたのは、他でもない。教団から抜けたシユウの存在であるのだ。教団内部の崩れた力関係パワーバランス。それがあるべき状態に戻るのには、相応の時間が必要となるだろう。

正常な状態であれば、決して好き好んで受け入れはしないだろう屈辱的な扱いに甘んじるだけでなく、自ら尻尾を振ってまでマサキが快樂にしがみ付いているのは、そうした教団内部いざこざの処理に力を欲した教導派が、運良く手に入れてしまった淫紋の力の所為である。シユウはその事実を、何度でも。自らが思い上がらない為に心に刻み付ける。

こうして自らの血脈が犯した罪と、永遠に。シユウは向き合い続けてゆくのだ。

健やかに育てる環境にあれば、どれだけ自らの人生は輝けるものであつただろう。それを取り戻したいとシユウ自身、思わないこともなかったけれども、自らの尊厳を奪った人間たちを、そのまま放置していられるほどに心弱生き物でもない。

——あなたが世界を守る為に戦いを続けるように、私も自らの運命と戦いを続けてゆく)

シユウは空いた手でマサキの髪を梳いた。額に張り付いた前髪を除けて、その下に隠されている瞳を凝視めた。細まった瞳の眦に、涙が溜まっている。口ではやだと繰り返しながらも、菊座を収縮させるのを止める気はないようだ。ああ、あああつ。欲望の赴くままに腰を締め上げているマサキの空いた手が、シユウの肩を掴む。やだ、イク。いくつ

て。

「いいですよ、ほら、達きなさい。それはそういう玩具なのですから」

やがて、つま先を立てて、腰を突き出し、全身を突っ張らせるようにしながら、マサキは絶頂を迎えた。既に出るものを少なくしているマサキの射精は一瞬だ。力が抜けてゆく身体。そうして、息を荒くしてシートに沈んでいるマサキに、普通の自慰とは比べ物にならないでしょう？ シユウは囁きかけた。

「他にも色々揃えて貰いましたから、少しずつ試してみてくださいことにしましょう。それまではそれを使うのですね」

小さく、けれどもはつきりと頷き返してきたマサキは、どうやら彼なりに思う所があつたようだ。あれだけ朝から激しくシユウを求めてきた割には、そこから夕食の支度と呼びに向かうまで、寢室から姿を見せることはなかった。その甲斐あつて、溜まりに溜まった文献と書物の消化はかなり進んだが、淫紋の解呪に繋がりそうな情報とはいえ、たった一語のヒントさえも得られない有様だった。

物足りなさとし寂しさ。マサキが扉一枚を隔てた場所に存在している生活に執着し始めているのだろう。焦燥感よりも先に感じてしまった感情は、シユウの現在の感情を的確に表わしていた。刻限の定められた生活だというのに、終

わりを先延ばしにしたいくてどうしようもない。

いずれ、シユウはその情報に辿り着く。いや、辿り着かなければならない。その気持ちに偽りはなかったけれども、心の片隅に棲む欲望が、食欲にマサキを求めて止まらずに。

シユウはマサキを側に、夕食のメニューを決めるべく冷蔵庫を開いた。

出来ればきちんとした食事を出してやりたいこともあったが、食料の買い出しもままならない生活。サファイーネに重ねて頼んでおくべきだったと悔やんでも時既に遅し。大分中身を心ともなくしている冷蔵庫は、明日にも食材を無くしてしまうだろう。怒涛のように過ぎて行つた四日間を振り返つて、シユウは改めて自分が立ち向かつている困難の激しさを思い知らずにいられなかった。

しかし午後いつばい姿を見せなかったということは、与えた玩具おもちゃはそれなりにマサキを満足させるものであったようだ。これまでの経緯からして、そう日数が経たない内に、それで得られる刺激に飽きてしまうのは目に見えていたものの、サファイーネが用意した玩具おもちゃは他にも数多くある。シユウは隣で黙々と食事の支度の手伝いに励んでいるマサキを横目に眺めた。いつもと比べれば、自慰で絶頂オ orgasムを得られるようになった分、落ち着いて目の前のことに専念しているように見える。この状態のマサキならば、買い物に連れ出

せるかも知れない。そう考えたシユウは、夕食の席でマサキにその話を切り出してみることにした。

案の定というべきか。マサキは今の状態の自分が外に出ることに、不安を感じているようだ。

かといって、マサキをひとり残しては出られない。明日にも食料は尽きてしまうことだろう。シユウはマサキを説き伏せた。マサキも自分がひとり家で残ることに問題があることは理解しているようだ。説得に応じたマサキに、食後、解呪を施した上で、シユウは久しぶりの外出に踏み切った。

向かうはこの町の南西にある24時間営業のマーケットだ。シユウが住むアパートメントからは徒歩で十分ほど。日差しを受けながら、散歩がてら。特に問題もなくマーケットに辿り着いたシユウは、夜を迎えて人影少なくなった店内で、マサキと共に日持ちする野菜と缶詰を中心に、食料を選んではカゴへと放り込んでいった。最初は不安げな様子だったマサキも、一週間ぶりに外の空気が吸えたことが余程嬉しかったようだ。身長を超える陳列棚が並ぶマーケットの中を、まるでアミューズメントパークにいるかのようにはしゃぎようで回つてゆく。

「あそこの棚にミネストローネやポタージュなんかがあるな。お前、スープ好きなら、買ってあげ手間が省けるだ

ろ」

「味が好きというよりは、手軽に作れて、必要な栄養を充分に摂取出来るのが気に入ってるだけです。しかし、今後は野菜を考えて消費しなければなりませんし、その為にも幾つか買っておいてもいいかも知れませんね。あなたは何が食べたいですか、マサキ」

「本音を云えば味噌汁だけだな。野菜の摂取って云うなら、ミネストローネか——」

自ら棚の上部にある缶詰に手を伸ばしたマサキが、つま先立ちになったその瞬間に、息を詰めて動きを止めた。マサキ？ シュウが声を掛けるも、「何でも、ない……」と身動きままならない様子で首を振る。もしかすると、早くも淫紋がその力を揮い始めたのではないか？ そう考えたシュウが問い詰めてみるも、マサキは迷惑をかけたくないようだ。

首を振るだけ振ったマサキは、つま先立ちになった踵をようやく床に付けたものの、何かに阻まれているのだろう。シュウを振り返ることはなく。

その腰から臀部にかけて震えているのを見て取ったシュウは、まさか——と、マサキの背後に立ち、棚からスプーンの缶を幾つか取り出しながら、その耳元に囁きかけた。まさかとは思いますが、挿れたままですか？ ぴくりとマサ

キの身体が震える。どうも凶星らしい。どういった心理的作用が働いたのかは不明だが、マサキは外出どころか夕食の支度をも、玩具を抜くことなく行ってしまったようだった。その結果、もののはずみで刺激を受けた身体が反応してしまった……シュウは続けてマサキに囁きかけた。そんなに我慢が効かなかったの？

マサキの返事はない。

シュウの心の底から、抑えようのない嗜虐心が込み上げてくる。人気の少ないマーケット。ふたりがいる通路に他の客の姿はない。まるで詠えられたかのような舞台に、シュウの抑えていた欲望が爆発する。

こんな機会は二度とない。誇り高き彼は、日常に戻ったが最後。シュウには指一本さえ触れさせてくれなくなることだろう。当然だ。シュウが逆の立場ならば、自分の弱味を知る相手。最大限に警戒をするに決まっている。だからこそ、限りある時間に訪れた限りある好機。それを逃してしまえるほど、シュウは清くは生きていない。所詮聖人君子にはなれないのだ。一匹の雄として、マサキを屈服させたいシュウは、ほら、マサキ。そつと腰を撫でてやりながらその名前を呼んだ。自らの欲望と戦っているのだろう。マサキは口唇を噛み締めながらも、シュウを仰ぎ見てくる。物欲し気な瞳に、薄く開いた口唇。何度見ても扇情的な

表情だ。出来るでしょう、動かしなさい。シユウは再度、マサキの耳元に囁きかけた。

——や、だ……こんな、場所……

——なら、何故、挿れたままにしたの？

答えられずにいるマサキの腰を、シユウは再び撫でてやる。首を振るマサキに、上手く出来たらご褒美ですよ。追い打ちをかけるように、更にシユウは囁きかけた。マサキの身体が褒美という言葉に反応して、ぴくりと震える。

シユウは知リたかつたのだ。午後いつばいを玩具おもちゃでの自慰に使ったマサキが、玩具おもちゃを用いて快感を得ることを覚えて尚、シユウを求めるのかを……それがシユウ自身ではないことをシユウは理解していながらも、シユウに向けられた様々なマサキの顔を、失いたくないがばかりに確認せずにいられなく。

ゆつくりとマサキが振り返る。狡い。そう云ったマサキの手が、シユウの服の上から胸元を掴む。

——どうせ食事の間だけだと、思った、んだよ……シユウの身体の影に隠れるようにして、ひっそりと。息を荒くし始めたマサキを見下ろしながら、シユウもまたひっそりと囁いた。シユウの強欲な性は、こうしてマサキの誇りを獐猛に食い荒らしてゆくのだ。それに抵抗を感じていたシユウ。シラカワはもういない。マサキの身体に溺れる

ことを知ってしまったシユウは、この魅惑的な誘惑から逃れることなど出来ないのだ。

あ、あ、シユウ。人目を憚る気力はあるらしい。シユウは小さく声を上げて、腰を絞っているマサキの姿を見下ろした。

——そんなに褒美が欲しいの？ 散々それで愉しんだのでしょ？

——意地悪、云うな……

我に返ったマサキはシユウとの行為をどう感じているのだろう。心に湧き出た疑問を、いずれマサキにぶつけられる日が来るのだろうか？ 心の何処かでその答えを得ることを恐れている自分がいるのを感じながら、シユウはマサキが徐々に上り詰めてゆくのを見守った。

——も、いいだろ……このままじゃ、本当にいく……

涙を零した瞳を隠すように、マサキの顔がシユウの胸に埋められる。家まで我慢出来ますか？ シユウが尋ねれば、羞恥に快感を覚えるのにも限界があるようだ。マサキは激しく何度も頷いてみせた。わかりました。シユウはそつとマサキの顔を胸元から剥がすと、行きましよう。カゴを乗せたカートに戻り、買い物の続きをすべく、マサキが追い付くのを待ってから通路を歩き始めた。

※ ※ ※

鎮まらないどころか増々昂る身体を残された理性で押え付けるようにして、どうにかシユウの住むアパートメントに辿り着いたマサキは、彼が荷物を片付けるより早く、その身体に縋り付いて褒美を強請った。

—— だったらその気にさせてみせなさい。朝のようにね。出来るでしょう、マサキ。

早く、はやく、ハヤク。激しいまでの衝動が、擦り切れる寸前の自意識を飲み込んでゆく。アレが欲しい。マサキはシユウの優しさに付け込んでいる自分を自覚していながらも、逆らい切れない欲望をぶつける先を他に持たずに。

アレが欲しい。その口付けを、愛撫を、男性器ペニスを求めて、シユウに命じられるがままに。アレが欲しい。キツチンで膝を付いて、彼の腰回りを絞っているベルトの金具に手を伸ばした。カチ、と首を立てて外れる金具。マサキはスラックスのファスナーを開いた。僅かに布を覗かせた下着をずらして、姿を露わにした男性器に舌を這わせる。

舌先に感じる熱。ああ、これだ。マサキは安堵すると共に、飼い慣らせることのない衝動が、途端に強まってゆくを感じていた。ああ、シユウ。欲しい、頂戴。自分の言葉とは思えない台詞が、これもまた自分のものとは思えない

い音域トーンの声で発される。まだですよ。陰茎を舌先でなぞり、口唇で食む。次第に熱を帯びてゆく男性器が、目の前で勃ち上がつていった。

彼は同性であるところのマサキ・アンドーという人間に、欲望を感じられる人間であるらしい。

神殿で衝動的にシユウの男性器を求めて言葉を吐いてしまったマサキは、正気を取り戻した時に、その事実を思い出して羞恥を感じると共に、酷く落ち込んだものだった。場所をこのアパートメントに変えて、それでも収まらない衝動に発作的にシユウに迫ったマサキを、当初のシユウは頑なに抱こうとしなかったものだ。それをマサキはそういう意味だと解釈した。彼はマサキを決定的な意味で抱く気はないのだと。

当然だ。彼にその気があるのであれば、とうに何某なにがしのアクションがあつて然るべき。

決して短くない時間を共にしてきた男だ。かといって、味方でもなければ敵でもない。近しい仲間たちに茶化されることが多々あれど、時に戦場で命を預け、時に命の遣り取りをする相手でしかないシユウ。シラカワという男。謎めいた振る舞いを繰り返す男と顔を合わせるの、いつだって戦いの場だ。

稀に、そう稀に、どうした心境の変化か、マサキの前に

姿を現わしてみせては、まるでその肩入れをするかのよう  
に、そつと手を差し伸べて去つてゆく……それは恐らくは、  
彼がマサキより年長者であるからこそその優しさであるのだ  
ろう。年少者を輝ける未来に導こうとする大人を、マサキ  
はふたつの世界で数多く目にしてきた。そして知った。彼  
らはかつての自分をそこに見出すからこそ、未来ある少年  
少女たちに手を差し伸べずにはられないのだと。だからこ  
そ、教団によって窮地に陥<sup>おぼ</sup>れられたマサキは、シユウのそ  
の優しさを信じて縋<sup>も</sup>つてしまった。

彼にその気がないことを知ったマサキは、ただ安堵した  
のだ。いつ自分が正気を失つたとしても、彼はこの身に愛  
撫<sup>なで</sup>を与えるだけで、決して先に進むような真似はしない――  
というより、出来ないのだと。

それでいい。否、そうでなければならなかった。  
自らの油断が招いた事態だった。街中とはいえ警戒を怠<sup>おろ</sup>  
てしまったマサキの。それをどうして長く教団と戦い続け  
てきた男に背負<sup>お</sup>わせられたものだろう。自らの失態を取り  
返せるのは、その当事者である自分自身だけなのに。  
だのにシユウは、マサキを抱いたのだ。

逃<sup>に</sup>げられない罪を飲み込むように。全てを自身で処理し  
てみせると云わんばかりに。

男の性というのは正直なものだ。どれだけ性欲が高まっ

ていても、反応出来ないものがある――……ラ・ギアスに  
召喚された頃、年頃の少年だったマサキは、時に街中にあ  
るボスターを目に焼き付けて、自室のベッドの中や風呂場  
のタイルの上などで、そこに映し出されていた女性を脳裏  
で様々に処理しながら自慰に耽<sup>ひた</sup>つたものだ。やがて動  
乱がラングランを襲つてからは、そうした時間を得る機会  
にも恵まれ難くなつてしまつたが、だからといって性欲が  
消失する訳でもない。そういった時に、身体の渴<sup>かわ</sup>きを癒し  
たいからと手頃な情報に頼つた所で上手くないものだ。  
無理なものは無理なのだと、だからマサキは男の性にっ  
いてそう知っているつもりでいる。

――ほら、マサキ。もつとちゃんと出来るでしょう。

シユウの言葉に誘われるようにして、マサキは目の前の  
硬さを増した男性器を口の中に飲み込んでいった。いつし  
か勝手に動き始めていた腰の奥、腹の中に収めたままの玩具<sup>おもちゃ</sup>  
が、下半身から全ての力が抜け落ちるような刺激を腸内に  
与えている。あの時のようだ。打ち捨てられた神殿の地下  
にある祭祀場で、ヴォルクスの幼体から伸びる触手に犯  
され続けた三日間。マサキの脳内にあつたのは、限りなく  
湧いて出る性欲を解消することと、限りなく与えられる快  
楽を食<sup>く</sup>うことだけだった。

今の自分はそこまで欲望に飲み込まれてはいない。定期



的に行われる解説が、こうしてマサキの意識を残してくれているのだろう。淫紋が力を発揮していても、理性の全てを失うことはない。なのに、こうして思考を重ねることも出来るのに、押し寄せる欲望の波にマサキは逆らい切れないのだ。これが欲しい。マサキは口の中に収めているシユウの男性器を強く吸った。これが欲しい。吸って、舌を絡ませ、更に吸った。

——あまり強く吸われては、私の方が保ちそうにない。シユウの手がマサキの頭を両側面から挟み込むように支え、その口元から男性器を一気に引き抜く。ほら。脇の下に差し入れられた手がマサキの身体を立たせたかと思うと、次にはその身体を抱え上げてくる。

——キッチンで事に及ぶほど無粋ではないのね。不安定な体勢に、マサキはシユウの首に腕を回してしがみ付く。耳朶を舐めてくる舌。想像していたより体温の高い肌の温もりを感じながら、マサキは続くシユウの言葉を聞いた。

——ベッドに行きましょう、マサキ。そのぐらいいは我慢が出来るでしょう。

※ ※ ※

ベッドにマサキの身体を下ろしたシユウは、その身体から衣服を剥ぎ取ると、玩具を抜くこともせず。旅行バッグのなかから手枷を取り出して、それでマサキの両手をベッドの柵に繋ぐと、時間をかけて全身を舐った。

——や、だ……イク……っ。

乳首を舐められながら一度、足の指を舐められながら一度。合計二度の絶頂を迎えたマサキは、それでも解消されない性欲に、涙を滲ませながらシユウに懇願してきた。抜いて、お願いだから抜いて。ままならない性欲を抱えている割には、幾度も玩具で射精させられるのは我慢がならないようだ。びくびくと身体を震わせながら、繰り返し。腹の中に収めている玩具を抜くようシユウに泣き付けてくるマサキに、シユウは自らのままならない感情を確かめるように囁きかけていた。

——どうして抜いて欲しいの？ 達きたいのでしょうか？ 我ながら相当に屈折している。自らの意地の悪さを自覚しながら、それでもマサキに答えさせたい。シユウは口元にうつすらと笑みを浮かべた。例えば淫紋の所為であろうと——、否。淫紋の力があるからこそ、マサキの口から自らを欲する言葉が溢れ出るのだ。その、心地良くシユウの耳を満たしてくれるその言葉を聞けるのは今しかない。

飽きる程、聞きたい。飽きる程。

そしてその思い出を胸に、二度と取り戻せないだろうこの時間を縁として、シユウはマサキをこの先も想い続けるのだ。決して癒されない孤独を抱えながら。

——ご褒美、つて、云った……

こういつた時でも、マサキは蓮つ葉な態度を崩さないものだと思ひ込んでいた。そう、もつと粗野に感情をぶつけてくるものだ。それがどうだ。相変わらず子供のようシユウに行為の先を強請ってくるマサキに、そうしたあなたの態度が好くないのですよ。シユウは笑った。声を押し殺して——低く嗤った。

シユウはベッド近くに置いてある旅行バッグの中から目隠しを取り出した。黒い伸縮性のある布、輪となっているそれに、マサキの頭を通して目を覆ってやる。な……に……手枷で手首をベッドに拘束されているマサキに抵抗は出来ない。それどころか彼はこうした扱いをされることに、悦びを感じてしまっている。わかつているからこそ、シユウはとことんまでマサキを被虐の渦へと落としてゆくことに決めた。

（——元の生活を取り戻したあなたの身体は、どうなるのか。男性としての性を取り戻すのか、それとも……習い性に変えられないのか……）

それをシユウは確認するつもりはなかったけれども、今

のマサキがそうした扱いで、普段以上に満たされるのであれば、それは叶えてやりたい。しかし、そう考えた先からシユウはその考えを打ち消してしまう。そんなのは欺瞞だ。シユウは旅行バッグの中から更に玩具を取り出しながら、自らをそう虚げずにいらなかった。

自らの中にある嗜虐性を、自らが好ましいと感じている相手に叶える。シユウはその欲に誑かされたのだ。ラ・ギアスの戦神を性的に蹂躪する。その悪魔的な魅力に……いくつかのシユウはこう思った。自分は数多の男と同じような過ちを犯しはしない。相手が弱っているその隙に乗じて自らの欲を叶えたところで、相手の心は手には入らないのだ。時間をかけてゆつくりと。心の距離を詰めてから、そうした行いに及ぶべきである——。

けれども今のシユウは違う。欲を果たすことを知ってしまったシユウは、身体の距離が近くなった分だけ、それまで以上にマサキとの心の距離を感じてしまうようになってしまっていた。マサキが何を考えているのかに理解が及ばない。只、日々を欲望を果たすことに費やしてばかりのマサキ。彼は欲望を叶えることには饒舌だが、それ以外のこととなると寡黙になる。それがシユウをして、マサキの心中を察せないまでに、互いの心が隔たってしまったと感じさせる要因なのだ。

人間はかくも弱き生き物である。何度心を挫かれても韋のように立ち直ってみせたマサキは、淫紋の力によって全てを欲望に明け渡してしまっている。心と身体は勿論のこと、他人をせせら笑えるまでにふてぶてしくあれる自尊心さえも。

それが哀しいのか、口惜しいのか、それとも滑稽に感じられているのか。シユウにはわからない。理性で感情を制御している筈のシユウであつたのに、今は胸の内に渦巻くその感情が何であるのか把握出来ないのだ。いや、そもそも、自らの感情を自制なしに把握しようなど、愚行でしかないのやも知れない。いずれにせよ、シユウは踏み切ることを決心してしまった。マサキの心を得ることを諦めて。

バッグの中から取り出した玩具アイテムを枕元に置いて、シユウはマサキの脚を開かせた。力を抜きなさい。そのままでは抜けませんよ。確りと身体の奥に引き込むように玩具おもちゃを咥え込んでいるマサキの菊座が、果たされない欲望を想つか。物足りなさそうに収斂しゅうれんを繰り返している。その動きがぴたりと止む。

——そう、いい子ですね。

菊座から顔を覗かせているストッパーに指をかけて、シユウはゆつくりとマサキの腹の中に収まおもちやっている玩具を引き抜いていった。何度も絶頂オシカミを迎えたからだろう。固さを増

した菊座は簡単にはその頭を吐き出しはしなかったが、時間をかけ、声をかけ、マサキの身体の緊張をほぐしていくと、やがてずるりと全てが吐き出された。

——ほら、抜けましたよ。これでいいでしょう？

押から揶かい気味に言葉を吐いて、枕元に置いておいた小型のローターを両手の人差し指に嵌める。親指で擦り上げるようにしてスイッチを入れ、シユウは物云わず、マサキの乳首にそれを押し当てた。音で何が起こるかある程度は予測していたのだろう。そこまで驚きを感じさせることもなく、あ、と声を上げたマサキが顎を上げて喘ぎ始める。あ、あ、シユウは指先を動かして、刺激に強弱を付けてやる。強めに押し当てられるよりも、軽く当てられる方が好みらしい。あ、あ、あ、つ、やだ。やだ。頭頂部が枕に着くのではないかという勢いで、全身を弓なりに逸らしてよがるマサキにシユウはようやく言葉を掛けた。何が嫌なの？

——挿いれて、中に挿いれて……

どうして？ さつき抜いたばかりでしょう？ シユウが尋ねれば、また、そうやって……つ。云った先から言葉が喘ぎ声に呑み込まれてゆく。突起の先端から乳輪へ。乳輪をなぞるようにして、側面へ。そうしてシユウが硬く天を向いている乳首の形に沿ってローターを這わせて続けていると、も、達いきたくない。悲鳴に近い声を上げてマサキが

首を振った。次いで、拘束されている手もお構いなしに、身体を左右に振って抵抗を始める。

——欲しかったらちゃんと云いなさい。

目隠しの下のは瞳はどういった表情をしているのだろうか。

シユウとしては覗き見たくもあつたけれども、それ以上に視界を塞がれたマサキがどういった反応を見せるのかの方が気になった。人間の身体は視界を奪われると、それ以外の感覚が増すように出来ているものだ。閨房術の初歩でもある。淫紋に支配されるようになってからのマサキは既に相当に身体之感度が増しているようであつたからこそその興味と関心。案の定、マサキは息も絶え絶えになりながら、迫り来る絶頂と戦い始めた。

——頂戴、シユウ。頂戴。お前の×××を、俺の、中に、挿れて。

悩まし気に吐息を吐き出している半開きの口唇を優しく塞いで、シユウは双丘の間で緩く口を開いている菊座に自らの男性器を押し当てた。欲しいの？ 長い口付けを終えてから尋ねればこくこくと頷く。その素直さが何もかもを叶えてやりたくなる程に愛くるしい。こういったマサキの反応を見られるのも、あとのくらしいことだろう。既に一週間が経過してしまっているからこそ、シユウは残された日々を意識せずにいらなかった。

そのまま腰を進めてゆく。

その後のマサキの狂乱！ シユウの男性器の全てを飲み込んだマサキは、固定された手首を軸に、全身を激しくねらせてよがった。あ、ああつ。動いて、動いて、シユウもどかしそうに言葉を吐きながらも、腰を上下に振っている。動かす必要もなさそうですけど。そう答えてシユウが笑えば、やだ、早く、動けつて。声を震わせながらマサキが強請<sup>ねが</sup>ってくる。嗚咽を堪えているようにも聞こえる声は、きつと隠された瞳が涙を滲ませているからなのだろう。そう思いながら、動いてもいいの？ 聞けばマサキが強く頷く。

そうして腰を動かし始めたシユウは、彼が好きな腸の奥の方を突いてやりながら、再び乳首へとスイツチを入れたローターに触れさせた。——ッ。喘ぐのを通り越して声を詰まらせたマサキが、背中をしならせて口唇を嚙んでいる時折、大きく息を吐き出しながら、それでも手に入れた快楽を手放すつもりはないのだろう。シユウの腰の動きに合わせて腰を絞つては、上下に振る。

シユウはそんなマサキを思うがままに突いた。

浅く、深く。マサキの様子を窺いながら、時に捻じ込んで、時に引く。もつと、もつと、奥。浅く突かれては、すすり泣くような細い声で懇願するマサキに、そんなに奥が

いいの？ 乳首を颯りながら尋ねれば、そう。背中を反らしているが故に頷けないからか。マサキは言葉で肯定して、ああ、と深く突き立てられた男性器に、つま先を突つ張らせた。

どうしようもない憎しみと、嫉妬。

マサキを変えてしまったヴォルクルスと教団に対する感情は、今もシユウの胸に火を灯し続けていたけれども、それに勝る愉悅と悦楽がシユウ自身を飲み込んでいった。今の時だけは、マサキは紛れもなくシユウのものなのだ。その現実がシユウを欲に溺れさせる。ほら、達つて。何度も深く腰を進めてやると、吐息なのか声なのかわからない音がマサキの口から洩れた。それを繰り返すこと数度。やだ、まだ、達きたくない。ようやく吐き出された言葉に、何故？ と言葉を返す。

——お前、どうせ、ま……た、これっ、きりで……終わりに……

マサキは貪欲だ。叶えた望みを簡単には手放そうとしない。途切れ途切れの愚痴とも文句ともつかない台詞を耳にする度、シユウの心は弾んでしまうのだ。求められているそれが例え身体だけであっても、自分を欲する言葉を聞いて喜ばない人間はいない。シユウは世の男性を思った。彼らがひとときの欲を果たすことに執着してしまうのは、利

那の快感を求めでることなのだろう。確かに、この瞬間を知ってしまったら、目の前に差し出された誘惑に抗えなくなる……大丈夫ですよ。シユウはマサキに囁きかけた。今日はあなたが満足するまで付き合います。

——ほん、とう……に……？

ここに連れて来られた当初にさんざ焦らされたことを忘れていないのだろう。そして欲を爆発させてしまったマサキは、だからこそシユウの言葉に安堵したに違いない。涙声でそう呟くと、それから少しもしない内に、全身をわななかせるようにして絶頂を迎えた。

快感の余韻に震えている身体。シユウはベッドに繋いだマサキの手首を一度解放してやると、続けてマサキの身体を起こしてやりながら後ろ手に手枷を嵌めた。そうして繋がったまま。シユウは身体を倒しつつ、マサキを腰の上に乗せた。視界を塞がれているマサキは何をされるかわからない状況に、一瞬、怯んだ様子も見せたが、欲の力が勝ったようだ。腰を振って。シユウが声を掛けるとおずおずと腰を動かし始めた。

——もつとちゃんと腰を振れるでしょう？ 朝は出来たのですから。

後ろに倒れることの出来ないマサキにシユウは手を伸ばした。指に嵌めたままのローターを乳首に当てる。ひく、

と揺らいだ身体が前屈みになる。身体の均衡バランスを失えないからこそ、前に倒れるしかないようだ。シユウは膝を立てた。そしてマサキの姿勢を直してやる。背中に支えが出来たことで安心したのか。あ、ああ。顎を上げて喘ぐマサキの腰が、次第に動きを強めてゆく。

服の上からではわからなかった身体のライン。想像していたよりも細い腰が、シユウの男性器を咥え込んでいる。男とはどうしようもない生き物だ。目隠しに、手枷。乳首に当てられているローター……視覚を支配するマサキの被虐的な姿。けれども快楽を享受するだけでなく、自ら貪りにゆくその姿は、切なくなるまで官能的だ。

——そろそろ出そうですね、マサキ。達いかせて。あなたの中で。

出して、中に。出して。譫言のように繰り返しながら、マサキが腰を振っている。きつとそういつた経験もあったのだろう。滑った液体に塗れたヴォルクスの触手は、マサキに疑似的な性体験を与えたのだろうから。

そうした経験がマサキの中に蓄積され、取り除かれることのない塵となつて積もっている。

変わらない感情。憎しみと嫉妬と。

一瞬、シユウの胸を過ぎった激しい負の感情は、けれどもあつという間に、マサキから与えられている快感で塗り

替えられてゆく。迂闊に言葉を吐けない程の恍惚。シユウはその瞬間、マサキの腰を掴んで強く引き寄せると、奥の奥。息を詰めて深く、その体内に自らの精を放った。

※ ※ ※

幾度もの交わりを経て、ベッドに深く身体を沈ませたマサキは、泥のように疲れ果てた身体を休めながら、自らのままならない性欲がまたもシユウの時間を奪ってしまったことに、後悔の念を感じずにはいられなかった。

身体が満たされきるとマサキⅡアンドーとしての自我が強くなるからだろう。そう考えると、性欲に飲み込まれている間のマサキは、本来のマサキⅡアンドーではなく、もうひとりの人格によつて意識を沈められている状態なのかも知れない。そういつたことをつらつらと考えながら、身体に残る激しい情交の跡に目を遣る。肌に刻まれた紅斑。戒めの解けた手首に浮かぶ手枷の痕。それを目にするだけで身体に蘇る快楽の記憶。いつしかそれはヴォルクスとの性交の記憶ではなく、ここに来てからシユウと交わした行為の記憶に摺り替わってしまった。

欲しい。

ふと思ひ浮かんだ衝動にマサキは焦った。これはマサキ

Ⅱアンドーとしての自分と、教団によつて生み出されたもうひとりの人格、そのどちらの感情なのだろう。ようやく鎮まつたばかりの身体に強烈に走つた衝動は、マサキに迫り来る時間を意識させるものだった。

廃人化。

それはもしかするともうひとりの自分にマサキⅡアンドーとしての意識が、取つて代われ続けることを意味するのではないか。或いは、マサキⅡアンドーとしての自我の消失——。今のマサキはもうひとりのマサキと記憶と間隔を共有している状態だ。意識の底に押し込まれるようにして、もうひとりのマサキが欲に溺れるのを眺めながら、自らもまた快楽の渦に叩き落されてゆく……それをどこかで心地良いものとして捉えてしまっている自分もいれば、欲に飲まれることを良しと出来ない自分もいる……マサキはもう一度、情交の跡に目を遣つた。全身を丹念に隅々まで舐つたシユウが残した紅斑の数々。被虐に心を躍らせてしまうマサキをより欲ばせる為に与えられた拘束の痕。胸が、苦しい。心が震えてどうしようもない。瞬間的な疼き（もた）が向き合させた問題は、マサキにより激しい混乱（もた）を齎した。どちらの自分がシユウを求めているのかわからなくなる。もしかするとこれは——マサキはそこまで考えて、心細さに枕を抱いた。続きを考えるのは元に戻つてからだ。そ

れまではどうにかして自分の意識を保ち続けなければ……それでもその時が訪れれば、マサキは抑えきれない衝動の赴くままに、身体をシユウに差し出してしまうのだ。それが淫紋の力であり、もうひとりのマサキの為せる業であることは承知していたけれども、マサキはそこに、ひとかけらの自らの欲望が紛れ込んでしまっていないだろうか？  
そう疑問を抱かずにいられなかった。

だから不安で眠れなくなるのだ。

せめて自らの意識が優位に立っている間ぐらい、心を休めて眠りに就くべきだろうに。それなのに冴え冴えと醒めている意識。ヴォルクルスに捕らえられていた間の方がまだ眠つていた時間が長かつた——と、思わずにいられない程にマサキはここに来てからというものの、身体と心を休めた記憶がない。

何故、あの男（シユウ）を頼つてしまつたのだろう。

突き放した物云い（シユウ）をしながら面倒見のよい男。その優しさに付け込んでしまった。せめて少しの間でもこの心を揺さぶるような性欲を押さえ込んで彼と向き合うことが出来れば、長く、辛く、マサキの身体を焦がしては煽り立てる欲望と戦うのは自分ひとりで済んだのに。

眠らなければ。

眠らなければ。

眠らなければ。

思えば思う程、目が冴えてしまう。俺はどうすればいいんだよ。知ってしまった快楽を、忘れてしまえそうにない自分。マサキの意識は常にそこにあったのだ。ここに連れて来られた当初こそ、我を忘れて暴れてしまったようだが、それ以外の時間はずうっと。

どうすればいいかわからない。全てが無事に丸く収まったとして、シユウやサフィーネが日常の有るべき姿に戻った時に、マサキはどう生きることを選ばなければならないのか。きつと、知ってしまった快楽は、思い出したようにこの身を焦がすのだろう。そういった予感がしてならない。だったら余計な抵抗などせず、欲望に溺れきってしまった方がいい。

どうせ限られた時間のことなのだ。わかっている。それでもマサキが心にしこりがあるのを感じてしまうのは、幾度でもシユウがマサキを決定的に抱いてみせるからなのだ。あの膨大な玩具の数々——マサキがこつそり、シユウがリビングで自分のすべきことに専念している間に中を極めてしまった大ぶりの旅行バッグの中身は、本来、マサキを抱かせない為にサフィーネが用意したものの筈だ。マサキに自分で使わせる、或いは、シユウがそれだけでマサキに満足を与える為の。マサキはそう考えたものだったし、恐ら

くはシユウもそう考えていた筈だったのだ。

マーケットでの出来事を思い返す。

あんな振る舞いに及べれるとは思ってもいなかった。ましてやそれに自らの身体が反応するなど。マサキは上手く抜くことの出来なかった玩具を、食後にでもまたゆつくりやればいいと放置してしまっただけだったのだ。それがあいつの効果を生み出すとは思わず。

何故？ と問い掛けたくなる。シユウに、何故、お前は俺を抱くのか——と。何を思っ、何を感じて、そして何を考えて、マサキ「アンドー」いうかつて敵だった自分にシユウは手を出すのか。そして何故、マサキの羞恥を煽るような真似を、場所も憚らずにしてみせたのか。

優しさだけで出来る範囲はとうに超えてしまっている。

尤も、そういった問題は、マサキ自身が抱えてしまっている問題の前では些細なものだ。一番の問題は、そうした扱いに快感を覚えてしまっているマサキ自身のこと。

マサキは薄々気付いてしまっている。

それがどうやらもうひとりの自分がしていることではなく、マサキ自身の嗜好や体質であるらしいことに。



## 5. 解呪の時、来たれり

起源は古く、二千五百年程前にまで遡れる。それは未だ精霊信仰が、数多の土着信仰のひとつでしかなかった頃。魔術が猛威を揮うより早く、その呪術は生まれた。

人柱、或るいは生贄として捧げられる供物としての人間。その心を神に縛り付ける為に。

誰しも自らの死を前にして、例え信仰の対象たる神に捧げられる身であっても、敬虔な信仰心を持ち続けることは難しいものだ。中には酷く取り乱した者もあつたし、聞くに堪えない神への暴言を吐いた者もあつた。それどころか、自らが属するコミュニティを呪った者もあつたと聞く。誰しも心に暗い影を落とす生贄というシステム。せめて供物たる彼らの死に際を美しく飾ってやりたい。始まりはそんな当事者ではないひとりの高位なる呪術者の自己欺瞞だった。

何故彼が、人柱、或いは生贄というシステムそのものを廃そうと思わなかったのか。その答えはヴォルクルスの顕現にこそあるだろう。事実、ラ・ギアスにおける供物は一定の効果を発揮した。そう、シユウがモニカを捧げてヴォルクルスを顕現させたように……。もし、システムが正常

に機能せず、効果を発揮しないのであれば、それは呪術、或いは魔術、或いは錬金学の手順に問題があつたからに他ならない。そう断じれる程度に、ラ・ギアス世界には超常的な摂理が——それはアカシック・レコードの真実であつたかも知れなかつたし、或いは無限大という数字の真実であつたかも知れなかつたし、或いは流れ続ける時間の真実であつたかも知れなかつたが、所謂、決して賢者であろうとも容易に見抜くことの出来ない真理となつて、空中を満たす大気のように自然に存在していた。

それは即ち、ラ・ギアス世界よりも高次元にある世界が、地球の上位にラ・ギアスが存在しているように、折り重なつて存在しているからに他ならない。

件の呪術師が世界の真理に辿り着いていたかはさておき、彼はその結果、この悪魔的な刻印を生み出すことに成功する。供物として終える人生の最期の瞬間に、神との一体化を得るだろう人間らは、こうして恍惚を得ながら命を終えられるようになった。

それが後に魔術に転用され、更には悪意の塊のような改良を加えられることとなると、さしもの呪術師も思つていなかったに違いない——。シユウは読んでいた書物を閉じた。前回のサファイーネの訪れより二日が経過し、流石に既に届けられていた書物や文献は読み漁り終えてしまつて

いた。そんな折に、サファイネより新たに差し入れられた二冊の書物。昨晚、早々に道楽貴族の許を訪ねる機会に恵まれた彼女は、持ち前の人心掌握術を使って上手く彼に取り入れることに成功したのだそう。その成果だけあって、それは知識の宝庫と呼ぶに相応しい二冊だった。

淫紋が完成するまでの歴史……その術式……使用に当たったの必要な材料や知識、そして技量までもが事細かに記されている。まさにシユウが求めていた情報ばかりの書物を、道楽貴族たる彼がどういったルートを使って入手したのか、またその知識をどういった状況下で生かしているのか。思うところは多々あれど、そういった枝葉末節な部分にまで心を砕いていては際限がない。

ひとりの人間が抱え込める問題には限界があるのだ。

シユウにとって最優先で処理しなければならない課題はマサキを元に戻すことであつたし、その次には邪神教団の殲滅という最難関の課題が控えている。こうした書物を所持しているのが王家に近い位置にある高い位を誇る忠臣であり、影では複数の複数の性奴隷を所持している道楽貴族であろうとも、既に王家との関係が絶えて久しいシユウの立場では、やれることに限界があつた。精々セニアに情報を流すくらいだろうか……けれどもあの勝ち気でお転婆な従妹は、きっとそれを重要な切り札として、いざという時

の為に手元に残しておくことだろう。彼女の中には、見た目や言動からは想像も付かない強<sup>した</sup>かさが潜んでいるのだ。そうでなければどうして情報局を掌握出来たものか……シユウは一心不乱に読み耽つた二冊の本を丁寧に書籍に収めた。淫紋を解呪する為の術式を作成するには、シユウの知識をもつてしても半日は必要になる。

リビングから寝室に向かう。取り敢えずの解呪を済ませるついでに、マサキに吉報を伝えなければ……とはいえず、耳聡いマサキのことだ。自らに関わる事態の話でもある。恐らくはまた、サファイネから書物を渡された際に、彼女とシユウが交わした会話に聞き耳を立てていたことだろう。それでも、その成果がいつ実るのかについても含めて話を聞かされるのは、マサキにとって悪い話ではあるまい。

既に九日が経過してしまっている。

如何に鋼の精神力を持つマサキであろうとも、迫り来る廃人化という驚異が相手とあつては、きつと不安と心細さを感じていることだろう。シユウは寝室の扉に手を掛けた。大丈夫ですよ。そう心から云つてやれる日がついに来た。

だというのに——晴れない心。

この生活に未練を感じてしまっている己。マサキが自我を取り戻すことを素直に喜べない。人間の浅ましさを見下してきたシユウにとって、その事実<sup>じじつ</sup>は酷く重く胸に押し掛

かるものだった。

※ ※ ※

終わるのだ。

シユウとサファイーネの会話を寢室の扉越しに聞いたマサキは、その事実には安堵を感じるだけでなく、一抹の寂しさをも感じてしまっていた。この日々が終わる。喜ばしいことと筈なのに、手放して喜べない。それは、知ってしまった快感を欲しがっている身体の所為なのだ……わかつているのに割り切れない心。今の自分が欲に溺れたがるのは、教団信者によって刻み込まれた淫紋の力に支配されているからなのだと頭では理解出来ているのに、何故。仕方なしに、マサキは自らの精神や考え方が、淫紋によって作り替えられてしまったのだと思い込むことにした。

それでも寂然としない思いが残る。

心が落ち着いている時に、そっと。寢室の扉を開けてリビングにいるシユウの様子を窺うと、休むことを知らずに何かに潜心しているシユウの姿があった。きつとマサキを元に戻す方法を考えていたのだろう。手にしている書物や文献をそして捲っては、成果を得られなかったのではないだろうか。陰鬱な表情で物思いに沈んでゆく。食事の支度

や洗濯——時間のない生活に掃除は諦めたようだったが、定期的な解呪、そしてマサキのままならない性欲の解消まで。一日の全てをマサキの為に使い続けている彼に、そこまでの負担を強いてしまうことになったマサキは、息をしていることも辛く感じられる程の心苦しさを感じていた。

だのに淫紋の力が強まれば、全てが吹き飛んでしまう。コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。そらで唱えられるようになったあの呪文。耳の奥から滲み出してくるなり、マサキの身体を蝕んで、ままならない欲望の渦へと叩き込んでゆく六人の邪神信者の声は、そうしてもうひとりのマサキを呼び出しては、マサキの意識を封じて快感の虜としてしまうのだ。嗚呼、マサキは吐息を洩らした。一日の殆どの時間、熱を持ち続けている男性器。その先端から汁が滲み出るのを感じる。性行為がしたくしてたくて堪らない。硬く反り返った男性器で貫かれて、思うがままに嬲られたい。

そういった意味では、シユウはマサキの願いを忠実に叶えてくれている。稀に、ヴォルクルスとの性交を懐かしく感じることもあったが、新たな刺激を常に与え続けてくれるあの男との性行為は、マサキともうひとりのマサキを満足させるのに充分に事足りていた。

だからマサキは今日もシユウに縋ってしまうのだ。

他の男たちに委ねようと思つたこともあつた身体。けれども今は、そうしたことは考えられない。それだけマサキはシユウとの性行為に依存してしまつてゐる。勿論、そこまでシユウに自らを委ねるからには、委ねるだけの理由がある。どうやらマサキはあの男に精神的にも依存してしまつてゐるようなのだ。

無理もない。

自分ひとりでは手も足も出ない事態。こんな状態にマサキが陥つたのは、両親をテロで喪つて以来のことだ。あれ以来マサキはひとりで生き抜ける力を求めてきた。何があろうとも生き抜ける力。だからこそ、ラ・ギアスに召喚されて、魔装機の操者候補に選ばれたと知つたマサキは、一も二もなくその立場に飛び付いた。今度の自分は誰かの命を守り抜いてみせるのだ。それは子供ならではの浅い思い付きでもあつたけれども、様々な経験を経た今の自分は、少なくともあの頃の自分よりは、風の魔装機神の操者に相応しいだけの強固な意志と堅牢な精神を有していると自負してゐる。

だからこそ、どこかで慢心してしまつてゐたのだ。自らを阻むもの、或いは事態はそうはないと。

心細くてどうしようもない。全ての鎧を取り払われたマサキアンダーという人間は、こんなにも脆弱な生き物で

あつたのだ。それを痛烈に自覚させられたマサキは、そのままならなさをぶつける先が欲しかった。その心の弱さも淫紋の影響を強めた原因であつたかも知れない。そう、マサキは溺れたかつた。沈むような快楽に溺れて、そうして現実のままならなさを全て忘れてしまひたかつた。

(——あの男を信用しているし、頼つてゐる)

失われた鎧の代わりとして、マサキの全てを包み込むように、シユウはその望みを叶え、そして不足しているものを与えてくれた。その本心はマサキには計り知れなかつたものの、シユウがどうやらマサキの立場や自尊心を、自身自身の全てを賭けても守りたいと考えてゐるらしいことは伝わつてきた。

ひっそりと、息を潜めるようにして、文献と書物を紐解き続けるその姿。全ての才能を持つて生まれたかのようにマサキの目に映るあの男は、きつとあはして影に隠れて努力を続けてきたのだ。そう思わせるまでに、いつも薄く笑みを口元に浮かべてゐる男の潜心熟慮している姿は、マサキの心を強く揺り動かした。

(——欲だけで繋がる程、自尊心を捨てちやいねえ)

それは、あの場にシユウがマサキを救いに現れた時点で、決まつていたことなのかも知れない。

マサキは長かつた九日間に想いを馳せた。救いを得られ

た瞬間のこと。あの時のマサキは、羞恥よりも、頼れる援軍が現れたことに安堵していた。その後訪れた愛撫に踊らされた二日間。それだつたら見知らぬ男たちにこの身体を預けようとマサキが決心してしまったのは、シユウに対する不満の現れでしかなかった。だからこそ、欲しくて、欲しくて、欲しくて、どうしようもなくなったマサキを抱こうと決心したシユウの表情は、苦悩に満ちていたのだろう。そして、マーカーツで背後から囁きかけられた瞬間。シユウは恐らく、マサキがどうすれば悦ぶのかを気付いている。気付いているからこそ、人目のあるあの場所での、無防備にもマサキを弄んでみせた。マサキがそれ以上は無理と訴えた時点で退いてみせたのは、だからだ。

このアパートメントに連れて来られてからの六日間は、マサキにとって、嵐のように過ぎていく日々であつたけれども、同時に凝縮された時間を過ごしたような満足感を覚えらるる日々でもあつた。それが、終わる。終わりを先延ばしにしたい感情と、終わりにしなければならないという感情。そしてやっと解放されるのだという感情……細々とした感情は他にもあつたけれども、強くマサキが意識した三つの感情は、それぞれ柱となつて胸の内でせめぎ合っている。

(——やりたい……)

これ以上とない快楽に浸かつて、溺れて、溶けてゆきたい。

日常生活に戻つたマサキは、きつと生涯、ヴォルクルスに犯される切つ掛けとなつた自らの慢心を悔い続けることだろう。そう、今頃、行方の知れなくなつたマサキを心配しているに違いない仲間に、それを打ち明けられることのないままに——……屈辱的な記憶を秘密として共有する相手は少ない方がいい。その共犯者として、シユウ・シラカワという男以上に相応しい人間が何処にいるだろう。

必要以上に他人に干渉せず、過ぎた口を利くこともなく、それでいて、状況に応じた最善を選び取る男。

超人的な能力と才能と精神力を誇る男に甘え過ぎているのは、マサキとてわかっているのだ。わかっているも払拭しきれない感情と欲望。淫紋の支配から解放された暁には、この苦しさからも解放されるのだろうか。それとも、身体に刻み付けられた快楽の記憶は、変わらずにマサキを支配し続けるのだろうか。そこまで考えて、あれが欲しい。マサキは唾を飲み込んだ。時に口腔内に収め、時に腸内に収めた男性器。その感触が身体に蘇る。

——コンコルディアム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ……

しんと静まり返つた寝室で、マサキは心の中。今一度、

呪文を誦<sup>そら</sup>んじてみた。

何かと向き合うのを恐れている。マサキはだからこそ、全てを淫紋の所為にしてしまいたいのだ。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。けれども魔力を持たないマサキが幾ら呪文を唱えてみたところで、何かの影響が身体に現れる訳でもなく。コンコルディウム・クム・ディオ。ユニオ・クム・ディオ。ただ、思い出してしまったシユウとの性行為に熱を増した男性器が、欲望の解消を求めて猛り狂うだけだった。

※ ※ ※

それを告げた瞬間のマサキの表情を、シユウは訝しく感じた。ようやく淫紋の支配から解放される目途が付いたというのに、その割には何か悩ましさを感じているような顔をしている。どうかしましたか。何か気にかかることでもあるのかと尋ねてみれば、ベッドの上で膝立ちになったマサキは、無言でシユウの首に腕を絡めてきた。そのまま、口唇を重ねてきたマサキの——し慣れないからだろう。不慣れでぎこちないながらも、欲望の赴くがままに行われる口付け。舐めて、啄んで、舌を差し入れてきては絡め……発情期の獣のように一心不乱に、息を荒くしてシユウの口

唇を貪っているマサキにシユウは軽く応じてやりながら、何が彼の心に影を落としているのかを考えた。

まさかとは思うが、日常に戻った後のことを心配しているのだろうか？

そう脳裏に思い浮かぶ頃には、シユウが何も云わずにいたからだろう。マサキはそれを合意と受け止めたようで、気忙しくもシユウのスラックスのファスナーを外し、その中に潜んでいる男性器を引き出して口を付けているところだった。口付けの不慣れさとは裏腹に、慣れた様子で男性器を舐<sup>ね</sup>っているマサキの潤んだ瞳。正気と狂気の狭間にある瞳が揺らめきながら、目の前にした男性器をうつとりと捉えている。

形を確かめるように陰茎を舌先で辿り、亀頭に辿り着いては軽く口に含んで吸う。そして口の中でちろちろと先端に舌を這わせて、そろそろ滲み出始めた汁を舐め取っては、また陰茎を辿りにゆく。ヴォルクルスの手触にどう扱われればこうなるのか、思い浮かびもしない程の舌技。シユウはどうやってそれを身に付けたのか聞いてしまいたくなかったが、忌まわしき三日間の記憶をわざわざ掘り起こして、マサキの心の傷を広げてどうなるものか——と、胸に湧き出た衝動を、寸<sup>すん</sup>でのところで押し留める。

どの道、してやらなければならなかったことだ。長くか

かるだろう淫紋の解析の、そして解呪の法を組み立てる時間の間、流石にこの作業だけは一気に進めたい——そう考えているシユウは、マサキの要望に逐一応えてやる暇がない。だからこそシユウは、その前にマサキに充分な満足を与えてやらなければならないかった。

マサキと七日間を過ごして気付いたことであつたが、より深い快楽を得て満足を感じると、その度合いに比例して彼は正氣に戻る時間が伸びるようだ。勿論、その間も彼の男性器は昂ぶり続けていたし、いつでも性行為を受け入れられるだけの精神状態にはあるようだったが、その衝動を自らコントロール出来る程度には落ち着きを取り戻してみせたものだ。

だからこそその性行為。

それはシユウがマサキを抱くのが最後になることを示している。

解呪の法が完成して暁には、即座にそれを用いて、マサキを淫紋の支配下から解放しなければならぬ。あの道楽貴族のように廃人化を防ぐ方法を知っているからといって、その所有している性奴隷のように、シユウはマサキを手元に置いてはおけないのだ。

彼には魔装機神の操者として務めなければならない役目がある。

マサキの長い不在を、正魔装機の操者たちは相当に不審がつていることだろう。何せ彼らと街中にいる最中に突然に姿を消しているのだ。これで不審や不安を感じなかったとしたら、仲間という言葉の定義を根底から変えてやる必要がある。その程度にはシユウはマサキたち魔装機操者の仲間としての絆を信用している。

彼らの元にマサキを返すのだ。

それにしても——……こうして思考を重ねなければ、何かの弾みに達してしまいそうになるほどに、ねつとりと男性器に絡み付いてくるマサキの舌。出したい。そう、彼の口の中に。強烈な衝動を抑え込んでマサキに尋ねる。出しでもいい？ 男性器の先端を咥え込んで刺激を与えていたマサキが口を開いた。やだ……。普段よりも小さい声で、けれども明瞭りと反意を唱えたマサキが、手早く自ら服を脱ぐ。彼が何を望んでいるか、シユウはわかっている。マサキは射精を自らの体内に男性器を取めてからにして欲しいのだ。幾度も、幾度も、猛り狂う性欲が治まるまで犯されて、それから。

「なら、そういつまでも咥えていなければいいものを」

思わず零れ出してしまう笑みに、椰揄からかわれていると感じたのだろう。煩い。拗ねたように呟いたマサキの身体をベッドに押し倒す。絡み付いて残っている衣服を剥ぎ、どう挿

れられたいの？ 嘔きかけると、びくんと大きく身体を揺らしたマサキは、好きにしていから、早く……自ら足を開き、シユウの背中に腕を回してきた。

自らシユウの男性器に口を付けたぐらいだ。余程、我慢が利かなくなっているに違いない。シユウは耳朶から首筋、そして乳首へと舌を滑らせながら考える。どう抱けばシユウが作業を続ける間、彼は自慰だけで満足をしてくれるようになるだろう。淫紋の力で欲を叶えることに我儘になっているマサキの身体は、単純な愛撫だけでは直ぐに渴きを感じてしまう。それだったら、シユウはふふ……と声を発して嗤った。どうせ最後のんだ。こちらでも叶えたい欲を叶えさせてもらってもいいだろう。シユウはマサキから一度身体を離し、腕を出しなさい。そう云って、その腕を彼が脱いだシャツで縛り上げた。

既に予想は付いていたようだ。素直に手を出してくる辺り、拘束されながらの性行為<sup>セックス</sup>を、マサキはそれなりに気に入っているのだろう。シユウはベッドの下に押し込んでいた旅行バッグの中から、まずはマサキの抵抗を封じる為にアイマスクを取り出し、その視界を塞いだ。ま……た……？と、マサキが不安げな声を発する。

——見えている方が好きですか。  
聞けば小さく頷く。なら、後で外してあげますよ。そう

云ってシユウは、バッグの中から次いでペニスリング付きのアナルバイブを取り出した。人肌に近い感触の触手が初の体験だったからだろう。生々しい男性器の感触が好きらしいマサキに、こうした玩具<sup>グッズ</sup>が見えてしまうのは、余計な抵抗を招きかねない。だからこそそのアイマスク。そうして視界を塞がれたことで、不安と興奮の狭間にいるらしい。息荒く、けれども大人しく、シユウからのアクションを待っているマサキを横目に、シユウは更に様々な玩具を取り出して、ベッドの脇。順繰りにサイドテーブルの上に並べてゆく。

そこからアナルバイブを取り上げて、膝を開いているマサキの脚の間に押し当てる。与えられる刺激を待ちきれずに、既に開きかけている菊座。肉の壁を覗かせている孔が、バイブの先端をゆるりと飲み込む。や……っ。何をされるかわかったらしいマサキが抗議の声を上げるも、もうすると決めたこと。シユウはマサキの言葉を無視してバイブを根元まで押し込んだ。そして、高くそそり立っているマサキの男性器にペニスリングを嵌め込んでやった。

——どれが好き？

耳元で嘔きかけてやりながら、リモコンのスイッチを入れる。振動を調節してみれば、既に強く突き上げられることに慣れてしまっているからだろう。間隔を短くして強く



振動させるのが、一番反応が良い。あ、あ。やだ、やだ、シユウ。生身の人間を前にして、玩具で達かされるのが嫌とみえる。しきりと首を振って嫌だと声を上げるマサキに、云ったでしょう。シユウは嗤った。

——私好みに馴けると。約束ですよ、マサキ。素直に云いなりになれば、ちゃんとね。あなたの望む通りにしてあげます。

うう、と呻いたマサキが次の瞬間、諦めたように首を振るのを止めた。そう、いい子ですね。シユウはサイドテーブルから片手に収まるサイズのローターを手につつた。スイッチを入れて、暫く。響くモーター音を聴いたマサキは、どうやら以前と同じく、乳首への愛撫を期待したようだった。

少しだけ軽く、乳首にローターを当てて、マサキが喘ぐのを眺める。欲に溺れている口元が、幾度も。絶るものを求めてシユウの名前を呼ぶ。何度見ても飽きない、蠱惑的な姿。それも今日限り——シユウはゆつくりと、乳首から下へと、肌に乗せるようにしてローターを滑らせていった。

マサキの口の端から溢れ出ている唾液が、頬を伝ってシートに染みを作る。淫紋の上、汗ばんで色を濃くしているように映る肌に刻まれた左右対称の子宮。そこまでローターを滑らせたシユウは、ローターを持ち上げると、片手でマ

サキの男性器を支えてやりながら、その先端に。容赦なくローターを押し当てた。

声にならない悲鳴がマサキの口を衝いた。

先端の窪みに嵌め込むようにして押し当てたローターを左右に振ってやる。や、や。最後まで言葉を吐ききれずにマサキが首を振る。いいの？ 尋ねながらシユウは、ローターを押し当てたまま、手に収まりのいい形とサイズをしているマサキの男性器を緩やかに扱いた。あ、あ。途切れ途切れの喘ぎ声。急激な快感の高まりに、碌に言葉を吐けなくなっているマサキの男性器を、シユウはそこからも自らの手とローターを使って翳った。

——イ、ク……う……

行為と快感に慣らされた身体であっても、強い刺激に感じられたのだろうか。不意にそう言葉を吐き出すと、マサキはそのまま呆気なく射精に至った。張りを失った——それでもまだ、半分ほどの硬さは維持している男性器から、ローターを離れたシユウは、菊座の奥で未だ蠢いているパイプの動きは止めず、リングだけを外してやると、再びサイドテーブルへと手を伸ばした。

銀色に輝く金属製のリング。ふたつの輪が根元で繋がりつつも、距離を離して連なっている。片方のリングは陰囊の根元に、もう片方のリングは陰茎の根元に嵌める為のも

のだ。所謂、男性器の持ち。射精までの時間を延ばすのに用いられるペニスリングを、シユウはマサキの半勃ちになっ  
ている男性器に嵌め込んだ。

派手に肉に食い込むことはしないものの、それなりに窮屈さを感じるようだ。それが何であるかを尋ねてくるマサキに一通りの説明をしてやってから、いつもあなたは簡単に達してしまおうでしょう？ シユウは熱で赤く染まりつつ放しのマサキの男性器をそろっと撫でた。

——それでは私も愉しめないのでね。

やや小ぶりにきらいのあるマサキの男性器の根元に輝く、銀色のペニスリング。これからマサキに襲い掛かる快感を思うと、シユウの口元に自然と笑みが零れる。その瞬間のマサキの顔が見たい。どんな表情をし、どんな声を上げ、どう身体が反応するのか……シユウはサイドテーブルから次の玩具を取り上げた。乳白色の一ミリ程の極小の粒の連なり。先端に指が通る程度のリングが付いている。シリコン製の尿道プラグだ。

シユウはその先端を、マサキの男性器の窪みにあてがつた。小さく穴を開いている尿道に狙いを定める。な……に……怯えたようなマサキの声。恐らく彼の性の知識にはない玩具なのだろう。やだ。決して普通では有り得ない感触にマサキが声を上げる。シユウは尿道プラグを掴んでいる指先

に力を込めた。サイズが小さいだけはある。少し力を込めただけの圧力で、するりと尿道にプラグ先端が入り込む。——あ、やだ。何だよ、それ。やだ。やだ。そんなところに、挿れる、な……つ。

流石にマサキが声を上げた。駄目ですよ、暴れては。シユウはマサキの片方の膝を、空いている手で抑え込んだ。

——下手に暴れると、尿道に傷が付きますよ。大事な男性器を失いたくはないでしょう？

酷い。喉の奥から絞り出すような声。すすり泣くような調子でそう言葉を吐いたマサキの膝頭を撫でてやりながら、シユウはゆっくりと尿道の奥へとプラグを埋め込んでいった。あ、あ、なに、なに、これ……最初こそ抵抗をみせたものの、見込んだ通り。被虐を快楽に変えてしまうマサキの身体は、新たな経験と、そこから生み出される刺激が気に入ったようだ。先端のリングを残して全てが埋まったプラグ。こういった経験は初めて？ 指をリングに掛けて軽く引いてみるも、その程度の力では抜けないぐらいにしっかりと、プラグはマサキの尿道に嵌まつている。

——当、たり前だ……ろ……つ……

あれだけ大小様々な触手に翻られていたのだ。もしかしたら、とシユウは思っていたが、どうやらそこまでの刺激を加えられることはなかったようだ。シユウは安堵した。

そして直後には例えようのない恍惚を感じていた。何もかもをヴォルクルスに奪われてしまったことが、シユウに劣等感を植え付けた。その口惜しさを、たつたひとつとはいえ、マサキの初めてを奪うことで果たすことが出来た。シユウはマサキの目を覆っているアイマスクを外した。上気して赤く染まった頬。細まった瞳から涙が溢れている。滅茶苦茶に犯したいくらいに、シユウの嗜虐心をそその顔。愛くるしく映ってどうしようもない。

もつと、もつと。彼を被虐で蕩けさせたい——シユウはマサキの身体の中で跳ね馬のように暴れているパイプを、手を使って抜き差しした。その都度、尿道の底に圧迫感を感じているようだ。マサキの表情がかつてない程に緩む。繰り返し襲ってくる、知らぬ快感。それはマサキをのつびきならないところに追い詰めていったようだ。

——やだ、や。それ、やめ……出る、出る……出るつて、シユウ……っ！

形振り構わず声を上げ、顎を仰け反らせ、腰を上げ、マサキがよがる。嫌なの？ シユウは深くパイプをマサキの菊座の奥へと押し込んだ。や……っ！ 喉を引き攣らせて、マサキが身悶える。出る、ホントに、出る。涙を流すマサキに、出せばいいでしょう。シユウは云い放った。違う。マサキが首を振る。そうじゃなくて、出る。

彼の云わんとするところはわかつている。そんなことは承知の上で、シユウはこうした振る舞いに及んでいるのだ。それもこれもヴォルクルスに対する憎しみと嫉妬の為せる業だ。限らない羞恥を与えられた彼は、どういった表情を晒すのだろうか？ シユウはその瞬間のマサキが見たくて見たくて堪らない。どれだけ欲望に忠実に振舞っているように見えても、僅かな誇りと自尊心を心の片隅に残しているマサキ。マーケットでもそうだった。人前で絶頂に至るのは、どれだけ欲に踊らされようとも嫌だったのだろう。

だからこそ、シユウはマサキの自尊心を砕きたいのだ。そして真実、彼が快楽に攫われる姿を見たいのだ。それがヴォルクルスに自らの望みを奪われてしまった男の、憐れなまでの自尊心の取り戻し方であった。

そしてささやかな復讐でもある。

自分でも捻くれた考え方をしていると思う。シユウはマサキを人ならざる存在に奪われたことが慚愧に堪えなかった。後悔してもしきれない。反省してもしきれない。それだけの過ちを犯してしまった自らを、嘲り罵ってみても晴れない心。過ちを犯していなければ、もしもに彩られた明日がシユウを待っていたやも知れなかったのに。

——やだ、やだ。だったら挿れて。挿れて。お前の×××を、挿れて——……

壊れた再生機器のように繰り返し挿入を求めてくるマサキに、いいの？ とシユウは訊く。言葉を発するのも刺激となるのだろう。ただ強く頷き返してくるマサキに、シユウはその菊座からアナルパイプを抜き取った。足を大きく開かせて、シャツで拘束した両手を頭の上で押え付ける。どうなってもいい。シユウはマサキの菊座の奥へと、自らの男性器を押し込んだ。声にならない悲鳴がマサキの喉を衝いた。

——無理。無理だつて。壊れる。頭、おかしく、なる。

待ち望んだものを、考えもしなかった形で挿入されたマサキは、シユウにとつて恐ろしいまでに思いがけない言葉を吐きながら、尿道に感じている刺激から逃れたい様子で腰を左右に振った。駄目ですよ。シユウは嗤った。だつたら挿れて、と云つたのはあなたでしよう？ 見下ろしている顔が、一瞬、絶望の影に彩られた気がした。

しかしそれも一瞬のこと。

続けざまに突き上げられたマサキの表情が、だらしなくも甘く。蕩けてゆく。あ、やだ、やだ。云いながらも腰を絞つては、シユウの男性器を体内へと引き込んでくる。たつた一点で繋がりが合っているだけに悶えをしない。全快感。全てをこの掌中に収めたかのような恍惚がシユウを襲う。

サーヴァーヴォルクルス、破壊の神。

その禍々しき存在と、シユウは地球を眼下に見下ろしながら、一体と化した筈だつた。月。ルナティクス。その淡い光を放つ衛星は、人の心を惑わす力に満ちているという。だから、ではなかったが、あの時のシユウも、世界の全てを掌握したかのような全快感に満たされていた。けれども、どうだ。今、こうしてマサキと繋がっている。その蠱惑的で、悦楽的な瞬間と比べれば、それはただの通過儀礼ではない。

(——忌々しい。けれども、妬ましい)

自らはその存在と、比肩しないまでに圧倒的な力を誇る神と、同列に並べるだろうか。マサキの身体に記憶をのこせるような。ヴォルクルスとの和合、交歓を果たしてしまった彼は、その鮮烈な記憶に身体を縛られている。過激な行為も受け入れてみせるまでに、快楽の虜となったマサキ。シユウ、無理。無理だつて。ホントに、ホントに、出る。その記憶に残りたい。甘やかな声を発しているマサキの言葉を聞きながら、シユウはそれでもその静止の訴えに耳を貸すことはせず。

——あ、ああ、あ、あーっ……

マサキの男性器が全てを吐き出すのを、黙って、けれどもかつてない程の恍惚に抱かれながら、見下ろしていた。

※ ※ ※

気が狂いそうだった。

犯され尽くした感のある身体をベッドではなく床に横たえて、マサキは濡れたベッドの後始末をしているシユウを、腕に伏せた顔の隙間から盗み見ていた。

いつも通りの涼やかな、けれども無表情に近い表情。昔は上から見下ろすような言動も相俟って、取り澄ました顔をしやがってと思つたものだったが、今はそうは思わない。いつだったかシユウが何かのはずみに洩らしたことがある。表情から感情を読み取られるのが嫌なのですよ、と。何故そこまで頑なに、彼が自らの心情を開陳するのを厭うのかはわからなかったけれども、濡れたマツトとシーツを黙々と交換している姿を眺めていると、少しだけ、その理由がわかるような気がした。

きつと彼はこうした瞬間に、気拙さや気恥ずかしさ、或いは欲びを感じていると気付かれるのが嫌なのだ。

響く、靴音。では、と短く言葉を残してシユウが寢室を出てゆく。その靴音が、心なしか軽やかに聞こえるのは、マサキの気の所為では——ないだろう。でなければどうして、ああまでマサキの尊厳を奪うような行為に及んだもの

か。そしてその結果、ベッドを汚すことになったマサキを責めもせずにいられたものか。

マサキは身動きもままならない程の倦怠感に支配された身体を、床から起こすことが出来ずにいた。初めて経験した快感と同時に襲ってきた抜けるような解放感。訳もわからない快楽の中で全てを解き放つたマサキを、シユウは容赦なくベッドから降ろすと、床の上で。何度も、何度も、マサキを犯した。その都度、プラグを尿道に嵌め込んだまま射精を繰り返したマサキは、出るものの無くなった感のある男性器に、終わりにしてくれるようにシユウに頼んだ。

——これからが一番楽しいところでしよう？

少量の透明な汗を吐き出すだけとなった男性器は、けれども淫紋による効果なのか。勃起を止めようとはせず。シユウの膝の上に背後から抱え込まれるようにして腰を落とし、た体勢で、そろそろ何度目かわからなくなり始めた絶頂の前兆に、マサキが顎を上げて喘ぎ始めた矢先だった。肩に頭を預けているマサキにそう囁きかけてきたシユウが、その手をプラグの先端にあるリングへと伸ばしてきた。ずるり。半分ほどプラグが抜かれ、マサキの全身を快感が駆け抜ける。それが治まるよりも早く、ずるり。再び差し込まれる。

——あ、あ。

腰を浮かしかけたマサキの身体を、シユウの空いている手がぎつく抱き留めている。どこからそれだけの力が出るのかと思うぐらいに、マサキの動きを腕一本で完膚なきまでに封じたシユウは、そうして幾度もマサキの尿道にプラグを出し入れた。長く挿入され続けていたこともあつて慣れを感じ始めていた刺激が、がらりとその様相を変えた。もどかしくて焦れたい。じわじわと滲み出るような快感が常に男性器の中にある。そして背中走るぞくぞくとした快感……マサキは堪えきれずに腰を振った。達きたい。次第にそれしか考えられなくなつてゆく。達きたい。

そのマサキの腰の動きに合わせるように、シユウの腰が動く。突き上げられる度に感じる快感。陰茎の根元を前と後ろから同時に刺激されているような感覚。いく、イクつ。それが瞬間的に強まったかと思うと、腹の中で一気に弾けた。射精を伴わない絶頂。オーガスム腰から下が震える。あ、ああ……。束の間の解放感にマサキは声と共に息を大きく吐き出した。だというのに。

シユウは動きを止めなかった。緩くプラグを抜き差ししながら、マサキを突き上げてくる。や……。まだ。今、達つたばつか……。反射的に声を上げたものの、云つたところでシユウの動きは止まらない。過敏になつている男性器が、繰り返される刺激に悲鳴を上げる。あ、あ、イク。またイ

ク……。つ。さして間を置かずに迎えた二度目の絶頂。オーガスムそこから後の記憶は曖昧だ。休む間もなく尿道と菊座を責められては、射精に至ることなく絶頂を迎える。オーガスム

五感が消失し、ただただ絶え間ない快楽に堕ちてゆく。理性など欠片も残らない。

そうして、自らの発している声が喘ぎ声なのか、それとも泣き声なのかわからなくなる頃に、ようやくシユウが射精を迎えたようだ。どろりとした感触を身体の奥に感じた直後、それでマサキはようやく長い恥辱に塗れた性交から解放された。

——あんな経験をしてしまったら、元に戻る自信がない……)

マサキはのそりと身体を起こした。戒めを解かれた手首は、今回はシャツで拘束されていたこともあつて、痕跡が残るようなことはなかったものの、消えぬ紅斑の数は増えるばかりだ。それを確かめながらベッドに戻る。流石に寝たい。そう思いながらベッドに身体を横たえた瞬間、ようやくマサキはその事実思い至つた。

(——ああ、そうか……)

そう、これがシユウとの最後の性行為になるかも知れないことを。

なし崩しに性行為に突入してしまったからこそ詳細を聞

き逃してしまつたけれども、淫紋のメカニズムがわかつた今、シユウが今のこの状態をそのままにしておく筈がない。早晩、正しい解呪の為の術式を組み上げてみせることだろう。そして彼のことだ。一度で正しくマサキを淫紋の支配下から解放してみせることだろう。そつか……マサキはベッドの中で溜息を吐いた。未練を感じている。いざ真実、終わりを迎えようとしている今となって、尚。この生活に。喜ばしいことではないか！ これで喉の渇きが潤わないような性欲から解放される。

四六時中、襲い掛かつてくる欲望。あの三日間に比類する快感を得たい。それが満たされた直後のひとときに息を吐けるような安らぎが訪れても、時間が経てば元の木阿弥だ。あれが欲しい。アレが欲しい。アレガホシイ。邪神教団の信者によつて生み出されたもう一人のマサキと、彼らによつて刻み込まれた淫紋の力は、幾度、容赦なくマサキの理性を奪つただろう。それを忘れてしまつた訳ではあるまい。だのにマサキの口を吐くのは溜息ばかり。

（——口の中に出したいつて云つてた割には、結局しなかつたな……）

それがどうしようもなく、棘となつてこの胸に刺さる。マサキは足を開いた。双丘の奥へと指を忍ばせ、菊座から滲み出ている精液を掬う。酷い有様だ。腿まで垂れた体液

は大半がすっかり乾いて、肌にこびり付いてしまつて。後でシャワーを借りよう。そう思いながら、マサキは指に掬い取つたシユウの精液を舐めた。

ヴォルクスの触手が吐き出していた体液とは異なる味。欲に漬け込むような甘さにはない。舌先に感じた苦みばしつた味はマサキの想像を大きく裏切つたものだつたけれども、何故かその味が——マサキには愛しく感じられた。

※ ※ ※

解呪の為の術式を組み上げる合間に二度だけ寝室に足を踏み入れたシユウは、深い眠りに就いているように見えるマサキに定期的な解呪を施した後、少しだけ、ベッドの端に腰を落としてその顔を眺めた。

酷い真似をしてしまつた。

後悔する気持ちがないと云えば嘘になる。けれども、結局は欲が勝つた。二度と得られない機会の為に、これから先のものにも彩られた人生を捨てたシユウは、予測の範囲を超えることのない出来事ばかりが起こる予定調和に満ちた人生に戻るのだ。そう考えてみれば、今回の件に関しては、教団に感謝をしてもいいのやも知れない。人生最大の

危機、そう呼んでも差し支えないレベルのアクシデントは、渴ききった泉に水を呼び戻すように、シユウの心と身体に実りを与えてくれた。

一方的な片思い。誰かを想い続けるのに必要なのは根気だけとはよく云ったものだが、実際にはそれだけでは足りなかったとシユウは返す刃のように思ったものだ。

気力も要れば体力も要る。

会えない日々を耐え抜ける精神力。恋をし続けるのに根気以上に必要なものがあるのだとしたら、それに勝るものはない。少なくともシユウにとつては、必要とするものを与えられない渴望感は、容赦なくその気持ちを削いでいったものだ。だからこそその絶望感から再び這い上がる為には、とてつもない精神と肉体のエネルギーが必要になったものだった。勿論、本人を目の前にしてしまった瞬間には、体力も精神力も消耗することなく、気持ちは高まりを迎えたものだったけれども。

例えばシユウがマサキと性交渉を持たなかったとして、これまでのように禁欲的スーパーストイックで純粹な付き合いを続けたところ、恐らくふたりの距離がシユウの望むように縮むことはなかっただろう。知人ではあっても、味方にはなれない。友人には程遠く、けれども心安く接せる。それはマサキの日常生活に入り込めないシユウの性質的な問題でもあった。

シユウはマサキと道が交われる程に近しい属性を持つていないのだ。地底人と地上人の合いの子、王族ではあったものの指名手配犯……そう考えてみると、シユウⅡシラカワ、或いはクリストフⅡマクソードという人間はなんと中途半端な存在であることか！

人は共通体験や共通認識の共有を経て、親しさを増してゆく生き物だ。そういった意味でシユウとマサキは——確かに戦禍を共に潜り抜けてきた閥柄ではあったものの、常々付き合えるまでの日常性には乏しいと云わざるを得なかった。だから、きつと。シユウは安らかな表情を湛えて眠りに落ちているマサキの髪を撫でた。もう二度と触れることのない髪。その柔らかな感触を指に留めて、忘れない。そう強く心に誓いを刻む。

正気を取り戻したマサキに、シユウは酷い男だと思われるに違いない。尊厳を奪うようにして性交に及んだ。何度も何度も。その記憶はマサキにとつて、決して快いものとして残りはしまい。それでも、シユウは自らの人生に後悔を残さない為に、そうせずにはいられなかったのだ。

悩み惑いもしたが、だからこそ至れた境地がある。

もし仮に、今回のシユウの行いが知られたとして、その正否の判断を任せたとしたら、誰しもがしたり顔でシユウが欲に溺れただけと思うことだろう。それでいい。シユウ



は口の端に、ひとさしの寂しさを滲ませながら微笑んだ。訪れる確率の低い未来と、叶えたい欲を秤にかけた。その結果が、浅ましい欲に踊らされたひとりの男のありふれた日常譚となっても構わない。

出来ればもつと心から笑える結果を導きたかったものだったが、あれだけマサキを思うがままに凌辱しておきながら、それ以上を望むのは贅沢に過ぎる。何もかもを手に入れると思うまでに自らの力を過信しなくなったシユウは、そうしてマサキから手を離して寝室を後にした。

三度目にシユウが寝室に足を踏み入れた時、マサキはようやく目を覚ましたといった体でベッドの上でぼうっと、窓の外。闇に覆われることのないラ・ギアス世界の広がりのある豊かな自然に視線を向けていた。マサキ。名前を呼ぶと、ぴくりとその肩が跳ねた。

寝食を拒否して励んだ術式の組み上げは完了していた。皆まで云わずとも肌で感じ取ったようだ。黙ってマサキがベッドに横になろうとするのを、そのままで大丈夫ですよ。シユウは言葉で制して、先ずはとベッドを起点とした魔方陣を高速詠唱で展開した。

いつもシユウが使用している調和を軸とした魔方陣とは異なり、生命を軸とした魔方陣。巨大なエネルギーを必要とするだけあって、高速で呪文を詠唱しても、全ての魔方

陣の展開には十秒以上の時間を要した。▽≡※へ○※……青い燐光に包まれた光が、六芒星の魔方陣を宙に浮かび上がらせる。それと同時に、マサキの口唇が僅かに動いたような気がした。何かを言葉にして発しようとしているようにも映る動き。けれども彼は、少しもしない内に、諦めたように首を振った。気掛かりなことばかり増える。そうシユウは思ったが、解呪の儀式を止めるまでのことでもない。続けて、先ずは淫紋の解呪に移る。

——ルーク・シン・ケイルム・インナ・ニシ・ティネブリス……

仕組みさえわかってしまえば、その解呪に必要な術式を組み上げるのは、赤子の手を捻るより容易いものだった。それがこれだけの長き時間に渡って、シユウの手を煩わせてしまったのは、マサキに淫紋の付与と人格の生成という二つの術が同時進行でかけられてしまっていたからだだった。

——イグニ・サルティンデイス・フウランティビンティ・エストアンティ・サクアス・ウルジアンス・タラ……

それらが相互に作用し合った結果、通り一遍の解呪では僅かにその効果を押さえ込む程度にしか作用しなくなってしまう。だからこそ、先ずは淫紋の解呪が先となる。マサキの中に生み出されし人格の力によって、効果を増幅させるに至った左右対称の子宮。まるで刺青のように肌に刻

み込まれている紋様を先んじて消失させてしまえば、もうひとりの人格として多大な影響をマサキに与えるに至った精神思念も、猛威を揮うことはなくなる筈だ。

——ダ・ミイ・ヴィイス！

何らかの刺激を下腹部に感じたようだ。服の上から淫紋がある部位に手を当てたマサキは、眉を歪め、口唇を噛み締めると、じつと。痛みを堪えているかのような様子で、身動きもせず。ルーク・シン・ケイルム・インナ・ニシ・ティネブリス。繰り返される呪文に耳を塞ぎたくなるのだろう。どうかすると耳に向かいそうになる両手の指先を、衣服に絡めて動きを封じている。イグニ・サルティンデイス・フウランティ・ビンティ・エスタアンティ・サクアス・ウルジアンス・タラ。脂汗が額に浮かぶ。うう、と苦し気な呻き声がマサキの口唇の隙間より洩れ出た。ダ・ミイ・ヴィイス！ そうして、シユウが三度解呪の呪文を唱え終えた矢先に、それは来た。マサキの身体が弾かれたようにベッドに仰向けに沈む。次いで腹部が跳ねた——かと思うと、マサキの目がぱちりと開く。

怪訝そうな表情で身体を起こした彼は、急ぎ服を捲った。そこにあつた筈の淫紋が見事に消失している。

きつと、それまであつた性的な渴望が、一度に消え去ってしまったに違いない。シユウはマサキの股間を見た。布

を伸長させていた彼の男性器の昂ぶりが、すっかり治まっている。

終わつたのか……？ 淫紋の作用が失われたことで、蓄積された疲労がどつと押し寄せたようだ。そう眩くなり、マサキは身体を起こしているのもしんどいといった様子で、ベッドに身体を横たえた。女性にとつて最も尊い器官を貶めるように性の象徴<sup>シンボル</sup>としてみせた忌まわしき紋様。その終わり際はかくも呆気ないものであるのか。シユウは感慨に耽るより徒労感に苛まれたものだったが、だからといって、安穩と手を休めている暇はない。次はマサキの中にあるもうひとつの人格の処理だ。

「もうひとつ、あなたの中にあるもうひとつの人格の処理があります、休んでくださっても結構ですよ。下手に動き回れない方が、解呪もし易くなることでしょう」

「そつか……なら、寝る。凄く、眠いんだ」

そのまま泥に沈み込むように一気に眠りに落ちていったマサキに、シユウは続けての解呪を施した。これまでの経緯からして、もうひとりのマサキは相当に暴れて抵抗をしてみせるかと思いきや、びくびくと電気が走っているような震えが見られた程度。それ以上さしたる反応もないままに、恐らくは、その存在を消失させたのだろう。ベッドの上には、静かな寝息を洩らして眠りに就いているマサキの

姿があるばかり。

自らを手古摺てこずらせたもうひとりの人格の静かな終わり方に、けれどもシユウ自身もまた、マサキ同様にひたすらな疲労を感じずにいられなかった。

## 6. 還るべき日常、その在るべき姿

数時間おきにマサキの様子を確かめながら、その目覚めを待つこと十時間程。すつきりとした目覚めを迎えられたようだ。寝室から出てきたマサキの表情を見たシユウは、自身が施した解呪が、今度こそ真実の成功に至ったのだと感じずにはいられなかった。

常に性欲に悩まされていたからか、澀んだ瞳。夢の中を彷徨っているかのように精彩を欠いていた瞳は、もうそこにはなかった。口唇にしてもそうだ。常に薄く開いて吐息や喘ぎ声を吐き出していた口唇は、今はしっかりと結ばれている。心なしか頬に差す赤味も増したように感じられる。覇気が漲る面差し。シユウが良く知り、見慣れたマサキⅡアンドーの姿がそこにあつた。

「具合は如何です」

「快調だ。快調過ぎて怖いくらいだ」

「これまでのような異常が感じられたことはありませんか？」

「ない。あの忌々しい呪文が聞こえてくることもなくなったし、腹部に熱を感じることもなくなった」

そう。シユウは微笑んでみせた。今の所、順調にマサキの回復は進んでいるようである。

魔術の効果でしかない異常の消失を確認出来た今、シユウは直ぐにでもマサキを元の場所に返したいと思ったが、マサキをヴォルクルスから解放した際の失態が脳裏に蘇る。あの時は直後に異常が表に現れたが、今回はそれよりも遥かに強力な解呪を施している。もしかすると忘れた頃に再び異常が出ないとも限らない。どれくらいの経過観察をすればいいものか、初めての経験だけにシユウは悩んだが、丸一日ぐらいは様子を見るべきか。そうマサキに告げると、わかった。マサキは短く答えて、シユウに勧められるがままシャワーを浴びにバスルームへと向かって行った。

バスルームから流れてくる水の音。それを子守歌替わりに、シユウは僅かに仮眠を取った。思えばもう何日も纏まった睡眠を取っていない。長く眠らずの生活を続けていると、簡単には深い眠りに落ちれなくなる。うたた寝と呼ぶに相応しい程度の眠り。その眠りからシユウを呼び覚ましたのは、シャワーを終えたマサキの声だった。

——食事の用意をしてもいいか？

眠っているようには見えなかったようだ。そう云って、シユウの返事を待たずに率先してキッチンに立ったマサキに、シユウはようやく日常的な些事に意欲を感じられるようになるまでに、彼が回復していることを悟った。今思えば病人に等しい状態だった。これまでのマサキは、常に欲

望に感情を翻弄されている状態だったからか、シユウが強く勧めなければトイレ以外で自らベッドを出て動き回ることもなかった。

異常が消失すれば本来のマサキが姿を現わすのは当然のこと。

それでいい。シユウは「手伝いますよ」と、立ち上がったマサキの隣に立った。そして彼に支持されるがままに食材を切り分け、缶詰を開き、調味料を用意する。もう、熱っぽい瞳でマサキがシユウを見上げることはない。当たり前の日常に戻った安心感と一抹の寂しさ。けれどもそれでいいのだとシユウは納得をしていた。

後悔ばかりが先に立つ人生に何の意味があらうか。

嵐のように過ぎ去った九日間。ヴォルクスの魔の手からマサキを救出し、このアパートメントに連れて来てから、気付けばそれだけの日数が経過してしまっていた。何と密度の濃い九日間だったろう！ 思いつく形として残すことに執着しないシユウは、いずれこのアパートメントを処分するつもりでいた。記憶は残る。それも鮮烈に。忘れることなどない。シユウは他愛なく話しかけてくるマサキの言葉に応じながら、彼が主導して作った料理をテーブルに並べた。

思ったよりも器用な性質であるらしい。チーズと牛乳と

卵をふんだんに使ったスクランブルエッグ、ベーコンを巻いたウインナー、冷凍のほうれん草とコーンをソテーした付け合わせ。野菜を追加でたつぷりと投入したミネストローネ……ひたすら性行為に明け暮れていたからだろう。余程、腹が空いたとみえて、どれもふたり分とは思えない量だった。それを山と積んだパンと一緒に消費してゆくマサキを前にしたシユウは、思わずこう呟かずにはいられなかった。「あなたが三日もいてくれれば、大量に買い置きした食材も消費出来そうな気がしますよ」

「あー、そういう結構買った……でも缶詰とか冷凍食品が殆どだろ」

「ここで生活することもそうなのですよ」

「お前、どれだけ方々に隠れ家を持ってやがるんだよ」  
それでも、大量に買い置きした食材をそこまで使うことなく、この淫欲に満ちた日々を終えられるのは僥倖である。つい昨日までの生活を振り返って、シユウはつくづくそう思った。あんな生活を続けていたら、マサキのみならずシユウの人格も荒廃していたことだろう。

食事を終えると、これまでの鬱憤を晴らすかのように、マサキは自ら動き回った。皿洗い、掃除、洗濯、ストレッチ……ベッドの上でせせこましく生きていることを、普段の彼は良しと出来ないのだ。かといって、経過観察中の身

外にひとり出てはならないと思っているのだろう。ストレッチの手伝いを頼まれたシユウは、延々と眠り続けて硬くなった彼の関節をほぐしてやりながら、後で公園にでも散歩に出てみますか——と、尋ねてみた。

「行ってもいいっていうなら行くけど、大丈夫なのか」

「その様子ならひとりで行かせても問題はないと思います。念には念を押した方がいいでしょう。私が一緒なことに不満がなければ、行きたいところに行つて構いません。私はあなたに同行しますよ」

「つつてもお前、何かすることがあつたりするんじゃないのか」

「優しいことを云つてくれますね。大丈夫ですよ、マサキ。すべきことはありますが、それはここに居ても出来ないこととですしね。あなたの解呪が無事に済んだことを確認しきつてからでも遅くはありません」

「そつか。その言葉を聞いたマサキは安心したようだった。きつと、シユウに迷惑をかけたことを相当に案じていたのだろう。それならいい。安らかな笑みを零すと、でも——と、言葉を次いだ。

「特に行きたいところもねえしな。つていうか、そもそもここが何処の街かもわかつてねえし」

魔装機を駆つて、気紛れに。西に東と方々に足を運んで

いるように見えるマサキにも、行つたことのない街があるようだ。この街もそうした街のひとつであつたのだろう。それがシユウには意外に感じられた。ラングランの領土は、風の魔装機神の機動力をもつてしても、それだけ広大なものであるのだ。

散乱した資料が片付いたリビングで、そうしてストレッチを終えたマサキを連れて、シユウは近場の公園に散歩に出た。久しぶりにまともな精神状態の自らの足で外を歩いたマサキに、その感想をシユウは求めてみた。身体が軽い。まだ疲労が癒えていないシユウと比べて、格段に軽快な足取り。歩くのが遅え。そうシユウに軽口を叩ける程度には、精神的な回復も進んでいるようだ。

思つた程、彼にとつてあの日々はダメージではなかったのかも知れない。

それともそれは、シユウを目の前にしているからこそその強がりでもあるのだろうか？ いずれにせよ、それだけ元気に振舞えるのであれば上出来とシユウが思わずにいられない程度に、遅しさを取り戻したマサキ。このまま順調に一日が経過すれば、マサキを仲間たちの許に戻してやれるだろう。もし仮に異常が出たとしても、この調子ならば、自力でシユウの許に辿り着けそうでもある。それならばそれに越したことはない。切羽詰まった状態さえ脱せれば、

後はどうにもなる。

お互いに日常に戻る日が来たのだ。

不在の理由をどうしましょうか。公園から戻ったシユウは、早速次の食事の支度を始めているマサキに、彼自身の考えを尋ねてみることにした。

「教団に後を付けられてたことに気付いたから、でいいんじゃないか。下手に誤魔化そうとすると、話のつじつまが合わなくなりそうだしな。町の人に被害を出さない為に、町を離れたところでやられたつていうことにでもしておくさ。そこをお前に助け出されたつてさ。だから、お前もそういうことにしておいてくれると有難いんだが」

腹芸が得意ではないらしいマサキは、殆どそのまま真実を伝えることにしたようだった。構いませんよ。シユウは頷いた。マサキの意見も聞かずにシユウが勝手に筋書きを考える訳にもいかなかっただけに、きちんとそこまで考えを及ばせてくれたのには驚かされる。しかも殆ど真実である。余計な嘘を重ねるより、その方が疑念を招き難いだろう。

「怪我を負ったあなたを保護して手当てをしていたことにしましょう」

「悪いな……色々と迷惑かけちゃって」

「今回の件は、教団の動きを把握しきれていなかった私の

落ち度ですよ。気になさらなくて結構。むしろそれは私の台詞ですよ、マサキ。そうですね……明日、問題がないようでしたら、あなたを王都に送り届けることにしましょう。そのついでに少し事情を説明しておくことにしますか」

「そこまでしなくともいいような気もするけどな」

「あなたにばかり負担が行っている現状に、私は少しばかり物思うところがあるのでね」

久しく動き回っていなかったマサキは、食事を終えると眠気が襲ってきたようだ。そろそろ寝る場所を交換しないかと、長くベッドを占拠していることに心苦しさを感じていたのだろう。そう提案してきたものだったが、どうせ後一日のことだ。シユウはすることがあるからとマサキを寝室へと追い立てた。

もう夜中に起きて、マサキに定期的な解呪を施してやる必要もない。マサキの際限ない欲望に付き合う必要もない。ひとりの時間を暇潰しの読書に充てたシユウは、マサキが寝室に姿を消してから一時間後。リビングのソファで、ようやくの長い眠りに就いた。

夢を視た。

それはとても甘美な夢であったような気もするし、有り得ない未来を映し出している夢であったような気もする。いずれにせよ、今また降り着いた日常を感じさせるような

夢であつたのは間違いない。そこにはマサキがいて、サファイネがいた。モニカもいたし、テリウスもいる。テュツティたち魔装機神の操者たちもいれば、リユーネやウエンディもいる。それは騒々しい、けれども懐かしい日々だった。

今暫くこの夢の中に留まっていたい。そうシユウをして思わせるまでに、都合の良い世界が広がる瞼の向こう側。シユウ。自らを呼ぶその声が、夢の中のマサキではないことに気付いたシユウはゆっくりと瞼を開いた。あまり朝に強くない人間であるシユウは、剣呑な己の表情をマサキに晒すのに些かの躊躇いを感じはしたが、この状況下でそれをどうこう云つても何が変わる訳でもない。鼻腔を擦る匂いからして、マサキはどうやら朝食の準備をしてからシユウを起こしにかかったようだ。それならば起きないのも失礼に当たる。シユウは出来るだけゆつたりと身体を起こした。

時間を問うととうに昼を迎えているらしい。マサキに解呪を施したのが一昨日の夕刻頃のことだ。そこからちゃんと眠り続け、ようやく活動の時間を得て、そして再び眠りに就いたマサキはすっかり元氣を取り戻しているようにしか見えない。

もしかするとあまり疲労が顔に出ない性質なのかも知れなかったが、シユウと比べると明らかに生気に満ちた顔。

それは、それだけシユウがこの十日間余りの日々をマサキの為に費やしてきた結果でもある。起き抜けのあまり働かない頭でそこまで考えたシユウは、氣分を害している場合ではないと氣を引き締めた。そして先ずはシャワーと着替えをと寝室に向かう。

「特に問題がなければ、王都に送り届けてくれるんだよな」  
「勿論。とはいえ、見た目はもう充分回復しているように思えますがね。どうですか、氣分は」

「氣持ち悪いくらいに元通りだ。元通り過ぎて落ち着かない」

「じきに慣れますよ。本来はそれがあなただったのですから」

そう会話を交わし、バスルームに向かう。熱い湯を頭から被ると、途端に目が覚めたような氣がした。

終わったのだ。

もう二度と性的な意味でシユウがマサキに触れることはない。欲望に侵食された非日常は、淫紋やもうひとりのマサキといった悪夢と共に去って行つた。教団の教導派のこれからの動向といった残されている問題はあれど、それはシユウやサファイネといったかつての柵に翻弄されている人間たちの問題である。こうして再びシユウとマサキの道は分かつたのだ。それぞれがそれぞれの為さなければならな



いことに邁進する道へと。

その道がいつかまた交わることもあるだろう。

だか、そこにはきつと、お互いの仲間がいる。こうして一対一で向き合うように日々を過ごす時間に恵まれるなどといった奇跡は起こるまい。けれども、それでいい。シユウは聞いている手のひらを強く握り締めた。この手に掴んだ夢がある。それは今となつては泡沫うたかたのように儚い過去であつたけれども、確かにシユウがこの手に掴んだある種の夢の成就であつた。

バスルームから出たシユウはすっかり遅くなつた朝食をマサキと共にし、今日のこれからの予定を話し合つた。丸一日以上を無事に過ごせているのだ。このまま王都に送り届けても問題ないとシユウは考えていたが、マサキはそれでは安心出来ない様子だつた。無理もない。シユウは第三者としてマサキを外側から眺めているだけだつたが、マサキ自身は当事者である。ほぼ二週間に渡つて性欲に煽られ続け、衝動的に性行為セックスに及び続けた身体。その欲望が呆気ないくらいに容易に、自らの体内から消失したのだ。もしや、と疑いを挟みたくなるのは当然の成り行きだつた。

「しかし確かめるといっても、経過を観察するしかありませんしね。これ以上、あなたをここに留めておくよりかは、一度王都に戻つてもらつて、日常生活を無事に送れるかど

うかの確認をした方がいいように思えます」

「それが怖いんじゃないかよ。お前がいなくてどこで何かあつたらと思うと」

「もう少し、あなたはあなた自身を信用してもいいと思いますが――」

そこまで自らの考えを口にして、ふとシユウの脳裏にある案が思い浮かんだ。

とはいえ、自ら考え付いてしまったその案を、今更行動に移すのも気が引ける。さて、どうしたものか……シユウは浮かない表情で溜息を吐いているマサキの表情を真向かいにして、暫く葛藤した。そして結論を得た。既に決意したことを翻すのは気が引けたが、それでマサキが心の安寧を得られるというのであれば仕方がない。

マサキとその名を呼んで、シユウは立ち上がった。マサキは首を傾げてみせたものの、シユウに対して警戒心を抱いてはないうだ。次いで立ち上がると、シユウの後を付いてくる。無防備なものだと思いつつも、シユウはマサキをリビングのソファに座らせた。

「座っているのと横になるとどちらがいいですか」

「何をするんだ？」と尋ねてくるマサキをしらと無視して、なら、そのままいいということにしましょう。シユウはマサキの隣に座つた。そしてきよとした表情でシユウ

を見上げてゐるマサキの頬を、おもむろに撫でた。

少しは驚いたり警戒心を剥き出しにしてみせるかと思いきや、されるがままでいる。シユウは頬から手を滑らせた。口唇をなぞる。ぴくり、とマサキが身体を揺らした。何だよ、何を――。狼狽えているマサキに、どう？ とシユウは尋ねながら、そこから更に肌に沿つて手を滑らせていく。首を辿つて、鎖骨。鎖骨を下りて、胸。そして、そうつと。シャツ越しに乳首を觸つた。

あ、や。んんつ。甘つたるい声がマサキの口を吐いて出る。感じる？ と耳元に囁きかければ、そりや……と、既に荒くなり始めている息に紛れ込ませるように言葉が返る。ほぼ十日に渡つて性行為に明け暮れた身体は、簡単には覚えた快感を忘れないということか。それでも――シユウはそこで手を離れた。焦燥感に駆られるように行為を求めたあのマサキはもういない。

「もう、大丈夫ですよ。あなたは先日までのあなたではない。自分でもわかつたでしょう」

「わかるけど……」

熱を帯びた瞳がシユウを見上げている。中途半端は嫌だ。そう言葉を吐いたマサキの手が、シユウの首に回される。口付けを求めて近付いてくる口唇が、シユウの口唇を捕らえる。全てを取り戻したかのように見えても、抱えてしまつ

た過去は消せないのだ。夢中になって口唇を貪るマサキの背中を掻き抱きながら、シユウは変わってしまったマサキのこれからの生活に思いを馳せた。

――妬けますね。

剥がれた口唇で耳朶<sup>みみたぶ</sup>を食む。何がだよ。快楽の前に自尊心を捨てることを覚えてしまったマサキ。彼に待ち受けている未来を思えば思つただけ、シユウの心は千々に乱れる。それを努めてマサキに悟られないようにしながら、シユウは答えた。

――そういった表情を他の人間も見ることになるのかと思うとね。

――冗談じゃねえ。誰が他の人間なんか……つ。

そこまで口にして、はつとなつたようにマサキは口を閉ざした。その言葉が余計な誤解を招きかねないことに気付いたようだ。わかつてゐる。それは見栄も意地も自尊心も捨てさせられたからこそその甘えに他ならない。シユウはそう思った。恥をかなぐり捨て、外間も憚らずに、欲望の解消を求め続けた相手。だからこそマサキはシユウに依存せずにはられないのだと。

わかつてゐますよ。シユウは嗤つた。我ながら皮肉めいた笑い方をしていると思ひながらも。胸の内が露わとなつたその嗤いを改めようとは思えずに。けれどもマサキはこ

う口にするのだ。いいや、わかってない。そしてシユウの気持ちを見透かしているかのように言葉を継ぐのだ。お前は どうして俺を抱こうと思ったんだよ。

さあ。シユウはこの期に及んで嘔くことしか知らない己の、子供めいた感情表現能力を恨めしく思いながらも、何故マサキがそう問いかけてくるのかわからずに、

——あなたにきちんとした相手が出来るまでですよ、マサキ。それまでは付き合いますよ。

云った途端、マサキがシユウの胸を叩いた。馬鹿じゃねえの。そして彼はままならない胸の内を、欲望に晒されたことで気付いた答えを、こう口にするのだ。

——その相手はお前がいいって云ってるんだよ。

そして、シユウの肩に顔を伏せて、二度と云わねえ。そう呟いたマサキに、今日こそは、あなたを自分の居場所に戻したかったのですけどね。シユウは自らの気持ちをどう表せばいいのかわからぬまま。そうマサキに嘔きかけながら、しなやかな彼の肉体へと手を伸ばしていった。

△了▽

---

---

## 淫獄の宴～ユニオ・クム・ディオ～

発行日 2022 年 11 月 27 日

著者 @kyo

<https://www.pixiv.net/member.php?id=5201329>

連絡先 gotomail\_yuri2828@yahoo.co.jp

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。

---

---